

---

# ウィザード～魔法使いは月に照らされて～

有華 桜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ウィザード〜魔法使いは月に照らされて〜

### 【Nコード】

N2585D

### 【作者名】

有華 桜

### 【あらすじ】

主人公、月城昂はどこにでもいるごく平凡な男子高校生。唯一他と違う部分といえば、家族を失い一人暮らしを続けている事ぐらい。ある日、自宅のベッドで目が覚めると、そこには見知らぬ少女が立っていた。少女は彼の事を「兄さん」と呼ぶが……。少女との出会いが、少年を危険な「魔法使い」達の争いに巻き込んでいく！現代系ファンタジー小説『ウィザード』の幕が今、開かれる！

## 第一章 / 月下の魔法使い 上

過ぎ去った冬の寒さが未だ少し残る春のとある早朝、ゆらゆらと揺れるカーテンの隙間から照りつける眩しくも気持ちの良い太陽の日差しを浴びながら、俺こと月城昂つきしろすはるはあるアパートにある自室のベッドで寝転がりながら心地良く眠っていた　はずだった。

「……ねえ、起きて。起きてってば」

突然だった。誰かの声が聞こえ、俺は夢の世界から覚醒する。もっとも、どんな夢を見ていたのかなんてのは目覚めた瞬間に忘れてしまうのだが。

さて。少し解説すると、俺は現在ワケあって一人暮らしの真っ最中である。そんな現状、朝に弱い俺を毎日のように起こしてくれる同居人だの、親だの、兄弟だの、可愛らしい妹だの、そんなものは当然のごとく存在しない。一人だけ身近に幼馴染がいるが、毎日のように起こしにくるほど可愛らしいものでもない。

朝早く起きると言うことが苦手な俺は、毎日のように遅刻ギリギリの瀬戸際にいるような状態で、性懲りもなく遅刻に焦って朝食すらまともに取れないような忙しい朝を迎えるはずだったのだが、

「おはよう、兄さん？」

ふと寝ぼけ眼で壁に掛かっている何の変哲もない円形時計に視線を向ける。時刻はまだ早朝とも言うべき午前六時過ぎ。とても俺が起きるような時間帯でないという事は先程の説明で十分に理解出来るだろう。それだけならばまだ理解するにあたっの許容範囲内だと言える。たまに何かの気まぐれで早起きをしてしまうこと程度なら年に一度や二度あってもいい。多少は現実を疑うかも知れないが、それを自分自身の目で確かめればすぐに真実だと理解できるし、そんな偶然に感謝こそしてもそれ以上の疑問を投げかけたりは断じてしないとも言いきれる。

だが、今この目に映る光景は

「どうしたの、まだ寝惚けてる？ 朝食ならもうすぐ出来るけど、先にコーヒーでも飲んで目を覚ます？」

一人の少女がエプロン姿で立っている。そして、その少女は首を傾げ呟いた。

「……兄さん？」

いやいやいや待てよ待ってくれ落ち着け落ち着いて現実を見る月城昴。まさか一人暮らしな俺の部屋でこんなオイシイ ではなく、こんなおかしなシチュエーションがあつてたまるか。それに『兄さん』と呼ばれた気がするが、俺に妹なんていただろうか。それもこんな可愛い妹が もちろんいる訳がない。

記憶を辿ってみても俺はこんな子など知らないし見た事もない。ましてや妹だなんてなんの冗談だ。目を覚まして突然こんな場面に出くわせば、いくら俺が普通の人間だからってこれは夢じゃないかと疑いを持ってしまうのも無理はないと思うのだが。

「効いてない、って事はないわよね。ううん、確かにちゃんと成功したはず……でもこの様子は――」

少女が突然何かを考えるような仕草をして突然ぶつくさと独り言を呟き始め、そして黙り込んでしまう。とにかくこれは好都合、このまま二度寝しちまえばきっと俺は元の平常な日常に舞い戻れるはず。少なくともそうでなければ困るのは事実であり、もしこれが夢だとしても俺はなんて夢を見ていたんだと自己嫌悪するハメになっってしまうわけだがこの際構うまい。確かにこうやって毎朝起こしてくる可愛い妹ってのは健全なる男子にとっては夢のようなものはずだし。はずだよな？

「ねえ兄さん。わたしの事解るわよね？」

俺が布団を覆い被さって二度目の眠りにつこうとするや否や、妄想上の（そうであって欲しい）少女は何やら戸惑っているような声色でおかしな問いをぶつけてきた。布団の隙間から見えるその表情には少し不審の色が伺える。ってちょっと待って欲しい。少しでもいいから俺に考える時間をくれ。まず第一に俺はこの子の事なんて

何も知らないし記憶にない。解らないのに解るかと思われても答えはノーだ。だがこの雰囲気から察するに俺は彼女の事を知っているわけばならないらしい。現に彼女の表情がそう訴えかけているわけ。何と答えればいいのか解らないまま、俺はただ無言でその少女の顔を見つめていた。多分、今の俺はかなり間抜けな顔をしているに違いないだろうと思いつつながら。

「……えーと」そうして、あたふたとしながら言葉に詰まった俺は、「ここはどこだ……」

訳が解らずに意味不明な返答をしてしまった。俺がそう呟いた瞬間、目の前の少女はまるで有り得ないものでも見るかのような瞳で、「うそ、まさか記憶喪失にでもなったって言うの？ そんな、確かに手順は合っていたのに。こんなの、おかしいわ……」

先に弁明して置くが、俺は決して記憶喪失などと言う如何わしい症状になっっているわけではない。解らない事と言えば目の前の少女が一体何者なのかと言う事くらいで、自分の部屋の光景、空気、ベッドの寝心地その他全てに関して覚えていいると言う事には胸を張って自身を持てる。

「ねえ、本当に何も思い出せない？ 自分の名前とか、ほら……」  
デマを吐いてみたのは良いが、さてどうしたものか。状況を整理するとあまり難しくはなく、ただ朝早く目が覚めたと思っただけ目の前に見知らぬ自称・妹な少女が立っていたと言う事だけであり、この謎を解き明かすためにはまずこの少女が何者かを知る必要があるわけだ。なら行すべき事はそう難しくもない、俺が聞いて真実を答えるかどうかは解らないが試さないよりはマシだと言える。俺は少し間を置いてから不安そうにしている少女に向けて一つの問いを投げ掛ける事にした。

「いや悪い、冗談だ。俺は月城昂。ここは俺の部屋で、俺が一人暮らしをするのに使っている部屋だ。だが……さて、ここで問題です」俺はわざとらしい口調で、「一人暮らしをしているはずの俺の部屋にいるわけがない女の子がいて、さらに『兄さん』だなんて呼ばれ

た場合、俺はどう対処すればいい？」

「……………」暫しの沈黙の後、目の前の少女は静かに溜め息をついて、「やっぱり効いてないのね。困ったなあ、なんとか上手く行くと思っただけど」

ますます訳が解らなくなってきた。『効いてない』って何がだ？ 薬か何かか？ そして何が上手く行くはずだったんだ？ まさか俺に妹がいるなんて事を錯覚させようと変な薬でも飲ませたんじゃないだろうな。だが一体それに何の意味がある。

「でもその様子だと、昨日の事は忘れているみたいね。まあ、多分ショックで記憶が飛んでいるだけだと思うから、そのうち思い出すんでしょうけど」

「おい、昨日の事って何だ？ 記憶が飛んでいるって、俺は昨日は普通に学校へ行って授業を受けて、それから」

それからどうしたっけ？ 記憶が少し曖昧になっているのか、上手く思い出す事ができない。

「ッ………… お前、何を知ってる？」

「女の子に対して『お前』なんて呼び方を使うのは好ましくないわね。はあ、せっかくの計画も失敗だし、どうしたものかな」

「そんなの仕方ないだろ、俺はお前の名前さえ知らないんだ。それくらい先に教えてくれてもいいんじゃないのか？」

そんな俺の返答に、少女は「あ、そう言えばそうね」なんて呆気に取られたような顔をして呟いて、

「私は………… そうね。『ルナ』とでも呼んでくれればいいわ。まあ、貴方の妹になる予定だったから丁度いいし、月城ルナって名乗る事にしましょう」

「るな…………？ 漢字でどうやって書くんだ。いや、外国人なのか？ …… それより待てよ。どうしてお前………… いや、るなが俺の妹って事になるんだ？」

「さっそく呼び捨て？ まあ、いいけど。ちなみにカタカナでルナでいいわよ。外国人かどうかってのは、まあ説明が面倒臭いからこ

の際置いといて。何故かって言うのは少し色々事情があるんだけど……簡単に答えるなら、そうね」うーんと唸ってから、ルナと名乗った少女は俺に向かって軽く意味ありげな微笑を浮かべて、「貴方がわたしの事を知ってしまったから、かしら？」

「知ってしまった、だって？ どう言う意味だよそれ」

「昨日の事、本当に覚えてないのね。そっち方面の記憶が消えちゃったのかしら。うーん、そのうち思い出すとは思うけど。簡単に説明するなら」ルナは扉の向こう側から俺の部屋まで踏み入ってきて、「貴方は昨日、わたしの秘密を知ってしまった。仕方がなかったとは言え、貴方はわたしの事情に脚を突っ込んでしまったわけ。その事情はわたしにとって他人に知られるべきではない事で、本来なら貴方を抹消してでも知られるべきではない事だった。でも、そうね一言で言えばわたしは貴方を気に入ったのよ。だから一番最適な方法として、貴方の記憶を操作して、わたしが元から存在している親族、年齢的に考えて妹だと『錯覚』させるように仕向けたんだけど、何故だか効果はなかったみたい」

ちよつと待ってくれ。いまいち話が良く見えないんだが、俺はよくうするに昨日ルナと初めて出会い、彼女にとって知られたくはない秘密を知ってしまったと言うことか。思い出そうとしても何も思い出せない事に苛立ちを感じながら、俺は目線だけをルナに向けて口を開く。

「大体の流れは理解出来たんだが、話の内容が抽象的過ぎないか。これじゃ何も解らないし、俺におま……ルナが妹だと『錯覚』させるなんて方法、一体どうやって？」

「簡単よ」ルナは、さも当然そうな顔で俺に向かってそう言い放った。

「だって私、魔法使いだもの」

「……、え？」

今、彼女は一体何と言ったのだろうか。俺の耳が悪かっただけかもしれない。いや、そうでなければこれはただの笑い話に成り下がる。魔法使い？ おいおい、いくらなんでもそれは冗談にしても程度が低すぎるだろう。

「まあ、普通じゃ信じられないでしょうね。でも実際問題、事実なんだからしょうがないわ。わたしが知られたくない事、って言うのもわたしが『魔法使い』だって言う事なんだから。今は信じられなくてもいいけど……そうね、そのうち昨日の晩の事を思い出せば嫌でも理解するんじゃない？」

まったくもってこいつの言葉の意味が理解できないのは、俺がなんの変哲もない健全で普通なただの一般人だからで間違いないだろう。そんな与太話、誰がはいそうですかと信じるって言うんだ？

余程の夢見た子供相手じゃない限りは笑いこけている所だと思う。こいつがその夢見た子供なのかどうかはおいといて。

「……ま、いいわ。別に無理に今すぐ信じて貰わなくてもわたしは一向に構わないワケだし。それより『兄さん』。そろそろ朝食の間だと思うんだけど、食べるわよね？」

朝食だって？ まさか本当に作ってたのか。別に勝手に台所を使ってる事にいまさら意義はないが、なんだか複雑な心境だ。

「あら、食べないの？ もしかして朝食は抜く派？」

「いつも朝はぎりぎりだからな。今日だってこんな朝早く起きた事に驚いてるくらいだし」

「駄目よ。朝食はその日の基礎になるエネルギー源なんだから、ちゃんと取らないと。そんなだと体内魔力も回復しな　って、これは貴方には関係ないか」

本当にどこの電波少女なんだと言い放ってやりたいが、本人は心底自分が魔法使いだと思っっているようで、確かにそれくらいの事情が無い限り俺みたいなそこら辺にいる凡人に素性を知られたからと言ってそいつの妹になんてなろうとは思わないだろうが、それでもやっぱりおかしいのはおかしいのである。



「お前に説教される事でもないだろ。俺は俺なりに生きてるんだから、見ず知らずの女に指図されるほど落ちぶれてもいない」

「む。お前って言わないでって言ったでしょ。呼び捨てでもいいから名前で呼んでよね。わたし、お前って呼ばれるの嫌いな」

知るかそんなの。

「はいはい悪かった悪かった。で、そのルナさんはこれからどうするつもりだ？」

「どうする、って？」

「あのな……。仮に、一步譲ってルナが魔法使いだとするぞ」俺は信じてないが、と心の中でひそかに付け加えて、「俺が知ってはいけないような秘密を知ってしまったって、俺を監視だかする為に俺の所で妹をしようとしたってのもまあ解る。理屈は、信じる上でならなだけで実際今の俺は妹なんていないと思ってるし、俺の周りの奴らもそうだ。そんな事知らない。一体どうやってこの状態を続けるつもりなんだよ。騙し切るのにも限界があると思っぜ」

「うーん。まだその辺までは考えてないんだけど。ま、なんとかするんじゃない？」

おいおい、こいつはどこまでぶっ飛んでるんだ。さすがの俺でも頭が痛くなってきた。

「でも」ルナは付け足すように、「わたし、その辺は得意な魔法使いだから。身の誤魔化し程度なら簡単だと思うわよ？ そうね……戸籍上、貴方にはルナって言う妹がいるって情報を他人に植え付けたりするのも難しくないし」

「なんだそれ。魔法使いってのは、杖から炎やら雷やらを出したり、傷を一瞬で癒したりする人種じゃないのか？」

少なくとも、俺が最近嵌っているゲームではそんな感じだ。そう俺が自分の思い付く限りの魔法使いのイメージを伝えてみると、それはまるで見当違いの返答だったのか、ルナは飽きたような表情でこちらを見た。いや、俺がすでにお前に飽きていると言っのは敢えて言わないで置くが。

「そんなイカれた偏見は止めて欲しいわね。ま、中には確かに似たような事の出来る魔法使いもいるとは思うけど。実際はもっと多種多様、一言では語り尽くせないようなものよ。魔法使いってものはね」

「そんなもんですか。まったく意味が理解出来ないが、やっぱりこは黙って聞いておいてやるう。俺じゃ何を言っても多分おかしな返事しか返って来ないんだろうし。」

「はあ。これじゃ、無理やりにも昨日の記憶を再生させて納得させた方が早いんじゃないかって思うくらいだわ。まるで信じてないって顔だし。仕方ないのかも知れないけど、そんな顔されるとこっちとしても自分がばか言ってるような気分になるじゃない」

「実際にわけわからん事を言ってると思えないんだよ。て言うが無理やりに記憶を再生させる、ってなんだ。脳をいじくったりでもするのか。そうだとしたら秒で遠慮させて貰うとする。とにかくこうしていても埒があかないので、俺はベッドから重たい腰を下ろすと、そのままルナの隣を横切ってリビングへと向かう事にした。俺の部屋は一人暮らしには少しもったいないくらいのワンルームで、リビングと部屋が別々にあり、さらに物置部屋まであるという仕様である。当然風呂とトイレも別々だ。俺も色んな理由があつてこんな無駄に広い部屋に住んでいる訳だが、今はその理由の説明は割合させて貰う。なんてったって話し始めるとやたら面倒な上につまらないからだ。」

「で、結局朝食は食べるの、食べないの？」

「後ろに付いて来るように、義理の妹・ルナが問い掛けてきた。正直、朝飯と言われても久しぶり過ぎて実感が無い。だが、腹は減っているのは間違いないわけで。」

「ああ、食べるよ。せっかく作ってくれたんだろ。それじゃ食べないと勿体ない」

「へえ。案外律儀な所あるのね。感心、感心」

「お前に感心されてもあんまり嬉しくないんだけどな。言われて嫌

な気分はしないが。

そんなこんなで俺はリビングに移動した。リビングにはコタツが置いてあるのだが、コタツ布団はすでに取っ払っているので、まあようするにただのテーブルである。その上にはすでに食事の準備が行われているようで、なんとも日本伝統の朝食だと言わんばかりの和食メニューである。

「和食か。っつーカルナって外国人じゃないのか？ 名前からして略称っばいからそうだと思っただが」

ここで初めて俺はルナの外見に注目した。本来なら遅すぎるが、先程までわけ解らない現実には直面していたため、そこまで気が回らなかったのだ。そこはご了承戴きたい。外見はそこまで外国人らしくはなく、外国人っぽい特徴は強いて言うならその長い金髪だろう。肌は白いし、顔付きも実に日本人っぽく見える。ハーフか？ そこまでは解らないが、とりあえず美人だとは思っただけだ。実際外見だけで言えば可愛いものだから別に文句も何もないのだが。

「わたしの事、そんなに知りたいの？」

何とも意味深な返事をされてしまい、俺は少し動揺してしまった。駄目だ、ペースに乗らされてはその内いつの間にか馴染んでしまう。丸め込まれては相手の思う壺だ。堪える俺。

「別に話したくないなら話さなくてもいいけど。ただちょっと気になっただけだ」

「少しは気になるんだー。へえ、ふうん？」

俺は段々コイツの性格が解って来た気がする。

「まあ、今はまだ話せないかな。そのうち話してあげる」

なんだ勿体付けやがって まあい、少々残念だがまたの機会に取って置くとしよう。別に今すぐ聞きたいような事でもないし。

「とりあえずその辺座ってなさいよ。すぐ用意したげるから」

それだけ言っ、ルナは台所へと背中を向けて歩いて行った。そんな彼女に俺は適当に相槌を打ってから、リビングの中心にあるコ

タツの適当な場所に座る　　っておいおいちよつと待てよ俺、すっかり馴染んでしまったんだが俺はこのままでいいのだろうか。なんだか流れに流されてしまったような気分になってきた。大体、俺はいつの間にある無茶苦茶少女ルナの兄になる事を承諾したんだよ。やべ、もうすでに脳内の洗脳が始まってしまっているんじゃないか。しかし別にこれと言って嫌な気分なわけではなく、一人暮らしも寂しいと思っていた頃にこんな可愛い少女（性格云々はこの際その辺に放置して置く事にする。あくまで前向きに俺のモットーの一つだ）と同居出来ると言うのだからそれはそれでおいしい状況だとは思う。ああ、そこは否定しない。俺だって一応男なんだからな。でもそれとこれとは話が別だろ？　まず俺は事態がまだ理解しきれていないのが原状であり、正直な話彼女の話をこれっぽっちも信用していない。魔法使いなんて実在するとは一ミリも思っちゃいないし、彼女がそうだともてんで思えない。さてどうしたものか。このまま流れに流されて可愛い（何度も言うが性格は別だ。あくまで外見が）女の子と同居生活に励むのか。それとも今すぐ彼女を部屋から追い出してしまうか。解らん　　正直に言おう、俺はこのまま彼女と今すぐはいさよなら出来るとはこれっぽっちも思っていない。言って聞くような相手でも状況でも無さそうだからである。ならどうすればいい、俺にどうしろってんだ。もう何もかも解らなくなってきた。このまま流されてしまうのが一番楽なんだろうが、それはそれで疲れる未来が魔法使いでも超能力者でもない俺にだって視えるぞ。未来予知ってやつだ。

「何へんな顔してばおつとしてるの？」

などと試行錯誤している間にすでに朝食の準備は終わっていたよ。うで、目の前に座っている自称魔法使いルナが俺の顔を見つめながら怪訝そうな表情で呟いた。俺だって別にしたくて変な顔をしてるわけじゃない。それなりに悩んでるんだ。今の現状を把握するだけで精一杯だよ、俺には。

「何でもない。それじゃ、戴きますっ」と

「戴きます」

ここは行儀よく、両手を合わせてまずは朝食を戴くとうしよう。これでも俺は恩義は忘れない人間だ。こうして朝食を作ってくれたのなら、何も考えずにありがたく戴くのが俺流である。箸を掴み、目の前にある焼き魚へとその矛先を向ける。うむ、いい感じに焼きあがっているじゃないか。これは上手そうだ。ぱくりと一口、俺は焼き魚をほぐして頬張った。ふむ、これはなんとも、

「う、あがアああああああええええええええええ！？」

待て待てなんだこの味は、とてもこの世のものとは思えねえ！

俺は近くにあったティッシュペーパーを即座に二、三枚取り出して、そのまま口の中の異物を吐き出した。そんな俺の行動を見て、驚いたような顔でルナが言う。

「ちよつと何よいきなり、人がせつかく作ったものを！」

待つてくれ、まずは俺にも弁解させる。その前に口の中をすすきりさせるのが先だが。

「う、うう。はあ」俺はコップに注いだ水を飲み干すと、なんとかマシになった口を開く。「あ、あのな……。お前、それ味見したのか？」

「はあ？ 毒見なんてする訳ないじゃない。自分で作ったものなんだから、安全性ばつちに決まってるでしょ」

「いや、毒見じゃなくて味見だ味見」ああもう、それくらいはしてくれよ頼むから。「食べてみる」

俺はそれだけ言つて、俺が食べた焼き魚をルナの目の前に差し出した。彼女はキョトンとしながらそれに箸を向けて、ぱくつ、と。

「どうだ？」

「う。……。ごめん、ちよつと水」

ほらな、言わんこつちやない。普段から他人に作つて貰った食事なんて吐いたりなど決してしない行儀の良さが自慢の俺が吐くくらいなんだ。その味は尋常じゃない。つか、なんで焼き魚がこんなに酸っぱいんだ。おかしいだろう。

「はー……。ねえ、何これ？」

「俺が知るかばか」

「うーん、やっぱり隠し味のアレがまずかったのかしら？」

……。隠し味だって？

大抵の初心者はその言うオリジナリティを求めようとする行為が料理を失敗に導くんだよ。つーか何を入れたんだ、聞いてみるか。

「で、何を入れた？」

「それ」

ルナが指すその場所には、レモンの香りがどうのと書いた、

「それは洗剤だばか！」

なんてベタな失敗をしてくれるんだコイツは。思わず立ち眩みが……。

「うー、そんなの知らないんだから仕方ないじゃない。料理だって初めてなんだから。ばかばか言わないでよね」

「初めて？ どうして今までやった事ないのにやろうと思ったんだよ」

と、ここまで自分で言っけて置いてそろそろ哀想になって来た

などと思うのは俺が甘いからだろうか。俺も存外お人良しである。

「いいじゃない。しなくなっただから」

「あのな……いや、もういい。とりあえずこの魚は食べれたもんじやないから、捨てるぞ」

「う、うん。……。あの、ごめんなさい」

俺は二人分の焼き魚を捨てに台所へ持って行きながら溜め息をついた。にしても、素直に謝るなんてこいつも可愛い所があるじゃないか。それに免じて今回は許してやってもいいかな。次やったら承知しないが。と、また俺は馴染んでしまってるんだが、もう気にしない方がいいのだろうか。考える事すら面倒になってしまいそうだ、このままだと。

「ねえ、兄さん」

ルナが何やら言いたそうな表情で俺を呼んだ。その兄さんっての

がどうにも慣れないんだが、俺も名前で呼んで貰うようにした方がいいだろうか。などと考えていると、

「おかず、さっきの焼き魚しかないんだけど。……どうする?」

「あ……。ま、となると今日は朝食抜きだな」

結局そうなるわけだ。俺はいつもの事だから別に気にはならないけど。

「むー、次は失敗しないんだから」

「次がある訳ね……」

俺は適当に受け答えしてから、そのまま食べる事のなかった朝食を片付けるために、リビングのコタツの上に置かれた茶碗の中に盛られた白飯を釜に戻す事にした。お生憎様、ふりかけさえもこの家にはないんでね。白飯だけで食卓を飾れるとは思えないわけで。そう言った朝を過ごしている俺は、さてこれからどうしたものかと考えていた。今日は平日、金曜日なので学校がある。ちなみに俺は高校生で只今二年。あと一年以上学校に通わなければいけないのが毎日思うがダルい訳で、今日も学校へ行くのが辛いってのは変わらないののだが、さて今日はそれとは違う悩みが俺には存在しているのと言うまでもない事だろう。俺の妹になると宣言したこのルナという少女。見たところ年齢は俺より一つ二つ下くらいだろう。学校には行っているのだろうか。俺の学校では外国人が通っているなんて噂は聞いた事がないが。やはりここは本人に問うのが一番だろう。白飯を釜に戻し終わると、俺は台所からリビングへ戻るなりそこに座っている少女に向けて声を掛ける。

「さて突然だがひとつ聞きたい事がある」

「はあ、何?」

「ルナって何歳だ」

少々の沈黙の中、お互いに見つめ合った後、「わたしの事、聞きたいの?」

またそれか。まさか年齢すら秘密だなんて言うんじゃないだろうな。ちなみに俺は十七歳だ。まさか俺より上って事はないだろう。

妹だなんて言うくらいなんだからな。良くて同年か少し下くらいだろ。見た目からしてもだ。

「なんてね。ま、年齢くらいなら別にいいか。わたし、十四歳よ」

「はい？」

「え、だから。十四歳だつてば」

俺がそれほど信じられなさそうな顔をしているのだろうか、ルナは少し不機嫌そうに、「何よ、そんなに信じられない？」

「……いや、だってせいぜい俺より一つ二つ下ぐらいだと思ってたから。正直、驚いた」

「そうでしょうね。ま、わたしと初めて会った人は大抵そう言うわよ。君は年齢不相応だ、ってね。でも外見で人を判断するのは良くないと思うわ」

そう言うつもりで言った訳ではないのだが、確かに見た目は俺と同年だと言っても全然問題のないレベルだから、俺と三つも離れているとは到底思えないのも本当であり、と言うか性格だつて年齢不相応だと思ったりするのだがそれは言わないで置こう。しかし十四歳か、だから妹と。なるほど、それなら納得出来るものがある。

「何よ、今更になつて納得したような顔しないでくれる？」

「見た目で判断するのは良くないぞ。俺はそんな事考えてない」

「……むー」

「にしてもアレだな。俺と三つも離れてるのに、えらく態度がでか……って、冗談だよ冗談。そんなに睨むな、無駄に怖いぞ」

本人にとつては軽いコンプレックスなんだろうか。これ以上年齢に関する話題をしているとその内本当にキレられてしまいそうだし、そろそろ止めた方がいいだろう。

「ま、気にする事はないんじゃないか。それくらいの年齢で丁度いいだろ。俺の妹になるってんならな」

「ふーん。その様子だと、もうわたしが妹になつてもいいって感じね」

え。まあ、確かに言われてみればもうすっかりその気になつてし



まっている俺がいる。

「徐々にわたしの魔法が効いてきてるのかしらねー」

「本当にそうだったら俺はお前の魔法とやらを信じてやってもいいが、多分違うぞ」

単純な話だ。俺はこいつに何だかんだと言いつつも親近感を得ているのだ。出会って間もない少女・ルナに。心の中で、こうした朝も悪くはないと思えてしまっている。たぶんそれだけさ。惚れた腫れたなんて話ではなく。第一、十四の少女に欲情なんかしたらそれはちよつと危ないだろうし。まあ、だからと言って全てを信じているわけではないのだが。

「いいさ、俺が思い出せば全て信じられるって言うなら、思い出すまでとりあえずここにいてもいい。それで俺が思い出して、全部理解した上でもう一度考える、それでどうだ？」

「そうね、いいわ。わたしの提案を断るような事があつたらその時はその時で別の手段もあつた事だし。貴方がそれでいいならわたしはオッケーよ。うん、なかなか上手くやっていけそうな気がするわ」俺は不安だけどな、とは言わないで置く。「それじゃ、これから宜しくね。兄さん」

「ああ。と、それから俺の事は昴でいいぞ。その呼ばれ方はさすがに慣れない」

たとえば妹と言う設定であつてもルナに兄だと呼ばれるのには抵抗があつた。その理由なんてのはすぐには浮かばないが　まあ、なんとなくこそばゆいものがあつたんだろう。己の事ながら曖昧なのは多分気のせいさ。

「あ、そう。それじゃ改めまして」ルナは一息、俺に向かって微笑みを見せて、「宜しくねえ、昴お兄ちゃん？」

もっと酷い呼び名になつてしまった。

さて、そんなこんなで俺こと月城昂は厄介な自称魔法使いであると言う少女、ルナの兄貴役を演じる事となってしまったわけである。一応期限付きとは言え、自分でも早計な判断だったなとは少し反省するべきではあるものの、こうなってしまった以上は仕方がない。上手くやっていくのみだ。けどな、どうやったってどうしようもない事くらいはあるんじゃないか。

「わたしも行くわよ」

俺が学校の制服に着替えている途中、いきなり問答無用で俺の部屋へずこずこ入り込んできたその少女・ルナは、何を血迷ったのかいきなりこれまた意味不明な言葉を俺に投げかけてきた。

「行くとは？」

「学校よ学校。『わたしも』って言ってるんだからそれしかないでしょ」

そりゃ解るが。「ほう、ルナも学校に通ってるのか。魔法使い様でも学校なんて庶民的な所に通うもんなんだな。これまた一つ勉強になった」

「ばか、違うわよ。わたしは庶民の学校なんて通ってないわ。でも貴方を監視しなければいけないと言う意味では、わたしも貴方と四六時中とまでは言わないけど出来るだけ一緒にいたほうがいいですよ？」

それはそうかも知れない。でもどうやるんだ？ さっき聞いたがコイツの年齢は十四歳で、俺とは三つも離れている。行きたくても俺と同じ高校ではなく中学が関の山で、どうあがいても俺と一緒にはいられないと思うんだが、どうだろう。俺が何を考えているのかは俺の顔を見れば解るのだろうか、目の前にやる気満々な表情で立っている暴虐無人少女ルナはこれまた自身満々な笑みを浮かべて、

「無理だと思ってるでしょ。わたしが誰だか忘れたの？」

「魔法少女りりかるルナちゃん」

「へんな呼び方しないでよ……。まあ、それは置いてわたしは魔法使いなわけ。だから別にそれくらいの事はどうとでもなるわけ。

解るかしら？」

未だ魔法使いと言う存在を信じていない俺にとって理屈も何も解らないのに解るかとか聞かれても何も解りませんと答えるしかないわけだが、そう答えた所でこいつにとつては満足の行く答えではない事は解っているし、ここは黙って聞いておいてやろう。

「いい？ わたしは幻覚を見せたり錯覚させたりして人や動物を操作するのが得意な魔法使いなのよ。だから、例えば学校で一番偉い人に『月城ルナと言う生徒は確かに存在している』と錯覚させて、書類もちやんと用意させればいいだけの話なわけ」

「それは気味の悪い魔法だな、おい。子供の夢を壊すような事はするなよ」

「う、うるさいわね。事実そうなんだから仕方ないでしょ」

魔法使いと言ってもなんと現実的、と言うかファンタジー要素に欠ける魔法なんだな。もしかしてそれが普通なのか？ いや、別に魔法使いの存在を肯定するわけではないけど。ようするにルナが言いたい事はこう言う事である。まずルナは何食わぬ顔で普通に登校し、学校の一番偉い人間　まあ校長だろう　にその得意の魔法とやらで洗脳を行い、自分をその学校の生徒に仕立て上げ、それから俺と共にさも当然のように登校生活を繰り返すと言うわけか。いや、待てよ。それだと色々また問題が起こるんじゃないか？

「言いたい事は解るわ」ルナは考え込んでいる俺の顔を見ると、まあ表情で俺の考えている事を読んだのだろう、だがそんな事は心配ないといわんばかりの顔で、「わたしは今日転入してくる転入生、って事にする。それなら問題ないでしょう。ま、事前に知らされるはずの先生達なんかは全員洗脳しちゃう事になるわけだけど」

つまり、コイツは学校の教師全員まとめて洗脳しちまうって言っているわけか。俺にはそれが可能なのかどうかは解らないし、正直出来るとも思っていないのでそれはどうでもいい事ではあるのだが、それでもやはり心配にはなる。

「大丈夫なのか？」

「大丈夫よ。昴には何故か効かなかったけど、これでも得意分野だし。失敗したのだってもしかすると今日が初めてくらいの勢いよ？」  
「違う。洗脳した人達の事だ」

「ああ、そっち？ 心配性ね。別にそれ以外に副作用なんてないわよ、普通はね。わたしは今日転入してくる予定だったはずだ、って意識を植え付けるだけだし」

本気で言っている、と言うのはルナの顔を見れば解る。解るんだが、やっぱり信じられないのに変わりはない。もし今日学校でコイツと出くわして、コイツが何食わぬ顔で学校生活を送っていたとしたら 信じるしかないのか。いや、それは早計すぎると思うものだが、それでも魔法なんてモノの存在の可能性を否定するのは難しくなるだろう。魔法使い そんなものが本当に存在するんだとしても、俺にはそれ以上にコイツの考えている事の方が理解出来ない。どうしてそこまで俺に執拗になる？ 秘密と言うのはルナが魔法使いだって言う事だと聞いたが、俺がそれを知っているからと言ってやたらめったにその力を使いまくっちゃまって何の問題もないんだろうか。下手するとばれる可能性だってあるはずだ。

「まあ、こればかりは実際にやって見せないという意味がないわね。ほら、さっさと着替えなさいよ。わたしは私服しかないからこのまま学校に行くけど、向こうの購買なんかで制服買って着替えるから問題ないし。時間には余裕を持って登校するのが一番よ。ま、今回は出来るだけ人が少ない間に事を済ませたいって言うのもあるんだけど」

本人はすでにやる気魔人と化していて、どうやら俺が何を言った所で無駄なようである。仕方がない。俺はいつものように制服に袖を通す そう言えば春ももうすぐ終わりだからそろそろ夏服になるのか。まあまだ先の話だろうけどな などと考えている内に準備は完了、いざ登校である。俺は玄関まで歩いて行くと、後ろに着いて来るルナを無視して靴をせっせと履き替え、さて行こうかと扉を開いて外へと脚を踏み出そうとしたその矢先、

「さ、行くわよ」

ルナも靴を履いて後ろに着いて来ている。待てよ、まさか一緒に登校するつもりか？

「オイ、その格好で一緒だとさすがに怪しまれないか？」

「大丈夫。だって転入生よ？ 月城昴の妹、月城ルナじゃない。誰かと会っても今日から転入してくる事になった妹だって説明すればいいわ」

それはまた……無茶をおっしゃる。「俺がそう説明したって、俺には元から妹なんていなかったんだし誰も信じるわけないんじゃないか？ それもまた、お得意の魔法とやらで片付けてしまう気か」「うーん。それでもいいけど、別にそこまでやる必要はないんじゃない？ 簡単な話よ。海外へ留学していたはずの妹が突然帰ってきた、これだけで大抵の人間は信じるわ」

それはそうかも知れないが、一人だけ例外がいるのである。俺に幼馴染がいる事は冒頭辺りでほのめかしていたのだが、まさしくそれは俺の家庭の事情ならなんでも知ってるし、無論、俺に生き別れの妹なんてものがあるなんて事は知らない。まず説明したって信じてくれないに決まっている。

「ま、それでも信じられないような人がいるんならその時はわたしが何とかするし、大丈夫。いけるわよ」

俺としてはその得体の知れない力の矛先を幼馴染に向けたくないと言っのが本音なのだが、とてもではないが普通に言い聞かせた所でこんな与太話を信じてくれるわけがない相手だと言う事は歴然なので、ここは本意ではあるものの、その魔法とやらの力を借りるしかないようだった。まあ上手くいかなければの話だし、何かの間違いで信じてくれるかも知れないからまずは普通に説明してみるとしよう。さて、俺の部屋はとある住宅街にあるマンションの一室である。俺はマンション内にあるエレベーターで部屋のある七階から一階まで降りると、ルナと二人でマンションのオートロックドアから外へと繰り出した。清々しい朝の空気が心地よい。どれくらいぶ

りだろう、こんな余裕を持った登校なんてものは。

「あー、気持ちいいつ。温度も丁度いい感じだし、やっぱり春はいいわねー」

んー、と背伸びをしながらルナがさぞかし気持ち良さそうに言った。確かにこの季節が一番好きだな。これがもう少しすると灼熱地獄に成り代わってしまうのがかなり名残惜しくなる。ちなみに一番嫌いなのは冬なのだが。

「うし。んじゃ行くわよ、昴お兄ちゃん」

「……言い忘れてたけどその呼び方はやめろ」

俺はまだ人気の少ないいつもの通学路に向かい、ルナと言ういつもは居ない少女を連れて学校へと脚を運ぶ事にした。

何の偶然か特に誰とも出くわす事なく校舎に入り込む事に成功した俺達は、校舎の入り口付近でそのまま別れた。俺は一人、二階にある自分の教室へと向かう。ルナは当然のようにまずは職員室だろうか。場所は教えたものの、迷っていないかどうか少々心配でもある。ま、大丈夫だろうけどな。いつものように馴染みの階段を昇って、俺は自分の教室である二年B組と書かれた札のある扉の前に立つ。まだあまりクラスメイト達はいないようだった。それもそのはず、今日は一番乗りと言ってもいいくらい朝早い登校をしたのである。ふむ、なんとも複雑な心境だが悪くはないな。さぞかし周りの反応が楽しみだ。ガラガラと古ぼけた扉を横にスライドさせて教室内へと入っていくと、そこには一人の女子生徒がせっせと掃除をしていた。

「うーっす、沢宮さん。朝早くからご苦労さん。いつもこんな時間からいるのか？」

「え？ わ、月城くん！ ビックリした。一瞬、誰だか解らなかったよ」

彼女の名前は沢宮花凜。<sup>さわみやかりん</sup>ウチのクラスの委員長であり、俺の数少ない女友達つてやつだ。かと言って別にこれといった仲でもなく、たまに食堂でメシ食ったり勉強教え合ったり他愛もない世間話をする程度の関係である。容姿はかなり良く、正直言つて彼女を狙っている男子はクラスの大半は占めているんじゃないかと思えるくらい。その肩までかかるぐらいの茶色の髪と、少し幼さの残る清楚そうな顔付きは、見るものを魅了し　　って俺は何を語ってるんだか。

「朝早いね、今日は雨でも降るのかな？」

「はは、それは困るな。今日は傘持つて来てないから」

そこはすかさず冗談に冗談で返す俺だが、

「もし降ったら私の貸してあげるよ。あ……でも一つしかないから、その……」沢宮さんは何故だか気恥ずかしそうに、「い、一緒に帰る事になっちゃうかも。それでも良かったらいいよ！」

と、こうして本気なのか冗談なのか解らない受け答えをするので、話していて飽きないのも彼女の良い所の一つだった。にしても女子と一緒に一つの傘で帰るつてのはさすがに周りの目線が怖いぞ。特に沢宮さんとなら尚更である。嫌つてわけではないし、できれば歓迎したいぐらいなんだけど。

「あ……あはは、冗談だよ。本気にしちゃった？」

「まさか。沢宮さんが俺なんかと一緒に帰るなんて言い出すとまでは思つてないよ」

「え？ あ……そう、なんだ」すると、何故だか俯いて何やら後悔したような表情で目線を反らす沢宮さん。む、何かまずい事でも言つてしまっただろうか　と、俺が怪訝そうな顔をしているのにすぐさま気が付いたのか、彼女は慌てて、「あ、なんでもないよ。それより本当に今日はどうしたの？　いつもなら遅刻ぎりぎりだし、とか言いながら教室に駆け込んでくるのに」

話題を反らされた気がするが、まあいいか。彼女なりに気を使つてくれたのだろうし。さて、なんと説明したものか。たまたま偶然に朝早く目が覚めた、で通るっちゃ通るんだだろうが、今のうちに仮

の妹となつたルナの事を彼女に説明しておいたほうが後々楽なんじゃないかとも思えてくる。そうだな。別に減る事じゃないし、純粋な彼女なら多分信じてくれる事だろう。

俺は説明する為の言葉をいくつか思い浮かべて、「……実は昔生き別れた妹がいてさ、そいつが昨日帰ってきたんだけど、何でか同居しちまう事になつちまつたんだよ。んでそいつに朝っぱらから叩き起こされたつてわけ……なんだけど、どう？」

我ながら嘘を吐く罪悪心に苛まれつつも、そんな俺の話を真剣に聞いていた彼女は、

「そうだったの？ 月城くんに生き別れた妹さんがいるなんて知らなかったなあ。でも良かったね！ またその妹さんと一緒にいられるようになるって事は良い事だと思うよっ」

「あ、ああ。うん。ありがとう」

うつむ、ここまで素直に信じてくれるとはさすがに思っていないかった。

「ちわーっす、委員長！ ……ってあれ、なんで月城がいんの？」

と、俺と沢宮さんが会話している所に一人の男子生徒が扉を開けて教室へと入ってきた。そいつはさも俺がここに居る事が不思議そうな顔でこちらを見つめながら、「珍しい事もあるもんだなあ、お前が俺より早く来るなんて」

「うるせえ。俺だつてたまには早起きする事だつてあるんだよ」

コイツの名前は防人<sup>なりもりじゅん</sup>淳。沢宮さんと同じく、俺の学友である。つかこいつはこんな朝早くから毎日登校してやがんのか？ 初めて知ったぞ。

「おはよう、防人くん」

「おはよーさん。で、こいつどした？」

あからさまに俺の方を指差しながら、防人はまるでいてはならないものが何故ここにいるのか教えてくれと言わんばかりの表情で沢宮さんに問い詰めていた。おい防人、お前は人を指で差すなと親や先生に教わらなかったのか。この不良生徒め。



「あ、月城くんは生き別れの妹さんと同居中なんだよ。それで今日は朝起こしてもらったみたい」

「はあ……こいつに妹なんていたのか？ いやいやいるわけねえよなどうせただの妄想だろこの二次元中毒者め、やーい幼児性愛者<sup>ロリコン</sup>」

こいつ、言いたい放題言いやがって 「あのな、俺だつてつい最近までは知らなかったんだよ。まだ物心の付かない頃にすでに海外へいつちまつてたらしくてさ。最近、つーか昨日になっていきなり俺んちまで来て一緒に住まわせろだなんて言うんだから俺自身未だに動揺してるわけだ。妄想かどうかは俺だつて自分の脳みそを詳しく解析して現実を知りたいわけだが、少なくとも俺に妹らしき人物がいるつーのは今現時点では事実だとしか言いようがない」

なんて俺の長つたらしい虚偽説明（脳内を詳しく調べてみたいのは割とマジだが）をふんふんとどうでも良さそうに聞いていた防人は、突然ニヤリと気味の悪い笑みを浮かべると、「じゃあ丁度いいや。今俺彼女いねえから紹介しろよお前の妹さん。お前の妹なら別に問題ないだろ？」

「お前はいつもソツチ方面に話を持っていきやがるところが嫌いだよ」

「あはは、冗談だつての！ でもよ、本当にお前に妹がいたならおいしい思いつてんじゃねーの。お前の話を聞く限りじゃ気持ち的にや他人も同然だし、そんな女の子と同居だなんて羨ましいぜ」

そうか羨ましいか、ならお前に役目を譲ってやつても良いぞ。コイツならきつとルナと同居しても上手く……、いや、やつぱ却下。

「そんな目で見るなよ。でも羨ましいつーのはマジだぜ。あー、俺にも彼女がいればなあ」

「あ、沢宮さん。そう言えばさっきまで掃除してたけど、もういいの？」

「おいこらてめえ無視かよ！」

「あ、えっと、あとちょっと掛かりそうなんだけど」

「じゃあ手伝おうか。えっと、箒も一つあったよな。どこにあっ

たっけ」

「ほんと？　ありがと月城くんっ。あ、こっちだよこっち」

部外者約一名を完全放置して、俺は沢宮さんと教室の掃除にいそしむ事にした。こっちのほうか今の時間を過ごすにはよっぽど有意義だろう。あの女好きのくだらない話を聞いているよりかは確実に。

さて、そんなこんなでクラスメイト達も増え始め、時刻はホームルームの時間へと差し掛かっていた。いつもの如く、担任の女教師ある波上葵先生はじょうあおいは何故か時間になるまで教室にて生徒達とのコミュニケーション活動（本人はそう言い張っているのだが、正直どうみてもサボっているようにしか見えない）にいそしんでいて、何やら転入生がどうのと言う会話が少し聞こえてきた気がする。ふむ、その調子だとルナは全教師の洗脳に成功したんだろうか。魔法なんてものを使ったかどうかはこの際どうでもいいが、なかなか手際はいいように思える。なんてったって、この学校の教師全員だからな。それは一筋縄ではいかないと思う。ホームルーム五分前になると、担任の波上先生は職員室へと戻っていった。一体あの人は何をしているんだろう、本当に教師なのかと疑いたいくらいだ。他の教師達は一団どんな目で彼女の事を見ているんだか。生徒と自主的にコミュニケーションを取るのはまったく良い事だと言ってやりたいが、せめて休憩時間とか昼休み中くらいにしておかないか、と言う突っ込みはもう今となっては誰もしない。

「はあ……」

そんな事を考えながら、俺は自分の机で頼杖をつきながらホームルームの開始を待っていた。ルナは俺の妹だつて言う設定なんだからひとつ下の一年何組かに転入するんだろうな、などともどうでも良い事を淡々と考えている内に我が担任、波上先生が教室へとやって来た。と言うか戻ってきた。いつも通りのニッコリスマイルを浮

かべた美人教師である。前に年齢を聞いたが二十代前半だとしか聞き出せなかったな、そう言えば。

「はい、皆さんおはようございます」

これまたいつも通りの挨拶である。すでにさつき会ってるんですけどー、なんて言う突っ込みもこれまた誰もしなくなった。日常茶飯事の出来事には次第に誰も何の疑問も持たなくなってるんだろう。俺はと言うと、いつも遅刻ぎりぎりに登校している為かあまり彼女とはこのホームルーム以前の時間に会う事は少ない。だから少しまだ疑問を浮かべる程度の余裕は残っているわけで。

「今日は皆さんに重大なお知らせがあります！」何を改まって、と俺は頼杖をついていた右手を直して話を聞く体制に入ってみる。「今日、朝に先生とお話していた人は知っているかもしれないですが、今日は転入生が一人このクラスにやってくる事になりました！」

はあ、転入生ね。可愛い女の子がいいなあ。

「もうすでにその扉の向こうにきているので呼んでみましょう。入ってくださいーい！」

静かに扉が開かれ、その向こうからは見慣れた金髪の少女が  
つておい、ちよつと待て サラリとした金髪を靡かせながら、ゆ  
つくりと静かに教壇の前に立つと、どこからどう見ても俺の知って  
いる自称魔法使いなその少女・ルナは、周りの注目を浴びながら一  
息ついた後、後ろにある黒板に白いチョークで名前を書き始めた。  
月城瑠奈。あえて漢字なのは、そうしないと無駄に疑われる可能性  
があるからか？

「初めまして。この度この学園に転入する事と成りました、月城瑠奈と申します。少し複雑な事情がありまして、海外からの転入で少し戸惑う事や解らない事が多々あるとは思いますが、どうぞ仲良くして戴ければと思います」

ざわざわと教室内がどよめき出す 完璧な優等生ぶりを発揮した挨拶を終えると、金髪少女ルナは俺の方をチラッと見てム力つく微笑を一つ送ってきた。そんな馬鹿な。まさか同じクラスに転入し

てくるとまでは完全に予想外だ。しかし確かに有り得る事だと言うのにどうして気付けなかったんだ、そもそもこの学校に通う目的は俺の監視だっただろうに。失態だ。無駄に精神的ダメージを貰ってしまった。

「瑠奈さんは苗字を見ての通り、このクラスの月城昴くんの双子の妹さんだと言う事です。皆さん、是非手を取り合って彼女と仲良くしてあげましょう！」

これも全部お前の予定内の事なのか、ルナ。

「それじゃあ、月城くんの隣の席が空いてますね。そこでお願いします」

「はい、解りました」

確かに隣の席は空いてるけどな。だが、こればかりはさすがに偶然だ。席替えをしたのも随分前の事なんだから、まさかここまで操作しているとは思えない。偶然とは恐ろしいものだと思感する瞬間だった。

「……上手くいったみたいね。宜しく、昴お兄ちゃん」

ルナはスタスタとこれまた優等生ばりの優雅な歩き（こんなの見た目だけだ。この猫被りめ）で俺の隣の席までやってくると、小声で俺にしか聞こえない程度に呟いてきた。こいつ、やめろと言ったのに。これならまだ兄さんのほうがマシだ。この歳でしかも双子の妹（と言う設定なだけだが）にお兄ちゃんだなんて校内で呼ばれてみる。周りからどんな目で見られるか解ったもんじゃない。

で、教室内はと言うとまだざわめいていた。そのほとんどの視線は俺とルナへ向けられていて、何やら珍しいものを見るような視線をひしひしと感じる。うう、ここまで他人の視線が痛いと思っただ事はない。

「はい、皆さん静かにしてください。それじゃあホームルームを始めますよー」

かくして、俺はルナと同じクラスになってしまった。とりあえず一つだけ言いたい。ルナ、初めからそのつもりだったのなら前もっ

て俺に教えておいてくれ。あまりに唐突過ぎて寿命が縮まりそうな気分なんだよ、今。

ルナがこの学校へ転入してきたと言う事実は、金髪で美少女で留學生だと言う事も相まって早々に学校中の噂となって広がる事となってしまうた。ああ、いつも思うがこの学校はこう言う事に関して情報の伝達速度が半端ないな。感心してる場合じゃないけど。その転入生が二年B組の月城昴の双子の妹である、なんて情報がとつくに出回っているのも当然なわけだ。それを聞きつけてまず疑問に思う奴は多々いるだろうが、そんな次元じゃない疑惑を抱く人物が実は一人だけこの校内に存在している。これで三度目だろうが、もう一度だけ言おう。俺には同い年の幼馴染がいる。それも、俺の事なら多分何でも知ってるんじゃないかと思えるくらいの奴が。

「こらーっ、昴！ あんた一体何をしでかしたの！」

昼休み。さてこれから購買にでも行つて飯にありつくとするかと重い腰を椅子から上げたその時だった。教室の奥側の扉が勢い良く開けられたかと思うと、その向こうから突然別クラスの女子生徒が半ば乱入するかのよう飛び入ってきたのである。それも、俺に向けて奇声を発しながら。

「昴お兄ちゃん、あれ誰？」

小声ですかさず隣の席のルナが聞いてくる。俺は適当に、「ああ、幼馴染だ。多分あいつにだけはどんな説明しても納得してくれないからその時は頼む。……あとお兄ちゃんやめろ」などと言う返事をして、すかさず今にも暴れ出しそんな幼馴染であるそいつの所へと向かった。

「……うるさいぞ紅憐<sup>くれん</sup>。周りを見ても、こっちはついさつき授業が終わったばかりだ。ちょっとは人の目を気にしたらどうだよ」「うっさいわね、それよりどう言う事よ。あんたに生き別れた妹が

いて今日転入してきた、とかさつき噂で聞いたんだけど。あたしの記憶が正しければ、あんたにそんな妹なんていなかったはずよ。どう言う事なの？」

こりや説明するまでもなく手が付けられん。俺はちらりとルナの方へ視線を向けると、「仕方ないわね」と言った表情でルナが近寄ってくる。

「こんにちは、わたしは月城瑠奈と言います。貴女は？」

俺の幼馴染であるそいつは、むすっとした表情でルナを睨んだ。

「あさひなくれん朝雛紅憐！ 言っとくけどあたしがこいつに関して知らない事なんてないんだから。あなたが何者かは知らないけど、何のつもりで昂に近付いてるわけ？」

なんとも聞き取りようによつては恥ずかしくなるような事をさらりと言つてのけてくれる幼馴染こと朝雛紅憐だが、やはりコイツには何を言つても説得しようが無い事はルナにも理解して貰えたらしい。ルナがこちらに一瞥をくれるのを確認して、俺は軽く頷いた。

「あら、紅憐さん……ですか？ 『お久しぶりです。わたしの事、覚えていますよね？』」

すかさずルナは鋭い眼光を紅憐に向けると、少し強調させた言葉を紅憐に放った。

「え？ あれ？ ……瑠奈？」

おいおい、まさか今のが洗脳の魔法かなんかだつて言うのか。まるで催眠術じゃないか。魔法使いつて言うよりは超能力者か何かじゃないか、こいつと、俺が色々と考えている間に紅憐はすっかり荒れた気分も晴れてしまったようで、なんともまあこんなに上手くいつちまうとさすがに俺でも度肝を抜くというか、少しはルナの魔法つてやつを信じてしまつてもいいかなと思えてくる。いや、魔法じゃなくて超能力か。この際どつちでも良いけど。とにかく事実<sup>が</sup>は認めなければならぬだろう。先程まであれだけ騒いでいた紅憐

「あ、ごめん……なんで忘れてたんだろ。うん、久しぶりだね！」

こんな具合だからだ。

「ううん、無理も無いわ。だってすごく昔の事だもの。でも良かった、思い出して貰えて」

そんなやり取りを見つめながら、俺は口さえ開かないままだが呆然としているしかなかった。だってそうだろ？ 目の前でこうまでされちゃ、何も言えないのは当然じゃないか。

「で、どう言う仕組みだ？」

紅憐が教室から帰って行った後、昼食である購買のパンとジュースを戴きながら、周りの生徒たちに聞こえない程度の小声で俺はルナに向かってそう問い出した。

「簡単。あの人……朝雛紅憐に『昔、月城瑠奈と言う知り合いが居た』と言う錯覚、幻覚と言ってもいいかな、それを植え付けたのよ。目には見えない力、魔法を使ってね」

「魔法、ね……。俺にはどう見ても、良くて催眠術のようにしか見えなかったんだがな」

そう、確かに考えても見ればあれを『魔法』だと決め付けるのはいささか早いだろうと思う。あの程度なら催眠術で説明がつく。とてもではないが、魔法なんてファンタジー溢れるものだったとは思えない。ルナの魔法がそう言うものなのだとは何度も説教されてはいるものの、やはり突っ込まずにはいらなかった。

「ふうん。貴方は催眠術なら信じるんだ」

「ん、どう言う意味だよ」

「だってそうじゃない。催眠術って、それが一体全体どう言う仕組みなのか貴方には解るわけ？ 普通ならまず解らないでしょう。でも、世の中には催眠術なんて言葉は有り触れている。……まあ、これも一つのトリックよね。『催眠術と言うものは存在する』と思われる、周りがそうだと言うだけで存在自体を肯定する。それ

は人間の心理でもあるわけだし。それに比べて『魔法』って言うのは、言葉は知られていても事実存在しているかと言われればほとんどの人がしていないと答えるわ。それはその魔法と言う言葉、存在の扱いが世間ではあくまでファンタジックなものであるからよ」

「ふむ、難しいが理解できなくはない」

ルナは話を続ける。

「わたしの使う魔法って言うのは、そう言った世の中が勝手に定義カテゴライズ化したような存在ではないの。もっと別次元、別意識の存在。わたし達のような魔法使いでしか理解できない、世間から隔離された技術。とでも言うべきかしらね。実際はもつときちんとした理論があって初めて扱われる力なのよ。さっきの催眠術じみたわたしの魔法だって、一概に仕組みだけ考えれば世の中の言う催眠術ってものと大して変わらない。でも少し違う部分がある。そこ部分があるからこそ『魔法』なの」

「その部分ってのがどう言う仕組みなのか、ってことが俺は聞きたいんだけどな」

ルナはさらに話を続ける。

「例えば、催眠術は人間の意識を一定の場の空気や雰囲気、心理的な言葉や問い掛け、視覚的な動作、聴覚的な音色などで対象の精神に干渉する。眠らせたいなら単純にそういった雰囲気を作り出し、眠くなるような言葉や目を疲れさせる振り子とか、心地のいい音やメロディを奏でたり……そういった、誘導するためのフィールドを作成、構築する。そうして初めて催眠術って言うのは完成するし、かかる。かからない人だっているけどね。かかりやすい人っていうのは単純に感受性が良いからとかそんなものよ。ここまでは解るかしら？」

「ああ」と、適当に相槌を打ってみた。

ルナはさらにさらに言葉を続ける。

「で、わたしの場合。さっきのやり取りを見てれば解ると思うんだけど、そう言った『動作』を何一つ行っていないでしょ。ただ一言、



『お久しぶりです』と、『わたしの事を覚えていますか？』と言った、聞いただけ。これだけなの、わたしの場合は。それだけでわたしが植え付けたいと思った『錯覚』を彼女に与えた。わたしはこれを『言葉の魔法』と呼んでいるわ。ようするに催眠術と違うのは、視覚的、客観的に見ると何の仕掛けも無い言葉だけの洗脳、ってわけ」

ふむふむなるほど、ここでようやく俺が口を開く番がきたわけだ。  
「ようするに超能力か」

「違うわよっ！ もう、何度言わせたら解るの？」どうやら少し怒らせてしまったらしい、ルナは口の先を尖らせながら、「あのね、『言葉の魔法』に魔法って言う定義をつけるには確かに今の話じゃ無理があると思うけど、これはあくまで視覚的、客観的に見た場合の話。魔法だって定義されるからには、きちんとした見えない部分での理由があるんだから」

へえ、それはなんなんだ　とは、俺が聞かなくとも勝手に語ってくれそうだ。

「魔法っていうのは、いろんな思想、いろんな構想、いろんな錯想があって生まれるもの。個人によって使う魔法って言うのはすごく差が生まれるし、それぞれがぜんぜん違うタイプの魔法使って区別されるのが普通なの。逆に言えば同じような魔法を使う魔法使いが二人以上出てくるほうが稀ってくらい。でも、そんな魔法にもひとつだけ、本当にひとつだけ共通する点がある。それが『魔力』なの」

「魔力……ようするにMPみたいなもんか？」  
マジックポイント

ゲーム的発想で横槍を入れてみる。が、当の語り手ルナ様は不満そうな顔だった。

「当たらずとも遠からず、ね……。魔法を使うために消費するものって言う点ではおなじだけど。魔力とは人間の中にある物質的ではない力の事を指しているの」ルナはそう言いながら教室の窓を左手で開いて、「これは物質的な『力』でしょ。物を動かすための力。」

普段、何気なく使っている力よね……で、魔力っていうのはようするにそうではない力のこと。物質的ではなく別次元的な力、とでも言うのかしら。ようするにそういった力が作用して初めて『魔法』と認定される。魔力が使われなければそれは魔法とは呼ばないの。だから、催眠術だって魔力を使われない限りは魔法じゃないし、少しでも魔力が使われればそれは立派な魔法なわけ」

やばい、さすがにそろそろ頭がこんがらがってきた。

「わたしの『言葉の魔法』<sup>ワードオブマジック</sup>には、わたしの言葉自体に魔力が込められている。相手がその言葉を聞いた瞬間に、それをそうと信じ、錯覚してしまう。そうさせる力が込められているの。そうね、催眠術ってさっきも言った通りかかる人とかからない人がいて、それはその人の感受性の問題だって話をしたけど、わたしの『言葉の魔法』<sup>ワードオブマジック</sup>の場合はそんなものを無視して強制的に幻覚を植え付ける。それが誰であろうとも関係なく。それが魔力を込めているおかげ。魔力を込めている証拠。魔力を込めている所以。だからこそその『魔法』、そしてそれを行使するわたしこそが『魔法使い』ってこと」

「……ん、でもおかしくないか。その魔力つてのを込めていれば相手がなんであれ構わず確実に錯覚させられるんなら」俺は親指を自分に向けて立てて、「俺はどうなるんだよ。俺には一切合切その魔法とやらは効いてないじゃねえか」

そう、それこそが俺の最大の疑問だった。確かに目の前でその力を使われ、それらしい説明も受けて信じてやってもいいとまで思えるのだが、そこまでだった。そこまでしか俺は思えない。『信じる』事ができない。未だに半信半疑でいるのだ。それはきっと、自分が掛かっていないからなのだろう。実際に自分の身で体感しない限り、人間と言う生き物は完璧に信じる事ができない。

「それが、わたしも不思議なのよね……」ルナもそこだけが理解できないと言わんばかりの表情で、「わたしが本当の妹だと錯覚させるために『言葉の魔法』<sup>ワードオブマジック</sup>を貴方に使ったっていうのに、いざ次の日になるとアレだし、昨日の事は忘れているし。今まで失敗なんてし

たことがなかったから、正直すごく戸惑ったもの、わたし」

昨日の記憶　確かに途切れている部分があるのは自分でも解る。昨日のうちにルナと出会っていたと言う事実だってそうだし、何をして何を見て何があったのか　全て覚えていない、これだけは確実だった。だからこそ今のこの状況がどうしようもないのだけれど。「昨日、いつたい何があったんだよ。思い出せば全て理解できるってルナは言うけど、何があったのかくらい聞かせてくれてもいいんじゃないか？　そうすれば、もしかすれば思い出せるかもしれないし。脳みそいじくられんのは勘弁だけどさ」

「うーん。そうよね、そうなるわよね。まあいいんだけど。あー、

……困ったわね」

「何が困るんだよ」

「まあ、なんていうか。端的に言うとなに何もなかったわよ。ただわたしが戦ってたところを見られちゃったってだけで」

「戦ってた？」それってどう言う事だよ　と、問い詰める前にルナが語り始める。

「ようするに、別の派閥の魔法使いが襲ってきたのよね。地位獲得のためかしら、結構強くて焦ったんだけど。なんとか撒いたみたいだし多分もう大丈夫だけどね。その戦いの一部始終を貴方に見られちゃったわけ。それだけよ」

「派閥、襲ってきた、地位獲得……って、どう言うことだよそれ？」

「説明すると長いんだけどね。ま、簡単に説明すると魔法使いっていうのは普通、派閥っていう組織みたいなものに属してるの。その派閥だけど、いろいろあって違う派閥同士での闘争が絶えないのよね。特に扱える魔法の強力さに関して競い合ってる。確かにそうすることが目的で作られた派閥だけれど、ちょっと最近過激すぎると言うか、死傷者まで出したりするわけ。それが、自分の魔法がそいつの魔法より優れているんだって証明するのに一番手っ取り早い手段だから。挑まれたほうも挑まれたほうで大変よね、そういった戦いとか強さを比べるだけのようなか魔法使い相手にするのはほ

んと疲れるし。そもそもそういった部類が専門じゃない魔法使いだ  
っていっぱいいるのに。今じゃ強ければ正義、勝った者のほうが優  
れている、みたいなレッテルが貼られてる現状なの。魔法使い<sup>イコル</sup>「戦  
う者、強さを求める者、みたいな。わたしだってそういった魔法が  
使えないわけじゃないんだけど、専門分野はそっち方面じゃないか  
ら困ってるわけ」

なんだが、いつのまにか凄く物騒な話になっている気がするんだ  
が。戦う魔法少女・ルナは、飽きる事なく話を続ける。

「んで、まあそうやって厄介払いをしてる時に貴方と出会ったって  
わけ。もちろん一部始終を見られちゃったみたいだったから逃げる  
時だつて連れて行かないわけにはいかないし、そりやもう大変だつ  
たのよ。うまく撒いた後は貴方の対処で忙しいし　もう忙しかつ  
たからあんまり覚えてないけど、そんなこんなで結局貴方をどう対  
処するか考えた結果、今の結論に至るわけ。あんまり覚えてないと  
は言え、貴方をわたしが気にいらなかったら最悪殺してたかもしれ  
ない。まあわたしはそういう物騒なのって好きじゃないから、良く  
て派閥に送還してこっちの世界に引き入れるとか方法がないことも  
ないけど、それもそれで他人の人生勝手にいじくりまわしてるみた  
いでいい気分しないし、結構悩んだのよ」

今でも十分いじくりまわされているとは思うのだが、今の話を聞  
いていると最悪な結果にならないだけマシだったとも思える。もち  
ろん、全ての話を信じるならば、だ。

「ま、大体そんな感じがしら。どう？　何か思い出せた？」

「いや残念ながらまったく。むしろ今の話を聞いて余計に疑い深く  
なったかもしれないってくらい」

「……そう。ま、そのうち思い出すわよ。気楽にいけばいいわ。と  
いうかわたし的にはすぐに貴方の記憶が戻っちゃうとここまでした  
努力が水の泡だし、それなりに現状を楽しみたいし、別に今すぐは  
戻らなくていいんだけど」

おい、それはさすがに俺が困る。まあこんな美少女（あくまで以

下略)が妹だつていう、御門風に言えばおいしいシチュエーションなんてそうそう巡つてこないのだろうし、ここは流れに流されてみるつてのも悪くはないと思うけどさ。でもだからといって、記憶が戻らなくていいって事にはならない。

「それにしても」不意にルナが口を開いた。まだ何かあるのか、と思いつながら黙つてその顔を観察しながら、「……学校の購買のパンつてこんなにも不味いものだったのね。パサパサしてるし具は安物っぽいし、それにこのコーヒーだつてとてもじゃないけどコーヒーと呼びたくはない味よね。不味すぎ」

まったくさつきまでの話とは関係のない、突拍子もなくどうでもいい話題を振られた。

放課後。俺は部活なんてものに入っていないので、毎日のように帰宅部である。仲の良い友人達はほとんどが部活に入ってる現状、いつものごとく俺は一人寂しく下校する　はずなのだが。

「帰るわよー、お・に・い・さ・ま？」

こいつがいるのを忘れていた。

「なんだそれ気持ち悪い、お兄ちゃんの次はお兄様かよ。お前、意外とマニアックだろ」

「あ、お前つて言った。お前禁止！」

「じゃあ俺からも言わせてもらおう、普通に呼べ」

「なによ、ちよつとからかってみただけじゃない。つれないわねえ。なによ、それじゃあわたしになんて呼んで欲しいわけ？」

それは何度も言つてるような気がしないでもないが、まあいい。この際はつきりとさせてやる。

「昂だ。名前で呼べよ、呼び捨てでいいから。はつきり言って、お前に兄呼ばわりされるのは背筋が凍る」

「そそのの間違いじゃなくて？」ルナはにやつきながら、「ま、別

に貴方の呼び方なんてどうでもいいんだけどさ、一応体裁上ではわたしの兄つてことになってるんだし、そう呼んだほうが違和感がないと思っただけよ。……ふうん、それにしても名前で呼べだなんて、貴方もしかしてわたしに気があるの？」

「な、なんでそっち方面に話が進むんだよこのマセガキ！ それに、名前で呼べつて言っただけはお前もだろ！」

「あーもう、さっきからお前お前つて言わないでよね。別に名前で呼んでほしいわけじゃなくて、お前つて言われるのがほんつと嫌いなだけなんだから。別にお前つて呼ばないならなんて呼んでくれてもいいんだし」

そこまで嫌悪するのは何か事情があるのだろうかと思っただが、こいつの事に関して深く考えても意味がない気がした俺はすぐに思考を停止させた。俺の場合他人を呼ぶときは基本的に苗字を使うんだが、こいつは俺と同じ月城の姓を名乗っているからかそっちでは呼び辛い。ま、今まで通り名前で呼べばいいんだろうけど。

「わかったわかった、悪かったよ。俺もちゃんと呼ぶから、お前もそれなりに恥ずかしくない呼び方でよろしく」

「うーん、じゃあ兄貴？」

「……似合わんからやめれ」

「それじゃ兄くん」

「一部にしか解らん呼び方をするな。つーか兄呼ばわりはやめてくれないのね……」

「もちろんですよ。こういう妹キャラつてのは大事なんだから」

キャラかよ。やっぱこいつ隠れマニアとかじゃないだろうな。

「ま、初心に戻るつてことで兄さんね。名前入れてほしいなら兄さん。ほらほら、早く帰るわよ兄貴さん」

「はいはい、解ったよ」

椅子から重い腰を上げ、机の上に横たわって置かれている鞆を右手で取って、俺はルナと共に教室を後にする。扉を抜けて廊下に出ると、何やら見知った顔が立っていた。

「あ、昴やつと出てきた！ 瑠奈も一緒？ ちょうどよかった、今日部活休みだから今から帰るところなんだけど、三人で一緒に帰らない？」

朝雛紅憐がそこにいた。

「お、紅憐珍しいな。つーか、もしかしてそこでずっと待ってたのか？」

「へ？ ああ、うんそうだけど。あんた昼休みにあたしに言ったじゃない、ちよっと騒ぎすぎだって。一応これでもあれから反省したんだからね。クラスの人達に迷惑がないようにって外で待ってた」  
「いや、別に騒がずに俺を呼べいいだろうに。そう言う所はなんていうか健気なやつである。」

「ね、瑠奈も一緒に帰るんでしょ？ 三人で帰ろうよ」

「ええ、わたしは全然構わないわ。なんていったって久しぶりに会うんだもの、色々とお話したかったし」

「じゃあ決まり、ほら行くわよ昴！」

俺の意思は無視かよ。ま、別段断る理由なんてないけどさ。

帰り道、いつものように見慣れた風景を眺め歩く俺 と、イレギュラーが二名。俺はというと、先頭を賑やかに会話を弾ませながら歩く二人の少女の背中を見つめながら、いまいち会話に入り込めない異様な空気って言うか雰囲気には押されていたりする。女同士の会話ってなんか男じゃ入り込めない壁みたいなもの、感じないだろうか。少なくとも俺は感じる派だ。そんな中、ふと会話の内容が聞こえてくる。ルナだった。

「ねえ、紅憐は魔法使いっていると思う？」

「おいおい、どんな話題をしているのかと思ったらいきなりネタバレか？」

「うつん、どうだろ。あたしはあんまりそう言うのって信じてない

かも。冷めてるって思われちゃうかもだけど、魔法とかそういうのってあくまで物語とか架空の存在だと思ってるからさ。ルナは信じたりするの？」

まあ普通はそういう反応だろうな、幼馴染が平常で良かった。

「わたしが信じてるか信じてないかは置いておいて、実際にこの世に魔法使いつて言うのがいても、それは別に不思議なことじゃないとは思えないかしら。たとえば、手品師<sup>マジシャン</sup>って居るよね」

「うん」

「手品って、はたから見ると凄く不可思議で、意味不明で、一体全体どうなってるのか解らないでしょ？ 特に有名な手品師<sup>マジシャン</sup>となるとなおさらね。そう言った手品と、わたしが言う魔法ってどこが違うんだと思う？ 何も違わないように見えない？」

「つまり、瑠奈は手品が魔法だつて言いたいなの？」

「うーん、それはちよつと違うかな。手品って、見た目だけなら普通の人にはどういう仕組みなのかわかんないじゃない。むしろわかってしまうと面白くない。だからこそその手品であつて、でもそれは目の前で現実として有り得ている。はたから観ていると不思議に見えるような、目に見えない仕掛けがあつて手品つて言うのは完成されるわけ。わたしが思うのは、魔法だつて結局同じものなんじゃないかしら、つてことなの」

自称魔法使いでありながら、魔法とは存在するのか否かだなんて話題をしてどうするつもりだろうか。いや、相手が紅憐だからこそそういった話題になつてしまっているのかも知れないが。

「なるほど。ようするに、魔法だつて手品と同じで本当は目に見えない仕掛けがあるつてこと？ それはそれで、ちよつと夢が壊れちゃつような気もするけど」

「うん、確かにそうよね。でも、わたしはそうなんじゃないかと思う。ここでもう一度、さっきの問いを反復するけど 紅憐は、手品と魔法の違いは何処だと思つかしら？」

「簡単だよ」紅憐は予想を裏切るような清々しい声で、「その存在



が現実として知られているか、そうでないかじゃない？ 手品って普通にテレビとかつければやってるけど、魔法はまったくやってない。誰も見たことがない、だからこそ誰も信じていない。そこが手品と魔法の違うところじゃないのかな？」

「御明察」ルナは少し嬉しそうに、「そう、魔法なんて存在は世の中じゃ非現実扱い。実際に見た人はいないし、空想の世界の産物だ」という認識が一般常識。でもよく考えてみて。それなら、どうして魔法という言葉はこんなにも広まっているのかしら。現実には存在しないと思われているのにもかかわらず、魔法って言葉や知識、存在は広く認識されている。例え非現実扱いなのとしても、それを知らないって人のほうが珍しいくらいに浸透しているわ。何故だと思う？ わたしはこう考える。『魔法使いは実在する、もしくはしていた。だからこそ魔法という言葉はこうして広まった』んだ、ってね」

「難しいね……。でも、確かに無から有は作り出されない。魔法って言葉がここまで広がったのは、その存在が実在していたから、かうん、良い考えだとあたしは思うよ」

なんだこれ、いつの間にか紅憐がルナの話に犯されてないか。まさか例の魔法とやらを使ってるんじゃないだろうな。そうする理由が見当たらないから、使ってないとは思うんだが。

「うん、ここでわたしはさらに考える。それならどうして、手品のようにならぬ中に公表されないのか。現実には存在しているのなら、何か理由があつて世間一般の目に触れられないような事情があるんじゃないか、って」

「それは、今現在の話？ だとするとそれは微妙だよ、瑠奈。だって、魔法がもし存在していたのだとしても、今現在まだ存在しているのかは解らないじゃん。確かめようもないしね。あたしはこう考えるな。『魔法は実在していたけれど、その力があまりにも非現実的だったため誰にも認められなかった。だから廃れた』んじゃないか、って」

あれ、紅憐ってこんなキャラだったか？ 確かに成績良いのは知ってるけど。ちなみにどれくらい良いのかというと、ざっと俺の二倍は軽く取れる女だ。くそ忌々しい。

「本当にあったのかはあたしには確かめようがないし、証明しようもないからはっきりとは言えないけどさ。きつと昔、大分昔に誰かが魔法を発明して、したのはいいけど迫害されちゃって、そのまま言葉や存在だけが非現実的なものとして伝わってしまった。結局その存在は認められずに魔法はなくなった。ううん、今も残っているのかもしれないけれど、やっぱり誰も信じない程度のものでしかないんじゃないかな。きつと魔法は誰にも解らない、科学では説明できないような力なんだと思う。だからこそ信用されないし、認められなかった。人間って、説明のつかないものは大抵信じないからね。だからきつと、実在していたとしても世間に認められないものだっていうのは変わらないと思う」

「ふうん、なるほどね。それが紅憐の考えってわけか。……うん、すごく真理をついていると思う。正直少し驚いたわ。てっきり頭ごなしに馬鹿にされるんじゃないかと思ってたから。ここまで真面目な返答がくるとは思ってなかった」

「あたし、こう見えて実は結構こういう話って好きだからね。普段どんな服を着るのとか、何をして遊ぶのとか、携帯の新機種がどうなのとか。そういう普通すぎてつまらない話より百倍面白いし、話し合う価値があるしさ」

俺としては有り得ないものの話をしてても意味があるように思えないのだが、そこはそれぞれの価値観といった所だろうか。ルナは事実有り得るものなのだと確信している上であえて話しているわけだし。

「ふふふ。わたし、紅憐とはすごく気が合いそう」

「うん、あたしもそう思ってた」

なんだかんだで、今日たった一日で二人はそれなりに仲良くなってしまったようだ。例え、そのきっかけがルナの魔法によってもた

らされた、偽りの関係だったのだとしても。

紅憐とは自宅であるマンションへ向かう途中の交差路で別れた。

さらにその途中にあるコンビニエンスストアに寄った俺とルナは、今晚のおかずを買うことにした。もちろん割り勘で。ルナ曰く「妹なんだから奢ってくれてもいいじゃない」とのことだが、お生憎様、俺にそこまでの資金力はない。丁重にお断りさせて頂いた。そんなこんなで、俺とルナは自宅のマンションへと帰宅した。一階の入り口にはオートロックが掛けられている扉があり、特定のパスを入力しなければ中に入れない仕組みになっている。さらには至る所に監視カメラがあり、なんとも厳重な警備体制である。俺はロックを解除するために、パスを入力しようとして、「……あれ？」ふと、ひとつの疑問の壁にぶちあたった。

「なあルナ、昨日って俺がルナを中に入れたのか？」

「え？ 違うけど。昨日はわたしが勝手に夜中に入ったのよ。それがどうしたの？」

「いやいや、どう見てもおかしい部分が目の前にあるでしょうよ、ほら。」

「どうやって中に入った？ ここ扉にロックが掛けられてて、パス入力しないと中に入れない仕組みになってるんだが」

「ああ、そんなの簡単じゃない」ルナは面倒くさそうに呟いて、「このマンション周辺で入り口付近を監視しておいて、誰か住人が入り口付近に近づいたら一緒に中に入ればいいだけじゃないの。住人一人がこのマンションに住んでる住人全員を把握しているとは到底思えないし、どう考えても怪しまれたりはしないしね。それだけの事」

なるほど、聞く限り特別おかしいことはやっていないようだった。ルナのことで、魔法やらを使って壁をすり抜けるだとか、窓の近く

までジャンプするだとか、扉を壊して中に入って修復しなおすとか、そういった突拍子もないことをやらかしていないかと少し心配になってしまった。まあよく考えればここには監視カメラもある。映像記録に残るような場所でそういった行為を行わないのは当たり前と言っべきだろう。

「それならいいんだけどさ。……実際問題、本当にいいのかどうかはこの際おいといて」

そう呟きながら扉のロックを解除して、マンションの中へと入る。いつ見ても豪華で豪華なマンションである。とても俺のような平凡で貧乏な高校生が一人で住めるような場所とは思えないだろう。事実、これで二度目にも関わらず辺りを見回してはもの珍しそうな様子でルナが突っ立っていた。

「それにしても意外っていうか。貴方、よくこんなところに住んでるわよね。しかも一人暮らしだなんて、少し贅沢すぎやしないかしら。さっきのコンビ二での件を踏まえて見るとすごく不思議なんだけど。なに、お金持ちの親でもいるわけ？」

「悪かったな、ケチくさい貧乏学生で」俺は皮肉交じりに悪態をついて、「ここには元々家族で暮らしてたんだよ。確か一年と少し前かな、両親が死んでさ」

「……え？」

「交通事故だった。ありきたりだろ？　ありきたりすぎて笑えてくるよな。」

なんつーか、まあそんな事があつて俺は天涯孤独の身、ポジティブに言い換えれば自由気ままな一人暮らしを送ることになったわけだ。俺の部屋は両親が買い取ったもので、それをそのまま相続したから家賃もいらねーし、毎日の食費扶持くらいは少しのバイトで稼げる。ま、だからあんま余裕ないんだけどさ。そんな複雑そうでもうでもない事情があるってわけ」

「……………」

何故かルナは黙り込んでいた。おいおい、まさか今の話で気に障

ったのか？ 別にルナが気にするようなことは何もない、と言うより関係のない話なんだから他人事のように聞いてくれるのかと思っただが。

「なんだよ黙り込んで。なんか気に障ったか？」

沈黙の中、エレベーターが到着した。扉が開く。ルナは無言でその中へと入っていった。

「お、おい。待てよ」

俺もその後を追うように、エレベーター内部へと足を踏み入れる瞬間、閉まる扉。動き出す機械の箱。唸る駆動音が静寂を包み込みふと、ルナの口が開く。

「……そっか、死んじゃったんだ」

顔を伏せて、ルナは呟いた。まさか、俺の両親が死んだってことを気にしているのか？

「ああまあ、そうだけども。別にもう俺は気にして」「そこまで言いかけた時だった。瞬間、信じられない出来事が起こった。いや、これは有り得ない光景だと言ってもいい。「ちょ、おいルナ」

ルナが俺の胸元に顔を埋めていた。

おいおいちょっと待て、これはいくらルナでもさすがにまずいものが……。

「……ごめん」ふと、何かが聞こえた。ルナの声だった。「ごめんなさい。わたし、何も知らないで……家族ごっこだなんて、勝手に他人の領域を踏みにするようなこと、しちゃった」

ルナはまるで懺悔するかのように呟いて、俺の胸元から離れなかった。沈黙の中、ただエレベーターの駆動音がしばらく続いていた。

あのエレベーターの一件の後、ルナの態度は一変して酷いものだった。

「勘違いしないでよね、別に貴方に心を許したとかそんな意味だったんじゃないんだから。なによあれ、背中に手なんか回さないでよね気持ち悪い。わたしにだって色々あったっていうか、それだけなんだから。そこんとこほんと誤解しないで欲しいわね」

エレベーターから降りて、そそくさと俺の部屋へと入り込んだと思いきや第一声がそれである。天と地ほどの差とはこういうのを言うのだろうか。まあ、照れ隠しみたいで可愛いと思わなくもないんだけど。

「あー、はいはい。解った、解ったから。忘れてやるからもういいだろ？」

「別に忘れるって言うわけじゃないけど」ルナは少し気恥ずかしそうに、「わたしだって、一応悪いことをしたなって思ってるのよ。それは認めるわ。事情も知らずに軽率な行動をとってしまったのは謝る。妹っていうのは駄目だったわね……他に何か、もつといい方法を考えないと」

何やら気にしないでいいことをルナは気にしているようで、俺としてはどうしてそこまで固執するのか解らないけれど、ルナにはルナの事情がありそうだ。無駄に余計に詮索するのは野暮つてもんだろ。その点に関してはあえて何も言わないでおくとする。

「別に。いいんじゃないか」

「だけどひとつだけ。たったひとつ、俺は言わなければならぬい。」

「……え？ 何が、いいのよ」

「いいだろ、別にさ。家族ごっこ？ それがどうした、大いに歓迎だって言ってるんだよ。この話を持ちかけてきたのはルナだけだな、それを認めたのは誰だ。俺だろうが。確かにルナの魔法とやらで俺が洗脳されちまって、そうした上でこんなことになっているとするならそりゃルナに落ち度つてもんが生まれてくるかも知れない。でも、違うだろ。ルナの魔法は俺には効いていないんだから。その上で、効いていない上でこうなることを望んだのは誰だ？ 俺だって言ってるんだよ。勝手に解釈して一人で考え込むな。俺は別にルナの

言いなりになつてゐるわけじゃない。自分の意思でこうしてるんだ」  
確かに、少しは流れに乗ってしまった部分もあるだろう。ああ、それは認めてやる。だけどそれがなんだ。結局俺はルナがいるこの現実を認めた。いてもいいと思つた、思つてゐる。そう、今でもだ。それは決して変わらない。理由なんて知るもんか、そう決めたんだから男に二言はない。

「なに、それ。なんで……そんな風に言えるの」

ルナは顔を伏せ、呟いた。

「なんでもクソもあるか。それが事実で真実で現実だつて、ただそれだけのことだろ？ 勝手に自分で思い込んでんじゃねえよ、このばか」

「ばつ……」ルナは急に顔を真っ赤にして、「ばかとは何よ、わたしはこれでも真面目に考えてるのに！ 昨日だつて本当は嫌だつた、何の関係もない貴方をただ自分勝手な都合で巻き込んでしまったことが！ だから悩んだ、苦悩した、苦渋した！ それで選り出した結論がこれなのよ。これしか思いつかなかったからこうなつた、ただそれだけ！ それだけなのに……それも間違いだつた。わたしは駄目だつたのよ、間違つてたんだから。それを自分で気付いて、後悔して……それなのに、どうして貴方はそうも簡単に、いとも容易く、あつさりばつさりと切り捨てられるの。どうして……そんな風に、してくれるの？」

しなだれるかのように、ルナは床に膝をついた。

「……ルナに何があつたのかは知らねえよ。そっちの事情は聞いたこともないから俺には何て言えればいいのか解らない。だけど、これだけは言える。ルナは何も悪くないだろ。昨日俺がその戦いとやらを見てしまったのだから、半分以上は俺のせいなんだから。全てが全て自分のせいだとか思うな。それにさっきも言つただろ。俺は自分で決めたんだ、ルナが妹だつてことに何の不満もねえよ。正直にぶつちやけてやれば一人寂しいところにルナみたいな可愛い妹ができて嬉しいって気持ちも多少はあるんだよ。ルナと一緒にいて、こ

ういうのも悪くねえなっと思ってんだよ、悪いか？　そのどこが悪い？　悪くねえよな。何が悪いってんだよ」

「……、ばか」ルナは両手を握り締めながら、地面に向かって呟く。「なによ、それじゃこんなに悩んでたわたしが、本当のばかみたいじゃない」

「ああ、違いない。だからばかつて言っただよ、ほら」

そう言っ、俺は右手を差し出した。別に何の意味もない、ただ手を貸してやろうと思っただけの行為。

「……そうね、今回はわたしの負け。敗北よ、惨敗だわ。……うん、認めてあげる」

「なんだよらしくない。俺の妹なんだって言うならもつと気丈でいろよ。泣いたり悲しんだり、そんなのルナにはまったく似合わない。それぐらいの覚悟、あるんだろ？」

我ながらちよつとばかりクサイ台詞かとも思っただ、それでいい。ルナは俺を見上げながら、その手で俺の右手を握った。力を入れて、俺は彼女を引き上げるように立ち上がらせた。

「うん。……ありがとう」

まだ涙が残る瞳を少し赤く腫らせながら、しかし今までに見たことのないぐらいの笑顔でルナはそう答えた。一瞬だけ、本当に一瞬だけだけれど、俺はそんなルナの姿に見惚れていた。

「でも」ふと、ルナが何かを呟く。繋いでいた俺の手を離すと、今度は不敵な笑みを浮かべながら、彼女は宣言した。

「次は負けないわ。覚悟しなさい、今度はわたしが貴方に泣き面かせてやるんだから」

夕食（と言ってもコンビニエンスストアで購入したおかずと白飯だけだが）を食べ終わった俺とルナは、各自好き勝手なことをしながら時間を潰していた。風呂には俺が先に入ることになって、その



間、ルナはどうやらニュースを見ていたようである。ニュースといえば最近物騒な話題があったな、なんでも連続殺人だとか猟奇的だとか、そんな感じの。案の定、ルナもそんなニュースを見ていた。興味あるんだろうか。まあ、俺も割かし近所での出来事だから結構びびってた時期もあったっけ。今ではすっかり忘却の彼方って感じだが。さっさと犯人逮捕に至って欲しいところだよ、まったく。俺がバスタオル一枚でリビングに出たらそこには案の定ルナがいて、そっぴいっぴいいたっけーっ！などと叫びながら慌てて着替えに戻ったりとなかなかスリリングな夜を過ごしつつ、そろそろ就寝という時間までやってきた。はいここで問題です。若き男女二人が一つ屋根の下で寝る場合、もしそんなスペースがひとつしかなかったらどうすればいいんだよちくしょう。

「お前、本当にそこで寝るのか？」

俺はベッドを指差しながら、すでに準備完了と言わんばかりにごろごろと寝転がっているルナに対して問う。

「うん、そうだけど。何よ、不満でもあるわけ？」

「いやだってそこ俺の寝る場所……ふがつ、ま、枕を投げるな！」

「何口答えしてるのよ、いいからわたしはここで寝るんだからね。他にろくに眠れそうな場所ないし。……なにばおっと突っ立ってるのよ、寝るんなら早く寝るわよ」

……、えっと。

「こんな大きいベッド使っておいて、まさか独り占めするつもりだったわけじゃないでしょうね、兄さん？」

「いやいや、そういう事ではなくてですな、姫。」

「なによその不満そうな目は。疑い深そうな顔は。いいから早く電気消してくれない？」

ああもう、だからそうじゃないんだって！

「……あのよく現状の理解ができないんですが、ようするに一緒に寝ろと言っておられるのでしょうか姫君？」

「ひめ……？ 貴方が何言ってるのかいまいちよく分からないけど、

ようするに兄さん一人でこのベッドを使うのは勿体無いからわたしも使うつて言ってるんだけど？」

「ああそうかなるほど……ってつまりそう言う事じゃねえかああああああああッ！」

なんてことだ。まさかこうも早く「お兄ちゃん一緒に寝よっ」

フラグが成立するとは思ってもしなかった。……いや待て、とりあえず落ち着こう。さすがにそれは怖い。色々な意味で怖すぎる。俺だって健全な一般男子、こんなベッドでこいつと一緒に寝たりなんかしたらどんな間違いが起きてしまうかわからん。っーか起きて欲しくない。後が怖いから。

「……ルナ、それ本気で言ってるの？」

「はあ？」ルナは心底不思議そうに、「別にいいでしょ、それくらい。これだけ大きいんだから狭いとも思わないだろうし。兄さんだけ寝させるのは癪だし、でもだからといってわたしが占領するわけにもいかないわ。じゃあ一緒に使えばいいだけじゃない、これ以上合理的な方法があるのかしら？」

「むう。まあ、そうなんだが……」

ああ、そうか。俺は今、ようやく気が付いた。ルナは俺の事を完璧に男として見ていないんだ。設定上で兄となっているからかそのようには接するけれど、それ以上の感情を持ち合わせてない。だからこそ、こうしてベッドを二人で使うだなんてことを平然と言つてのけるわけだ。なんでかは知らないが、その事実に対し俺はいらついた。

「……オッケー。なら話は簡単だよな」

「はあ？ 何言ってるのよ？」

「今からお前を襲う！」

「……何、え、ちょ。ちよつと待ってそれは……！」

がばーっ！ と、俺はルナのいるベッドの上ヘルパンダイヴ決行。ヤケクソ気味にルナの身体目掛けて飛び掛ってやった。

「うわ、や、やだ止めてよちよつと！ こ、こんなのナシなんだか

ら……！」

「ふ……どうだ、これでちょっとは俺を男として意識する気になったか、妹よ」

「はあっ！？　なるわけないでしょ、このヘンタイ！」

どか、と思いつきり急所に蹴りを貰う。くそ、ただの冗談だつていうのに本気で蹴りやがった。しまいにはベッドから落とされて尻餅の二段サービスときている。

「痛っつー……、じよ、冗談だつて。あまりにルナが無防備過ぎるから」

瞬間、俺は見た　ルナが泣いていた、完膚なきまでに。俺を睨みながら枕を抱きしめ、顔を真っ赤に染め上げながら黙り込んで。

「……お、おい。今のはだな、いわゆる兄妹間のスキンシップつか、その」

「ばかつ、死んじゃえ！　ヘンタイ！」

顔面に何かが直撃。また枕を投げられた。そしてまたヘンタイ言われてしまった。

「あ……ルナ、ごめ」

「もう寝るんだから！　今日はこっちこないで！」

扉まで閉められてしまった。これは明日の朝、土下座してでも謝るべきだろう。完全に完璧に最悪に俺のミスだった。……でもなんだろう。さっきのルナは、どこか凄く可愛かった。

そんなわけで、俺は一人リビングで眠ることとなった。一応、両親が生きていた頃に使っていた部屋があるっちゃあるんだが、あの部屋は使わない事にしている。両親が死んでから俺が決めたことだ。一度決めたことは簡単には曲げたくないし、一応枕はあることだし、リビングの床で寝転がりながら窓の外に見える星空を見上げるというのもまたオツなものだろう。

「ま、結局のところ俺はルナが好きなんだろうな……」何気なく呟いた言葉。だがそれは、紛れもない俺の心境を表していた。「……は。会って一日……まあ正確に言えば二日か。それだけでいとも簡単に一人の女に惚れちまうもんなのかね、男つてのは」

だが、それが俺の気持ちに変わりはなかった。今思えば一目惚れだったのかも知れない。まあ今となってはどうでもいいことではあるが、ルナにそれだけの魅力があることは確かだった。一日こうして一緒に過ごしたただけと言うのに、俺はいつの間にかこんなところまできてしまったんだろう。……妹、か。うん、もしかすると俺はルナのことを一人の女としてではなく、ただ単純に妹として好きなのかもしれない。だがそう思えば思うほど、その気持ちは偽りのように思えてくる。あの時感じたもどかしさは、そんなものでは言い表せない。ルナは確実に俺のことを男として見ていないし、きっとこの件が片付くのであれば、俺なんてはいさよなら、永遠の別れとなってもすぐに了承するはずだ。そういう事情が事情だから仕方ないけれど、それでも　やっぱり、それは何だか寂しかった。ああ、別に一人の女として俺の傍にいらなくてもいい。ただ今みたいな時間がずっと続いて欲しい、ただそれだけ。高望みはしない。そんな願いも、だがいつかは裏切られる。解っていても、俺にはどうしようもないんだから。

「防人よすまん。お前の言っていたことは割と正解だった」

まったく自分が情けなくなる。たった一日二日知り合っただけの少女に、これほどの感情を抱いているなんて。

「ま、ここで自分の気持ちをぱっきりさせとけば、後で後悔もしない、か」

月城昂は。自称魔法使いで、自分より三つ年下の少女で、義理の妹である月城ルナに惚れてしまった。そう、それが全てだった。

「オツケー、心の整理完了。……さて、そろそろ寝るか」

布団もないので、しかたなく床に枕ひとつ置いてそこに頭を乗せる。窓の外は綺麗な星空が浮かんでいて、眺めとしては思っていた

通り悪くない。すっかり辺りには誰もいないのか、車の走る音さえ聞こえない深夜。しん、と静まった空間で、俺が目を閉じたその時、

ちりん、と。鈴のような音がどこからともなく聞こえてきた。

なんだ今の音は。外からか？ いや、とてもそうは思えない

何せここは七階である。外からそんな音が聞こえてくるとは考えられない。それに、あの音色はまるで間近で聞くかのようにはっきりとしていて、何か印象強く脳裏に響き残っている。少し不気味さを感じた俺は、そのせいか完璧に眠気が覚めてしまった。何にせよ、音の原因を調べないとこのままじゃ眠れそうにもない。窓から外を見してみる。空になにかあるってわけでもないし、ベランダに何かいるわけでもない。猫かとも思ったが、よくよく考えればこのマンションはペット禁止なんだっけ、と思い出す。じゃあなんなんだろう。まさか下の地面から聞こえてきたってわけじゃないだろうし、と俺はベランダに出てまっすぐに下を見た。

「……、ん？」

一瞬見ただけでは何かわからなかった。だが、そう　じつと目を凝らせば見える。人だ　人が確かにそこにいる。黒いフードのようなものを被っていてあまり顔は見えないけれど、確かに見えた。まさかあの鈴の音があそこから聞こえたんだとは思いたくないが、とにかくこんな深夜に人がいるのは絶対におかしい。入り口付近で突っ立っているのにも何かわけがあるのかもしれない。パスコードを忘れてしまつて中に入れないとか、そうだとしたら大変だ。俺は上着であるコートだけを寝巻きの上から着て、音を立てないように静かに外へと出た。

マンションの入り口、オートロックドアの向こうには、ベランダ

から見下ろした時とまったく同じ位置に黒いフードを被った人影があった。

（なんだ、まるで俺を待っていたような……いや、考えすぎか）  
とりあえず話してみるか。ドアが開かれ、その先までゆつくりと俺は歩いていく。

「こんな夜中に外にいちや風邪ひくぞ。マンションに用があるんだろ？ ほら、俺が中に入れてやるから」  
「ふわり、とその頭を覆い被さっていた黒いフードが下ろされた。そこにいたのは、紛れもなく見たこともない黒髪の少女だった。「女の子……？ どうしてこんなところに」

「……やつと、会えた」少女はまるで呟くようにぼそとした声で、「もうすぐ、記憶が戻ってしまう。……その前に、私はあの魔法使いを倒さなければならぬ」

「な、なんだって……？ 魔法使いって、まさかルナのことか？」  
倒す、と言う事はまさか この少女がルナの言っていた『敵』だと言うのか。黒いフードの少女は、俺の問いを無視するかのよう

に呟く。  
「貴方も時間の問題。今の時間はもうすぐ終わってしまう……。だから。早く貴方も」

「誰？」

ふと背後から声がする。聞き慣れた声 ルナだった。

「貴女、まさか……」ルナは何かに気付いたかのように、「その人から離れなさい！ 少しでも触れたら、容赦しないわよ！」

「ルナ、こいつは……」

「ええ、話してた『敵』よ。まったく、まさか向こうからやってくるなんて……！」

やはりそうだったのか。くそ、我ながらさすがに無警戒過ぎた。少し考えれば、そういった危険性も十二分に考慮できたはずだと言うのに。

「……現状は把握した」黒の少女は言う。「魔法使い、ルナミス」

サンクトリア。明日の夜、午前零時に西条公園にて待つ。そこで、しかるべき決闘と決着を」

「あつ、待ちなさい！」

気付けば、黒の少女は瞬きと共にその場からいなくなっていた。まさか魔法を使ったのか。何にせよ、今この時の危機は回避できたようだ。無事に越したことはない。

「……、くそっ」ルナはらしくもないように吐いて、「一体全体何を考えているのよ、あの魔法使いは……！」

ルナミス「サンクトリア、と言ったか。おそらくそれがルナの本名だろう。やっぱりどこかの外国の生まれだったか。ふむ、俺の予想は見事的中つてわけだ。このシリアスな場面でそんな事を考えられるのは、やはり嵐が過ぎ去ったからだろうけど、それにしてもさすがにここまでくると俺も魔法使いつてもん existence を認めなければならぬようだ。

「……ルナ」俺はここしかないと思い立って、「その、寝る前はごめん。あれはやり過ぎた。反省してる。だからその……許してくれないか？」

ぽかん、と。何故かルナは俺の顔を見てそんな擬音が相應しい表情をしていた。

「もういいわよ、忘れたから」今度は何か嬉しそうな顔で、「それよりほんといきなりね、びっくりしたわ。さっきまで敵の魔法使いがすぐ目の前にいて、宣戦布告までされたっていうのに……何でそう気楽なのかしら、兄さんは」

まあ、確かにそう言われればそうなんだけど。俺にとっては、それよりもきつと優先順位が高かったってだけの話だろう。

「ごめん」

「何謝ってるの？ なんだからしくもなく下手だけど、もう気にしなくていいって言ってるんだから兄さんも忘れてよね。もお、まったく。ふふ」

なんだろう、妙に気持ち悪いくらいルナの機嫌がいい気がするん

だが俺の気のせいだろうか いや、気のせいではないと思う。だが何故そんな上機嫌なのかわからない。すると、ルナはマンションの中へと戻るように一人歩き始める。

「それにしてもあれよね。兄さんってへんな人だとは思ってたけどやっぱりへんよね、うん。ああ、そうそう　ひとつだけ指摘しておくけど」ルナは本当に可愛らしく微笑んで、「独り言はあんまりよろしくないわよ？　特にああいう独り言は、ね」

ルナはそう言い残して、一人我先にとマンションの中へと戻っていった。

……、独り言？

「え、おい。……まさか　ちょ、ちょっと待ってくれルナ。もしかしてお前、聞いてたのか！？」俺の声は届かず、ルナはいつの間にか視界から消えていた。「おいおい冗談だろ、あんな独り言を聞かれてたなんて、それじゃあ……」

俺はルナを追うようにしてマンションへと入っていく。エレベーターは七階に止まっていたので、ルナはエレベーターを使って上がったのだらう。ボタンを押す。エレベーターはそのまま一つずつ降りてやってくる。

独り言。俺が独り言をしていたとするなら、間違いなくさつき　そう、一人で独白していたあの時の事だ　に違いない。まさかルナのやつ起きていたのか。だとするならさつきあの魔法使いと対峙していたときに突然やってきた事にもつじつまが合う。たぶん俺が出ていったから気になったんだらう。だけど、それはあんまりじゃないだらうか。よりもよって、あんな独白の内容を聞かれてしまったとなると　それじゃあ、告白したのと何ら変わらない。やってしまった、と思う。ルナは間違いなく俺に気がないと言うのに、あんなことを聞かれては間違いなく軽蔑されるだけだらう。ヘンタイどころの話ではない。冗談で抱きつくとか、そういう次元の話じゃないのだから。

エレベーターが、止まる。



「絶対嫌われたんだろうな、俺。ま、そうだよな……義理とは言え、妹を好きになるやつがどの国にいるってんだよ」

ふと、気付く。落ち込んでうつ伏せていた顔を見上げてみると、そこには。

「……え」

エレベーターのドアが開いた、その先に。

そこには紛れもなく、ルナがいた。

「なんで、まだ。乗って、るんだよ」

うまく言葉が出せなかった。ただ目の前の光景に、そして二度目の失態に動揺して。聞かれた、確実に。なんてこった、さっき指摘されたばっかだって言うのに。

「驚かそうと思ったただけなんだけど……うん、兄さんはちょっと勘違いしてるみたいね」

ルナが近付いてくる。何故だかわからないけれど、今の俺はどうしようもなく無力で、

「あの、ね」俺の顔を見上げながら、その金髪の少女は歌うように言う。「好きって言われて、その人のことを嫌いになる人なんて、多分いないんじゃない……？」

「え、ルナ……？」

解らない。ルナが何を考えているのか解らない。何を言っているのか、何をしているのか俺には理解できなくて。

「だからね。……わたしは、貴方のこと嫌いじゃないよ」

結局、俺はルナと同じベッドで眠ることになった。別に深い意味はない。ただ単に、リビングじゃ寒いだろうと言うルナの配慮があっただけだし、お互いに頭を逆に向けて寝れば問題ないだろうと言

う提案もあつたからだ。それなりにでかいベッドなのは事実だから、スペースに困ることはないだろう。二人程度なら十二分に眠れるぐらいの広さはある。

「なあ、ルナ」俺は天井を見上げながら、「……嫌いじゃないっていうのは、好きってことになるのか？」

「なるわけないでしょ、ばか」ルナは即答した。「勘違いしないでよね、わたしは別に嫌いじゃないってだけで好きだとは一言も言っていないんだから。言っておくけど、もし次に何かへんなことしたら今度こそ嫌いになるわよ」

「……だろうな。はは、悪い悪い。へんな事聞いちまって、悪かったよ」

しばしの沈黙。明かりも消えているし、このまま眠ってしまったもよかったけれど。何故だか、今の俺はそんな気分になれなかった。少しして、俺が口を開く。

「そーいや、受けるのか。あの魔法使いが言ってた……決闘つてのには」

「受けるわ。うん、受けないといけない。早く終わらせたいって気持ちもあるし、今日みたいにまたこっちにやっこないとも限らないしね。それにしても迂闊すぎよ兄さんは。もしあっちが見境のない魔法使いだったら殺されてたかもしれないのに」

耳が痛い、それは確かに本当のことだった。正直に言つて、あの瞬間まで俺は魔法使いという存在を信じ切っていなかった。だからこそ、ああして警戒もせずはいはいと外へ出て行ってしまった。迂闊、確かにその通り。何の言い訳も弁解もできない。

「まあでも、あの魔法使いさえなんとかすればわたしはこっちに理由もなくなるからね。……もしかしたら、それでお別れかも」

「な、なんだよそれ？　ここに理由つてのは、俺を監視するためじゃないのかよ？」

「そうね、そうだけど」ルナは少し寂しげに、「あの魔法使いを倒したら、わたしは一度本国に帰るつもり」

そんな それはいくらなんでもあんまりだ。せつかくこうして  
出会って、好きになって。その次の日にはもうお別れだって、そん  
なのはあんまりにあんまり過ぎるだろう。

「どうしても……帰るのか？」

「うん、ごめんね。……ほんとなら、もう少しいるつもりだったん  
だけど。予想より遥かに敵の動きが速かった。正直、ここまで積極  
的な相手だとは思ってなかったもの。このままもう会うこともない  
かもって思ってたぐらい。でも、まあ。向こうから出てきたのなら、  
しつかり相手はしなくちゃいけないし」

俺は何も言えない。

「そうだ、この際だから話しておこうかな。あのね、『魔法使いは  
その正体を知られてはならない』ってのね、嘘なの」

「はあ？ 何言ってるんだよ、意味がわからないぞ」

「うん。白状しちゃうとね。最初からわたしは貴方の妹になるつも  
りだった。一時的にね。わかる？ わたし、貴方を『利用』しよう  
としたんだよ」

おいおい、ちょっと待て。何だ。ルナは何を言ってる？

「たまたまそこにいたのが貴方だった。本当はしたくなかったけれ  
ど、するしかなかった。……わたし、あの魔法使いに負けそうだっ  
たの」

「なんだって……？」

「だから、逃げる必要があった。なんとしても、ここで負けるわけ  
にはいかなかったから。そのために、ただ単にそこにいた貴方を利  
用しただけにすぎない」

限界だった。俺は布団を跳ね飛ばすと、身体を起こしてルナの腕  
を引っ張った。

「ちょ、ちよつと！ 何するのよ、痛いってば！」

「どういうことだよ、ちゃんと全部話せ」

「うん。わかったから、話すから。手、離してよ。痛い」

「あ……、悪い」

「……あの魔法使いと戦ってたってことは、わかるわよね？ その結果、わたしは負けそうになった。相手の力量を測り間違えたのか、想像より遥かに相手の実力が高かったのよ。だからとにかく逃げたわ。なんとかして負けないように。逃げるって手段は負けと認められないからね。そして、わたしは貴方をそのときに巻き込んだ」

巻き込んだ。それは、確かにルナが言っていた言葉。「貴方がわたし達の戦いを見ていたっていうのは本当。その場にいた貴方をわたし巻き込んだのも本当。だから別に嘘はついてないの、その点に関して言えばね。相手からしてみれば、わたしが連れて逃げたのは一般人。無為に危害を加えることをためらったのね。それ以上追跡はしてこなかった。本当なら貴方の役割はそこまで、それで終わるはずだったんだけど、ふと考えたの。このままわたしの『言葉の魔法』<sup>マジック</sup>を使って、貴方にわたしが前からいる家族だと認識させることができれば、うまくすれば隠れ蓑を作れる、ってね。よくあるパターンよ。一般人を洗脳してその家庭にイレギュラーとして短期間の間あくまで自然に割り込む。そうすることで宿や隠れ場所を確保する。……それだけのためだった。貴方の妹になるなんて理由は、本当にそれだけだった」

「じゃあ、何だよ」俺は少しぶっきらぼうな口調で、「俺を巻き込んで後悔してるって、悩んで苦悩して選んだんだって、仕方がなかったんだっていうあの言葉は全部嘘だったっていうのかよ？」

学校から帰宅してきたあの時、確かにルナはそう言っていた。あれは全部嘘だったって、そう言うのか。

「……信じてもらえないかもしれないけど、あれは全部本当。わたしは後悔したわ。こうして貴方を巻き込んでしまったことを。ただここを隠れ場所にするためだけに、貴方の事情も知らずに勝手に家族ごっこをした。ほんと、自分でも情けないし馬鹿げたことをしたって反省してる。それは嘘偽りなく真実。信じてくれないとは思うけど」

そうか。だからあの時、ルナは異様に反応していたのだろう。自

分の目的のためだけに俺を利用した、そのことに関してずっと罪の意識を背負ってきながら、あの話を聞いてきつとそれが背負いきれなくなった。

「……信じるよ。俺は、信じる」

俺はルナを信じたい。こうして話してくれているのだから、それにはきつと偽りはないと思うから。

「うん、ありがと。……最初はね、本当に利用するつもりだけだった。でも『言葉の魔法』<sup>ワードオブマジック</sup>が効いていないって解った瞬間、戸惑いもしたけど、同時に安堵もしたの。これならきつとやり直せる、つてだから本当はその場で全て打ち明けるつもりだった。……でも誤算が起きた。貴方が昨日のことを何一つ覚えていなかったのよ。それを知って、わたしはまだいけると思ってた。なんとか少しだけでもここにいようと思ってた。だから、あまり昨日のことについて触れたりしなかった。そして同時に、昨日のことを思い出せば、この関係はすぐに壊れる。そう、それを解っていたからこそ、わたしはそうすることに決めたの」

なんらかのショックで一時的に消えてしまった俺の昨日の記憶。それが戻れば、確かに俺は理解できる。ルナが何者で、俺がどういった扱いをされているのか。そうだ。もし俺がそれをその場で思い出していれば、確実にルナを放り出していただろう。ルナとここまで接しあうことはなかった。失われた記憶が作り出した、なんとも矛盾な関係。それが、俺とルナの関係だったって言うのか。

「確かに、俺の記憶がそのときにあったなら今と違う未来になつてたかも知れない。でも今は違うだろ。俺はこうしてルナと共にいる妹だつてことを認めている。一緒にいたいと今でも思ってる。こうやって真実を知った上でも俺の気持ちに変わりはないんだよ」

「でも」ルナはそんな俺の言葉を遮るように、「わたしのやったことは結局おんなじなのよ。貴方を利用して、貴方を騙して。そんなやつと、これ以上一緒になんていられる？」

「いられるだろ」即答してやった。「だって、俺はルナの事が好き

なんだから」

少しの間。ルナは俺の顔を見つめると、目を丸くして頬を赤く染めていた。ここしかない、俺は言葉を続ける。

「ルナの事情はわかった。確かにルナのやったことは少し間違っていたのかもしれない。でも仕方ないだろ。誰だって生きたい、逃げ延びたいと思うのは普通のことだ。俺だってそうするさ、たぶん間違いないな。だから別に気にすることはないんだよ。襲われて戦って、それで逃げるために、ルナが助かるために俺が役に立つたって言うんなら、今の俺にとってそれは本望だ」

「……本当に、どうして貴方はそんなことを平然と言えるのよ。おかしいわよ、そんなの。自分が利用されたって、嘘つかれて騙されていたって知って、それでもわたしといることを選ぶなんて、普通じゃないわ。ばかよ、大ばかじゃないの」

「そうだな。ばかだ、俺は大ばかだろうよ。でも、ルナだってばかだ」

そう言っ、俺はルナの手を握った。何気なく、さり気なく。ただ、そうすることが自然だというように。ルナは特に何かいうわけでもなく、その手を握り返してくる。

「……そうね。そういえばわたし達、二人揃ってばかなんだった」  
そう言って微笑み、ルナはそのまま身体を預けてきた。

「つちよ、ルナ……？」

「もう寝る……話したら一気に力が抜けちゃった……おやすみ……」  
とか言いながら、数秒で眠りの世界へと突入してしまわれた。なんつースピードだ。もしかして今まで相当眠いのを我慢していたんだろうか。

「……ああ、おやすみ。ルナ」

そつとルナの髪を撫でる。そうしているうちに、いつの間にか襲い掛かってきていた睡魔に負け、俺もルナと共に眠りの淵へと落ちていくのだった。

## 第一章 / 月下の魔法使い 下

平日の最後である金曜日。いつもなら一番だらけている曜日だと言うのに、やはりというか俺は早起きすることになる。ううむ、二日連続はさすがに新記録だ。快拳である。一日でも早起きする事さえ有り得ないっていうのに、だ。

「起きなさいよ、ほら。朝食できてるわよ!」

それもこの少女、ルナのおかげであるわけだけど。本名をルナミス・サントリア（だっけ?）と言う、外国人で魔法使いで俺より三つ年下で、現在は月城ルナと名乗る俺の義理の妹。そしてなにより、俺が何の間違いか惚れてしまった少女。早朝だと言うのに乱れずらないその長い金髪を靡かせながら、ルナはおたまを握って部屋の扉の前に立っていた。

……、おたま?

「お、おいまさか……ッ!」がばっ、と眠気を覚ました俺はベッドから飛び上がり、「ルナ、お前まさか料理を」

「だから。もうできてるって言ってるんだけど?」

なんてこった。まさかとは思うが、ルナが自ら料理を作ってしまったと言うのだろうか。俺は絶望を浮かべたような表情を作りつつ、リビングに目を向けた。

「……あのね、もしかして昨日のことを思い出してるんじゃないかとは思うけど」ルナは少し呆れたように、「わたしが同じ失敗を二度も繰り返すと思ってるの? ちゃんと味見もしたし、今日は特別難しい料理でもなし、完璧なんだから」

「む、そうか……安心した」

ふむ、次は失敗しない とは言っていたが、やはりそこはプライドの高そうなルナのことだ、同じ失敗は繰り返さない主義らしかった。いやはや、実にいい傾向だとは思う。

「で、メニューは?」

「カレーよ。比較的簡単だって聞いたから。ほら、すごくおいしそうじゃない」

「……、朝っぱらからカレーなんて、作り置きでもしない限り有り得ないなんてのは、まあ解らないんだろうな」

「はあ、そうなの？ まあいいじゃない。なによ、不満でもあるわけ？」

いや、ルナが作ってくれた料理を無碍にするわけにもいくまい。というかメニューはともかくその行為はとても嬉しいってことに変わりはないわけだし。日本男子たるもの、好きな女の子が作ってくれた料理が嬉しくないわけないだろ、うん。そんなわけで、俺の今日の朝食　っーか多分晩飯もカレーと言う事になりましたとさ。

いつものように登校し、教室へと参上。やはりというかなんというか、周りの目はおかしなものを見るような、未確認飛行物体から突如現れたエイリアンでも見るかのような、そんな視線を浴びる。うむ、悪くない悪くない。こうやって他人の度肝を抜いてやるっーのはわりと楽しい気分になれるからな。だがしかし、そんな視線は俺が早く来たことによるものではなかった　いや、少しはそれも含まれていたのだろうけれど　俺の隣にいる少女に皆は現実を疑うような眼差しを向けていた。ああそうかそういうことね。

「……月城」寄ってきたのは防人だった。「率直に言おう。羨まし過ぎる、代われ」

「うるさい黙れ却下」

「ちくしょお！　なんでお前はそんなおいしい役回りにいるんだよ。少しでもいいから俺にも分けてくれえ！」

毎度のことながら、コイツの戯言には付き合ってられん。俺は適当に無視して、ルナと共に自分の席へと向かっていった。俺が通るたび、っーかルナが通るたびに男子生徒の視線が気持ち悪いぐらい



に突き刺さる。ああもう、なんだよお前ら。そんなに女に飢えてやるのかよ。

「ふふ、わたしってばモテモテよねー」

突然、ルナがそう小声で俺に呟いて来た。おい聞いたかクラスの男子生徒諸君、こいつはこんなことを言ってるぞ。いつも見ているこいつの姿は九割がた猫を被っているんだ。騙されるな、真実をその目に焼き付ける。

「月城くん、おはよう」ふと声が聞こえた。沢宮さんである。「二人とも仲がいいんだね、羨ましいなあ。瑠奈さんのおかげで月城くんはこれから遅刻もなくなるし、良い事だよな」

「おはよ、沢宮さん。まあこいつのおかげで朝は苦労しなさそうだけどさ、聞いてくれよ。今日の朝食、なんだったと思う？」

「へっ、朝食？ なになに？」

「うん。それがさ、カレーだったんだよ。カレーだぜ？ しかも昨日の晩の作り置きとかじゃなくて、朝食がだ。どうだ笑えるだろ？」

「む」その言葉に反応したのはルナだった。「そんなの知らなかったんだからしょうがないじゃな。ご、ごほん。わ、わたくしはついこの間まで海外で暮らしていたのです、そのようなことは知らなかったのですわ。だと言うのに、せっかく一生懸命愛を込めて作ったと言うのに、お兄様ひどい……（ニヤリ）」

ざわ！ と、ルナのその発言に教室が一気にざわめいた。おいおい待てよ気付けよお前ら、今のはどうみてもおかしいだろ、口調とかその辺が。つーかニヤリってなんだよ。影で笑うなこの確信犯め。

「っ、月城くん。それはちょっとひどいよ……」

沢宮さんまで俺に不審の目を向け出した。ああくそ、ちょっとルナをからかうつもりでやっただけの事でどうしてこうなっちゃうんだよちくしょう。

「月城、お前ちょっと放課後裏庭な」とは、クラスの男子生徒全員からのお達しだった。ちらりと隣の席に座っているルナを見ている

と、必死に笑いをこらえていた。くそ、負けた。今回は少し、いや完璧に分が悪かった。ああ、認める。認めてやるから、とりあえず助けてくれ。

時間つてのは早く過ぎると感じる時もあれば、遅く過ぎると感じることもあり、それはその人の気の持ちようで変化する。そういった経験、ないだろうか。例えば、学校でどうでもいい授業を受けているとき。つまらない暇の続くバイトをしているとき。そういつた時、時間つてのはものすごく遅く感じてしまう。五分がすごく長く感じるのである。逆に、朝起きるときあと五分、とか言うけれど。その五分はかなり短く感じないだろうか。その他でもそうだ。

例えばゲームをしているとき。漫画や小説を読んでいるとき。時間つてのは、いつの間にか過ぎ去ってしまっている。早く過ぎていくそう感じてしまわないだろうか。俺は思う。ようするに嫌いなことをしているとき、時間つてのは遅く感じる。逆に好きなことをしているときつてのは時間が早く感じてしまうものだ。それが何故なのか、俺は考える。それは多分、そのことに対する集中力のレベルなんだと思う。嫌いなことだとしても集中できないし、好きなことならどれだけでも集中できる。人間はなにかに集中しているとき、時間さえも無視してその物事に熱中できる存在なのではないか、というお話だ。

「……うむ、我ながら暇潰しとはいえわけが解らん」

ようするに、つまるところ俺は今暇なのである。どうでもいい授業を受けていて、果てしなく時間を持て余している。何かに熱中して時間を潰したいところだったのだが、慣れないことはするもんじやない。ま、この授業さえ終われば次は放課後。ようやく一日の授業時間が終了、開放されるってわけだ。明日と明後日は休みだし。ふと隣のルナを見る。はたから見れば真面目そうに授業を受けてい

るように見えるが、実際はどうなのかわからん。正直こいつは俺より三つも下なんだし、授業内容が理解できているのかも怪しい。いやまあ、魔法使い様ともなれば、普通の一般人とは比べ物にならないくらい頭が良くていらつしやるのかもしれないが。

「……ま、どうでもいいか」

小声で独り呟く。

「何？　なんか言った？」

聞こえていたのか、隣のルナが聞いてきた。こいつ耳いいよな。そういやあのとときの俺の独白だつてよく聞こえたもんだ。俺は「別になんでもねえよ」とだけ言つて、残りの数十分、暇を潰すために何をしようかと考えるのであった。

本当に突然で、唐突で、いきなりだった。放課後、帰宅準備をしていた途中、それは起こった。ちりん、と言う鈴の音色がどこからともなく聴こえてきたのである。……あいつだ、間違いない。俺は直感で判断する。昨日の夜中に聴いたあの音色。その後現れたあの黒フードの魔法使い、ルナの『敵』である少女。

「ルナ、今なんか聴こえなかったか？」

「はあ？　別に、何も聴こえなかったけど。誰かが呼んだとか？」

ルナには聴こえていない、ということはこれは俺にしか聴こえない音なのだろう。どういうことだ。まさか、昨日の夜のように俺を呼んでいると言うのか。だが、何故ルナではなく俺を呼ぶ必要がある？　昨日も何か言いかけていた。俺に何かあるつてのか。解らない。解らないが、だからこそ確かめなければ。

「悪い、ルナ。ちよつとトイレ行ってくる。腹の調子悪くてさ。すぐ戻るから、お前はここで待っていてくれよ。遅かったら先に帰ってくれてもいいし」

「え？　ちよつと、待」

それだけ言い残して、俺は教室から駆け出した。どこにいるかなんて解るものか。ただ勘を頼りに探し回るしかない。どこだ、どこなら一番都合が良い？

「……あ。裏庭」

そうだ。この学校の裏庭はとてでもないがあまり人が寄り付かない。たまに隠れて遊んだり喧嘩したりで使うことはあっても、基本的にはそこに誰もいない。そこなら誰にも見つかることなく話せる。完全にただの直感だった。だが、そんな予想による不安なんて消し飛ぶくらい、何故か確信のようなものもある。それが何故かはわからないが、俺は、そこに行くべきな気がして。裏庭はそう遠くない。階段を駆け下りて、一気に目的地を目指す。

走る。

駆ける。

そして、そこには 見間違うこともない、あの少女が立っていた。

「は……は。見つけた、ぞ」

この程度で息切れするなんて、少し運動不足なのだろうか。はあはあと息を切らせながら、俺は目の前に立つ黒髪の少女に向かって、言う。

「一体何の用だ。俺だけに聴こえるあの鈴の音は何なんだよ？俺に話があるんじゃないのか、おい」

「……」少女は少し悲しそうな顔をして、「お願い、あの人から早く離れて」

意味が解らなかった。あの人、ってのはつまりルナの事か？

「何でだよ。お前の目的は何なんだ？ルナを倒して、魔法使いとしての地位だのなんだのを上げたいってんじゃないのかよ」

「そうじゃない……ただ私は貴方の身を案じて言っている。貴方は、早くあの人から離れるべき。今は、理解できないかもしれないけれど。記憶のない、貴方には」

記憶　まさか、俺の記憶は。

「……お前、まさか俺の記憶を消したのはお前なのか？」

こくり、と無言で頷く黒の少女。

「本当は、このまま無関係でいて貰いたかった。あのまま眠って記憶を無くして、それで終わって貰うはずだった。でも、それは叶わなかった。あの人が、貴方に目をつけてしまったから」

「ルナが俺をどういう風にしたのかは知ってる。本人から聞いたか。ただ今、俺は俺の意思でこうしてる。ルナの魔法にだって掛かってない、これは自分の意思なんだよ！」

「……そうかもしれない。でも、だからこそ。だからこそ私は、貴方にあの人とこれ以上関わりあつて欲しくない。そうすることが、きつと一番の道だと思うから」

「何言ってるんだよ。わけわからねえ。そんな事言われて、俺がはいそうですかって頷くわけないだろ！」

俺がそう言くと、何故かその黒き少女はびくんと身体を震わせた。

「……私は、貴方のそんなところが好きだった。でも、もう手遅れだと言うのなら。私はせめて、あの人を倒して貴方を救う。だから……お願い」その少女は、本当に意味の解らない事を呟いて。背中を向けて、ここから去るように。最後の言葉を、告げる。「全てを思い出しても、これ以上私達に関わらないで。お願い、昴」

いなくなった。本当に、一瞬に。まるで本当は初めからそこになんていなかったかのように、黒の少女は俺の目の前から姿を消してしまった。

「……なんで、俺の名前。知ってるんだよ」

理解できない焦燥感に苛まれながら、俺はしばらくそこを動く事ができなかった。あの黒フードの少女が言っていた言葉が、何故かまだ胸に突き刺さるように残っている。俺の失われた記憶。それを思い出せば、この不安感も全て解消することができるのだろうか。

「……あ、まずい」

そこで俺はようやく思い出した。教室に残したルナのことを。あれからもう大分経っている。待たせてしまっているのは悪い、早く

戻らなければ。

そうして、教室には誰もいなかった。

「あれ、ルナのやつ先に帰っちゃったのか。むう、結構冷たいところもあるんだなあ」

独りごちながら、誰もいなくなったクラスの教室を歩いて、自分の机の上においてある鞆を手にとった。

「……ま、一人で帰るのなんていつものことだし。何寂しがってんだよ、俺は」

我ながら少し女々しいな、と感じつつ、俺は鞆片手に教室を出ようとして、

「あれっ、月城くん？」

沢宮花凜と鉢合わせた。

その手には鞆が握られていて、どうやら彼女も今から帰宅ってところらしい。

「うつす。沢宮さん遅いね、委員会の帰り？」

「うん、まあそんなところ」沢宮さんは辺りを気にしながら、「それより月城くんこそどうしたの？　こんな遅くに。瑠奈さん、先に帰っちゃったみたいだけど」

さすがに敵の魔法使いとお話してましたーっ！　なんてぶっちゃけるわけにもいくまい。つーか沢宮さんの場合疑うどころか全力で信じられそうで逆にまずい。俺は適当に言い訳を考えながら、

「ああ、裏庭でさ。クラスの男子どもに今朝の呼び出しでそりゃもうボコボコにされた」

「うふふ。もう、冗談ばかり。あ、でもそっか。じゃあやっぱり裏庭にいたのって、月城くんだったんだね」

……、え？

「なんだか一人ではーっと立ってたから、何してるのかなーと思っ

て。でも後姿だったし、誰だかよくわからなかったから声掛けられなかったんだよ」危ない危ない、どうやらあの少女と会っていたところは見られてな　「でも、なんだか一人で喋っててつきり誰かいると思ったんだけど。あれなに？　お芝居の稽古でもしてたの？」

「……え？　なあ沢宮さん、それいつから見えたんだ？」

「えっ。あ、うーん。裏庭に走っていくところからだから、多分最初のほうはほとんどだと思う。あ、ごめん、見られなくなかった……？」

「おいおい、どういうことだ。あの場には確かにあいつがいた。それが、沢宮さんには見えてなかったって言うのか。……いや、待てよ。あの少女が魔法使いなら。あの鈴の音色が俺にしか聞こえなかったのだとするなら、その姿を見えなくする事ぐらいできるんじゃないだろうか。そう、もしかするとそれがあの少女の『魔法』なのかもしれない。ならば、それはそれで好都合だ。沢宮さんに見られていないのであれば、それは良かったんだから。」

「どうしたの、月城くん。もしかして、怒っちゃった……？」

「あ、いや違う違う。うん、ちょっと独り言の練習してたんだよ。あまりに思いつきな行動だったから見られてたって思うと恥ずかしくてさ。それだけだよ」

俺がそう言うと、沢宮さんは心底安堵したかのように胸の上を手でさすった。

「よかったあ、これからは気をつけるね。……あ、そうだ。ちょっと聞きたかったことがあるんだけど、聞いてもいいかな？」

「ん？　何？」

「あのね、月城くんって朝雛さんのこと、好きなのかなあって」

「……、あのさ。どうして紅憐の名前が出てくるわけ？」

「えっ、あ、だって。その……いつも、仲良さそうだし。違うクラスなのによくお話してたりするから。だからどうしてかなって」

ああ、そういうことか。そういえば、俺と紅憐がどういった関係

なのか沢宮さんは知らない。誤解するのも無理はないか。しかし、今更あいつと俺がそういう風に見られてるってのは、誤解であれちよっときついものがあるけど。

「違うよ、あいつはただの幼馴染。言ってなかったけどさ、小学校からの腐れ縁なんだよ」

「え？ そうだったの？ てっきり……なんだ、そっか……。じゃあ、瑠奈さんと同じようなものだよね？」

「え、あ」

ルナと同じような関係、か。確かに設定上はそうかもしれない。生き別れ再会した妹、昔ながらの幼馴染。どちらも言ってしまうばかりになるとかそういう恋愛対象には不向きだとは思う。だけど、沢宮さんは知らない。俺とルナの本当の関係を。一言では言い表せない、複雑な事情が織り交ざった俺達のことを。

「あの……ね」突然、沢宮さんが俯きながら呟き始めた。「私その、実は……あの。月城くんの、ことが」

「え……、沢宮さん？」

「私、ずっと前から……月城くんのことが好きです」

突然に唐突に突如にいきなりだしぬけな、愛の告白だった。沢宮さんはあの後、俺の言葉を待たずとしてその場から逃げ去るようにいなくなってしまった。後を追ってみるも姿は見えず、結局何も言う事が出来なかった。仕方がない。次に会うときまでに返事を考えておくか。本当、まさかあの沢宮さんが俺を好きだったなんて予想外にもほどがある。なんでもっと早く言ってくれなかったんだろう。少しばかりか、かなり感動してしまった。

「今まで誰かに好きだなんて言われた事なかったからなあ、俺」

独り呟きながら、俺はとぼとぼと学校の校舎から外へと出る。そうして、ふと思ひ出す。



『……私は。私は、貴方のそんなところが好きだった』

そうだ、そういやあの黒フードの魔法使いもそんなことを言っていたような気がする。だが好かれるようなことを何かした覚えはないし、ただの聞き間違いかも知れないが

「覚えてない、ね……」

今の俺は一部の記憶を失っている。覚えているのは、一昨日。こんな風に一人学校の校舎から外へと出て、いつも通りに帰路に着いて。そこまでだ。ああ、その先が何も思い出せない。きっと、そこから俺は何か記憶を消されなければならないような事態に遭遇したんだろう。それがなんだったのか。思い出そうとするけれど、やはり無理だった。

「くそつ。情けないな俺も……ただ思い出せばいいだけだったのに。思い出せば全部理解できるって夜鈴<sup>よすず</sup>が言ってたんだ、何で」

……、なんだって？

「……夜鈴、そうだ。あの黒フードの名前。守崎夜鈴<sup>もりさきよすず</sup>……！」

そう、確かそんな名前だったはず。おかしい、どうして俺は知っている。いつ知った。あの黒フードの少女の名前を。いつ、どこで？

ちりん。

また、あの音が聞こえた。

「……、おいおい」俺は右手で顔を覆うように、「そうか、そういう事かよ。……くっそ、あいつ。やってくれたもんだぜ、まったくさ……！」

そう、これが合図。黒フードの魔法使い、黒髪の少女、守崎夜鈴。彼女が仕掛けた鈴の音。その『最後』の鈴の音を、俺は今聴いた。そして、

「思い出したよ、ちくしょう。全て、何もかも……綺麗さっぱり」

俺はいつも通りの帰り道を、いつも通り一人で帰っていた。昨日のように誰かと一緒に帰るなんて事は無い。紅憐は校庭で部活動に勤しんでいたし、最近出来た妹今日は先に帰宅してしまっている。寂しさは無い。別にいつも一人で歩いてきた道だ。慣れている。慣れているのに、何かが物足りない気がしてくるのは俺の心が病んでしまったのか、それとも。とぼとぼと歩きながら、ふと左のほうへと視線を向けた。そこには一つの公園がある。西条公園と言う名前です、実はあまり行った事がない。つい最近、とある事情で立ち寄ることがあったぐらいで。視線を前に戻し、俺はそのまま遠くに見える自宅のマンションを目指す。だけど、そこに彼女がいる。それだけで俺は何故か気兼ねしてしまう。何故か、なんて言うのはおかしい表現かもしれないけれど。だって、俺はもうその理由を理解できているのだから。歩いている途中で、ふと人影が見えたことに気が付く。そこには、いないはずの人間がいた。

「……紅憐？」

確か彼女は校庭で部活をしていたと思うんだが。陸上部のエースでもある朝雛紅憐は、何故かそこに立ち尽くしていた。まるで、この俺を待っていたかのように。

（……考えすぎだろうけど。何してるんだよ、あいつ）

俺の姿に気がついたのか、紅憐はとたととこちらへ向かって歩いて。いや、段々とスピードを上げて、次第に走り出した。なんだ、やはり俺を待っていたのだろうか。

「おっす、紅憐。何してんだこんなところで。お前、部活は？」

そんなことはどうでもいいと言わんばかりの顔で、紅憐は息を切らせながら、

「……昴、アンタ思い出した？」

なんだって？ 思い出した、とはどう言うことだろう。俺が今まで記憶を失っていたことを、まさかこいつは知っていたのだろうか。

……いや、それは有り得ない。一度だってそんなことを話したことはないし、ルナと俺はいつも一緒だったから、ルナがこいつに話したという線も薄い。さらに言っと、あの守崎夜鈴が紅憐とコンタクトを取ったとも思えない。つまり俺が記憶を失っていたことは紅憐は知らない。そう、知らないはずだ。

「どう言っことだよ？ 俺が何を思い出すって？」

「瑠奈のこと。今までひっかかってたんだけど、ようやく思い出したわ」

ルナ まさか、あいつの魔法が解けたのか。本当はそんな奴はいなかった、と言っ事を思い出したとでも言っのだろうか。有り得る話ではある。だが、紅憐は俺のそんな予想を裏切るかのように、「あの子、昔一緒に遊んでたあの女の子よね？ 確か守崎って子。あんたによくお兄ちゃんお兄ちゃんとか言って懐いてた」

「……は？ お前、何の話をしてるんだよ？」

「だから。昔……うん、ちょうど八年前だよ。あたし達が一緒によく遊んでたのが瑠奈でしょ？」

おいおい、まさか実は魔法が解けたのではなく『効き過ぎていた』ってオチなのだろうか。だが、守崎 俺の知っている、思い出した記憶の中にいるあの少女も、苗字を守崎と言っはずだった。

「おい。本当にその子は瑠奈って名前だったのか？」

「はあ？ いや……だって、そんなの覚えてないわよさすがに。守崎って苗字だけは覚えてるんだけど。でも、さすがにアンタに妹がいたなんて考えられないし、それこそ記憶にないから。だからそんなじゃないのかって、アンタに確認したかったのよ」

おいおい、それじゃあまさか。

「……紅憐。悪い、その答えはまた今度だ」

「へ？ あ、ちよつと昂！ 何処に行くのよ！」

俺はその場から紅憐を置いて駆け出した。

一昨日前のことになる。俺こと月城昂は、学業を終えて帰宅途中の真っ最中だった。いつものごとく帰りにコンビニでも寄って雑誌の新刊立ち読みして、適当に食うもん買って家でくつろぐか、なんて他愛のない事を考えながら。そんなとき、彼女と出会った。

「……なんだ、あの子。今にも倒れそうに　　って、おいおい！」

目の前を一人の黒髪の少女がふらふらとした足つきで歩いていて、よく見れば、大分顔色が悪い。そのまま壁に手をつけて、もう限界だと言わんばかりの表情でその少女は今まさに倒れようとしていたのである。俺は咄嗟に駆け出して、その少女を抱きとめた。危ない、あのまま倒れていたらどこかを打ってしまっていただろう。打ち所が悪ければ人間簡単に死んじゃまうらしいし、何にせよ無事でよかった……なんて安堵していると、

「……貴方、誰？」

俺の腕の中で倒れている少女が、最後の力を振り絞ったのではないかと思えるぐらいの小さな擦れ声でそう言った。

「ただの通りすがりだよ、それよりお前どうしたんだ。こんなところで、今にも死にそうな顔して。家はどこだよ？　いや、この際病院だな。連れて行ってやるから。心配すんな、安心しろ」

「駄目。いいから、ほっつておいて。貴方を巻き込むわけにはいかない」

「そんな事言ってもな、今にも倒れそうな女の子をここで見捨てるような真似できるわけないだろうが。いいから俺に任せろよ。巻き込むだとか、そんな無駄なこと考えてんじゃねーって」

俺は半ば無理やりに、その少女を背負うようにして抱え上げた。少し悪いことをしているような気もするが、そんなことはないのだから多分問題はないだろう。はたから見ればどう取られてしまってもおかしくないけれど。

「……病院は」少女が呟いた。「病院は、駄目。長時間の滞在は周囲の人を巻き込んでしまう。どこか、あまり人目につかないところ

でいい。少しだけ休めば、回復するから……」

何を気にしているのかは解らないが、そう言うのであれば俺は無理に強制するわけにもいかない。どこか近くの公園で休ませてやる。確か近くに西条公園つてのがあったはずだ。そこに行くとしてよう。

俺は自宅のマンションへと帰宅していた。置いてきた紅憐には今度会ったときに謝っておこう。後が怖いが仕方がない。今はそれどころではないからだ。一刻も早く、ルナに会って話を聞かないといけない。エレベーターは十二階に止まっていた。さすがに待っている時間が惜しい。俺は舌打ちをしてから階段を駆け上がることにした。二階、三階　と、俺はスピードを落とす事無く階段を昇っていく。そうして自分の部屋の扉の前まで辿りつくと、そのまま力ギを使って中へと入った。ルナがいることもあり、出かけるときは力ギを閉めないで出ていた。そのことから、中に彼女がいることは明白で。そこには笑顔で俺を迎え出る、ルナの姿があった。

「おかえり兄さん、遅かったわね。先に帰って悪いと思ったから夕飯作っておいたわよ、今回は自信作なんだから！」

先に帰った本当の理由はそれか……と思いつつ、俺は玄関で靴を脱いでリビングへと向かう。

「なあ、ルナ」

「何よ。大丈夫、さすがにもう失敗はしないわよ？」

「違うって。あのさ」

俺は、少しためらう。このまま言ってしまった方がいいのだろうか。そうすることで、俺達はどうなってしまうのだろうか。本当に、これでいいのだろうか、と。だが、そうしなければ先に進むことはできない。だからこそ、俺は口を開く決意をする。

「俺、思い出したんだよ。何もかも。だから」

俺が言った瞬間、ルナは呆然と俺の顔を見つめていた。当たり前か。確かにこうなってしまったら、ルナはもう。

「……そ。思い出したのね。あーあ、これでもう終わりかあ」ルナは先程までとは一変した態度でそう呟いて、「じゃあ、わたしと貴方の関係はこれまでね。……さようなら、短い間だけの兄さん」

だつ、と駆け出すようにルナは部屋から出て行ってしまった。俺はただ立ち尽くし、何もいえないままそこで目を伏せていた。聞きたいことも、何も聞けなかった。聞けるわけがなかった。彼女にとって、俺は記憶が戻った瞬間からただの他人なのだから。でも。

最後に一瞬だけ見たルナの顔が凄く悲しそうだと思ったのは、俺の見間違いだっただのだろうか。

西条公園のベンチで、道端で助けた少女をしばらく休ませていた。俺も俺でこのままはいさようならなんて言うわけにもいかないし、とりあえず隣で一緒に座って他愛もない話でもしよう。なんて思っていたのだが、

（ぬあー、こいつなんも喋らねえ……）

約三十分程度だろうか、こうして沈黙を続けながらこうして座り呆けている俺と隣の少女。一応、名前だけは聞き出すことに成功した。守崎。そう、守崎夜鈴と言ったか。俺も名乗り返さないわけにはいかないので適当に自分の名前を告げたのだが、それ以降ずっと会話がない。休んでいるところにどうでもいいような話をするのも悪いと思って何も言えないでいるのだが、これはさすがに気まずいというか、なんというか。

（さすがにこれ以上はきつい、きついぞ俺。何か話題を振らねば）  
気になる事。は、ない事もない。と言うかぶっちゃけるとありまくるのだが、聞いていいものかどうか解らない。例えば、どうし

てあんなところで倒れかけていたのか。どうして病院は駄目なのか。  
どうして、そんな絵本に出てくる魔法使いみたいな格好をしているのか、とか。

「あのさ……お前、どうしてあんなところで倒れかけてたんだよ？」  
今更な疑問。だが、これだけは聞いておかなくてはならなかった。  
しばらくの沈黙の後、少女は静かに口を開く。

「……これ」と。

一言呟いて、俺に鈴を手渡してきた。

「へ？ 何これ、鈴……？」

「貴方は本来私と関わるべきではなかったから。私と出会った時から明日までの間のことを、何もかも忘れて欲しい」

「忘れ……って、誰にも話すなってことか？ どうして」

「違う。そのままの意味で。忘れる」

意味がわからなかった。忘れるって、記憶喪失にでもなるんだろうか。それとこの鈴にどんな関係があるのか解らん。

「なんだかよく解らないけど……、俺の問いにも答えてくれよ。どうしてあそこで倒れそうになってたんだ」

「……敵と、戦っていた」 敵？ その格好と何か関係があるのだろうか などと俺が考えていると、「なんとか退けたけれど。」

不意打ち気味だったから、手傷を負わされた」

「傷って、おい……どこか怪我してるのか？」

「大丈夫。まだ浅いから。もう大分良くなってきた」

「良くないだろ、傷があるならちゃんと診て」

「私は。魔法使いだから、大丈夫」

なんだって？

「……おいおい、冗談はやめろよ。そんな演劇の格好みたいなものしてるからって」

「……」

そこで黙るなよ。

「まあ、なんだ」ここは話を合わせてやろうと踏んで、「その魔法

使用さんは敵と闘ってなんとか勝ったけど負傷しちゃって、それであんな場所フラフラと今にも倒れそうになってたってわけか？」

「……」こくり、と少女は頷く。

おいおい、マジかよ。もしかすると、俺は扱いに困っちゃまうような電波妄想少女とお関わりになってしまったのでしょうか。

「昴」ふと、守崎夜鈴が俺の名を呼んだ。「貴方は、どうして私を助けたの？」

「どうして、って……。んなもん、目の前で今にも倒れそうにしてる女の子がいたら、助けないほうがおかしいだろ？」

「……それは。女の子だったから、助けたって意味？」

意味深な質問だった。俺は想像してみる。例えば

「そうだな。目の前でイカつい兄ちゃんが倒れそうだったとしたら、助けねえかも」

それぐらいのヤツなら俺が助けなくてもなんとかするだろ、自分で適當にな。

「……」くす、と。

何だこいつ、今笑わなかったか？ ……なるほど、まったくの無表情キヤラってわけでもないらしい。

「なあ、守崎……だっけ？ お前」

「夜鈴でいい」少女は淡々とした口調で、「……そのほうが、嬉しい」

今度は顔を俯けながら、まるで照れ隠しのようにそう言った。やはり、今不覚にもちよつと可愛いと思ってしまった。別にそんなつもりで助けたわけじゃねえってのに。

「じゃあ、夜鈴。仮にお前が魔法使いだったとしよう。正直に言えば、俺はただのそこら辺にいる高校生風情なわけで、そんな唐突に突然いきなりそんな大胆な素性の告白をされても理解し難いわけだからまあ、一步譲って魔法使いなんだと言うことにしておくとして。……その『敵』っつーのも、魔法使いなのか？」

「……」こくり、夜鈴は無言で頷いた。



「じゃあ次な。魔法使いってのは、俺でも知ってるような絵本とか小説の物語に出てくるような、あの魔法使いそのまんまって見識でオッケー？」

「……それは、ちょっと違う」

「違う？　じゃあ、具体的に夜鈴の言う『魔法使い』ってのはなんなんだよ」

「魔法使いにも様々な種類が存在する。そう、昴が思い描いているような魔法使いももちろんこの世のどこかに存在していると思う。けれど、少なくとも私はそういった魔法使いとはまた別の種類に位置する存在。例えるなら、『動物』というくくりの中には犬とか猫とか色んな種類がいるけれど、あれと同じ。つまり『動物』というくくりが『魔法使い』というくくりで、そのくくりの中には様々な種類の存在がいるっていうこと。昴の知ってる魔法使いが犬なんだったとしたら、私は猫」

「なんだかすごく飛躍した例えだったけど、言いたいことは大体理解できた。だが、それでも、やっぱり俺は簡単にそれを信じることは出来ない。」

「大体解ったけどさ。魔法使い同士で戦うってのは、それなりに危険なんじゃねえのか。傷だって負ったんだろ。そんな危ないことして、もし万が一のことが起きたら」

「万が一　それは、どちらかが死ぬ、ってこと？」

「……ああ」

「そう。それが、多分。……敵の魔法使いの目的なんだと思う」  
「どう言う事だ。まさか、本当にこの少女とその敵の魔法使いってのは『殺し合い』をしてやがるってのか。おかしいだろ、まさかこんなまだ俺と同じ年くらいの少女がそんなことをしているなんて信じられるわけがない。」

「敵の魔法使いは恐らく私という魔法使いの存在の抹消を望んでいる。そうでなければいきなり襲ってくるわけがない。それに、そうする為の理由だって私には理解できるから」

「理由、だつて？」俺はもう我慢できないと言わんばかりに、「人を殺すのに理由があれば、それは認められるつてのか？んなわけねえだろ、たとえどんな事情があつたとして人を殺すなんてのは最低のすることだ。冗談でも、言つて悪い事がある」

「……冗談じゃない」夜鈴は今までにないくらい真剣な眼差しだった。「言つても信じてもらえないかもしれないけれど。魔法使いは実在する。そして、私と敵は間違いなく戦っている。……きっと、どちらかが倒れるまで終わらない」

ルナが去つてから少しの間、俺は玄関でただ呆然としているだけだった。しばらくしてようやく気分も元に戻り、重い足を動かしてリビングへと歩く。できれば、その光景をこの目に焼き付けたくはなかった。

「は、は。……最低だよ。最低の最低、ドでもクソでも何でもかんでも付きまくるくらいの最低ヤローだよ俺は……」

そこには、今日の夕飯が並べられていた。朝食のカレーはもちろんのこと、それとはまた別に作られたサラダやスープがそこにあつた。間違いなく、ルナが用意してくれていたものだった。彼女は一体どんな気持ちでこの料理を作ってくれていたのだろうか。どんな気分で、俺の帰りを待っていてくれたのだろうか。そう思えば思うほど、胸が苦しくなる。だが、それ以上に吐き気がする。他の誰でもない、この自分自身に！俺は馬鹿だった。思い出した、ああそうさ何もかも思い出した。守崎との出会いも、本当はルナが守崎を襲つたのだという事実も。その後も何もかも、俺は全て思い出したさ。だから、何だつていうんだ。ルナは何もかも知っている

自分の事も、俺の事も、守崎の事も。この状況がどういうもので、どうしてこうなったのか、何もかもだ。知った上で俺と一緒にいたんじゃないのか。俺が記憶を取り戻したせいで、ルナは俺

の元から去っていった。でも、記憶を取り戻した今でも俺の気持ちに変わりはない。それを、俺は一番に彼女に伝えたかったのに言えなかった、言う事が出来なかった！俺は今、正直に言えば迷っているんだろう。ルナを好きだと言うこの気持ちに変わりがないとしても、そんな彼女のことを信じて良いのか、未だ解らないでいる。何とも滑稽だ、反吐が出る。目の前のテーブルに載せられ並べられた料理を眺めながら、俺は自然と拳を握っていた。どうしてあの時、あの瞬間に俺は口を開く事ができなかった？追いかけることすら出来なかった。どうして、何故？理由は、明白だった。

「……結局、俺はルナを信じられなかったってことじゃねーか」  
たった二日間、一緒にいただけ。人間なんて、そう簡単に信頼し合えるものじゃない。……そうさ。記憶を失っていたからこそ生まれた、ただのその場限りの醜い感情に振り回されただけの男それが俺なんだろう。

ゴガン！と、俺は壁を左手で殴りつけた。拳が痛むのを無視して、思いっきり。

「それこそ、馬鹿らしいだろうが……」  
記憶を失っていた。だから何だ。俺はただ、一日の半分程度の記憶しか失ってない。それに比べて、俺はルナと二日も共にした。単純計算でいえばルナと共にいた時間のほうが、遥かに失っていた時間より多いじゃないか。

いや、理屈はもうどうでもいい。この光景が、今まで過ごしてきた時間が、彼女の言葉が、あの去り際の表情が。何もかもが、全てを物語っている。気付けよ月城昂。いくら鈍感だからって、今ここで気付けなければ全てが手遅れになる。そうなる前にやるべき事があるんじゃないのか。だからこそ、俺は今ここでもう一度はつきりさせなければならぬ。

「そうだよ。何を迷う必要があるってんだ」

月城昂は。あの少女の事が、好きだ。

「見つけたわ」

不意に、どこからともなく声が聞こえてきた。瞬間、ベンチに座って休んでいたはずの夜鈴が立ち上がる。

「どこまで逃げたのかと思ったら、こんなところにいたのね『幻想遣い』。いくら公園といっても、この辺じゃ人目が付かないわよ？

まあ、それを考慮してこの場所を選んだのかもしれないけれど」

突如現れた声の主は、少女だった。長い金色の髪を靡かせながら、じわりじわりとこちらへ歩み寄ってくる。こいつが、敵の魔法使い……なのか？

「夜中まで逃げられなかったのは残念ね、『幻想遣い』？　こうも明るいと、貴女の魔法も機能しにくいでしょ？　どうして解るのか、なんて聞かないでよ。わたしだってそれなりの魔法使いだもの。一戦交えただけでそれなりに相手の能力は把握できるわ」

「……」夜鈴は無言で答える。

「ふうん、あくまでだんまりってわけ？　それはそれで面倒がなくてとても結構なのだけれど　ひとつ、聞いてもいいかしら？」ふと、金髪の少女の視線がこちらへと向けられる。まるで異物でも見るかのような、鋭い視線。「そこにいるのは誰？　見たところただの一般人のようだけど……手駒にでもしたわけ？」

じり、と夜鈴が俺の前に立つ。

「この人は関係ない。偶然、倒れ掛かっていた私を助けてくれただけの、一般人」

ちくり、と何かが胸に突き刺さるような気分を覚えた。関係ない確かにその通り。ただの通りすがりの俺はどこまでたつても今のままでは無関係の一般人に過ぎない。だけど、その言葉が俺は少し気にいらなかった　信じたわけではないが、この二人の空気は明らかに異常だった。魔法使いではなくても、今にも殺し合いを始め

てしまいそうな そんな不安感が俺の脳裏に押し寄せる。

「へえ。ま、わたしはどうでもいいけれど。なら関係ない人にはさつさとこの場からいなくなつて貰うとして。……早急に事を終わらせましょう」

「待て、ちよつと待てよお前」俺は思わず口を開いた。「何で夜鈴を襲おうとする？ 彼女が何をやつたつて言うんだ」

俺の言葉に、だが少女は眉一つ動かさなかった。ただ、平然と。それが当たり前なのだというように、呟く。

「貴方には関係ないわ」

瞬間、金髪の少女が動いた。だが、それにあわせるかのように一秒としなかっただろう、目の前の夜鈴が姿を消していた。

「な 、転移？ そんなことが……」

斬りかかった金髪の少女は、そう言いながら周囲を見回す。何が起こつたのか俺にはさっぱり解らない。解るのは目の前に今『敵』の少女がいること。そして、いつの間にかその手には剣のようなものが握られていることだけ。剣のようなもの、とは言っても、実際に剣の形をしているわけではない。まるで光が形を持ったかのように彼女の手に握られ、それが剣のように見えたのである。これが『魔法』だと言うのか。一つ解るのは、この金髪の少女は俺に危害を加えるつもりはないようだった。真つ先に夜鈴を狙う辺り、ターゲットのみに重点を置いて攻撃を加えるつもりらしい。

「うあつ！」

どさ、と突然金髪の少女が前のめりに倒れた。手に握られていたはずの剣のようなものはなくなっている。その向こう側には、守崎夜鈴が立っていた。後ろから攻撃したのだろうか。金髪の少女は不意打ちでも食らつたかのような姿勢で倒れている。

「……確かに、昼間では私の魔法もあまり使えない。けれど」夜鈴は無表情で、目の前の少女を見下ろしながら、「脅威を退くことぐらいは、出来る」

今度は、金髪の少女の姿が消えた 同時に金属音。

「……くっ」夜鈴は苦そうに顔をゆがめる。

「判断力はいいいみたいね、『幻想遣い』。それにその手に握られているのは さしずめ日本刀ってところかしら。魔法使いには似合わない武器よね。……銃刀法って、ご存知？」

「普段は隠しているから。それに……これは、普通の人間には見えない」

「ふふ、対話するレベルの余裕は、あるみたい……ね！」

ガキン！ と音がして、二人は飛び退いた。互いに距離をとり、じりじりと間合いを詰めていく。気が付けば、夜鈴は魔法使いの装束よろしく黒フードを脱いでいた。いつ脱いだのだろう、まったく解らない。黒フードの下は制服だった。だが、ウチの学校のものではない。ふと、夜鈴と視線が合う。逃げろ、とでも言いたいのだろうか。確かにこの状況、疑いを持っているほうが馬鹿馬鹿しい。魔法使いかどうかはともかく、この二人は明らかに常軌を逸していた。そんな場所にこれ以上いられるわけがない。俺のような一般人が、だ。……自然と、唇が引きつっていた。笑っている。俺は、こんな状況になって 何故だか解らないが、笑っていた。

「上等だ……」俺は誰にともなく呟いて、「魔法使いだかなんだか知らないけどな。一度関わった以上、俺には見捨てる事なんてできねえんだよ……！」

俺は並べられている料理にラップをかけ、そのまま部屋を後にした。この街は広い。むしろ、もうこの街にはいないかも知れない。だが、それでも探さなければ気がすまない。探して、見つけ出して たったひとつの言葉を伝えなければ気がすまない。まだそれほど時間が経っているわけでもない。ここからそれほど遠くまではいけな いはずだ。それに、今日は夜鈴との決闘もある。この街からいなくなることはあまり無いと考えていい。

「……まさか」

俺はひとつの場所を思い浮かべて、その場所へ向けて走り出す。もし俺の勘が外れていなければ、ルナはきっとそこに居る。

「やめろッ！」

俺は二人の対峙する場所へと駆け出した。どうなるか、なんて知ったことじゃない。今は、あの二人をなんとかしてでも止めないと。

「昂、避けて……！」 夜鈴が叫ぶ。

瞬間、俺はいつの間にか公園の端にある草むらに倒れていた。身体が痛い。何が起こったのか理解できない。あまりに一瞬の出来事だった。恐らく、あの金髪の魔法使いが俺に攻撃を加えたのだろう。「くっそ……、手も足もでないってのはこう言う事かよ、ちくしょう」

幸い というよりも、わざと急所を外しているという感じが否めないが 致命傷も負わず、身体だって動かそうと思えば動かせる。だが、さすがにこれではただの足手まといにしかないだろう。二人を止める術なんてものは、俺には皆無だった。

「それでも、やるしかねえだろうが」

ぐっ、と力を入れて立ち上がる。夜鈴と金髪の少女は、以前戦いを続けていた。人目がつかない場所とは言え、さすがにこの光景は凄絶だ。誰かに見られればたまったものではないだろう。光の剣（とりあえず正体不明なのでこう呼ぶ事にする）と日本刀の、剣戟の応酬。とてもではないが一般人の動きとは思えない二人の動作に、俺は一瞬現実を疑いたくなった。普段は隠しているらしい夜鈴の日本刀も、今では俺にも見える。どこに隠していたのだろう。あの黒コートの中だろうか。

「力で敵わないなら、言葉でなんとかしてやるさ」

実際問題、俺にはそれしかなかった。言葉で理解するような相手

ではない気もするが、それしか方法はない。立ち上がり、歩き出す。そこで対峙している二人の少女を止める為に。

「二人とも、もうやめろつつてんだよ！　どんな理由があるのか知らないけどな、どんな理由があっても人を殺していいことにはならねえだろ！」

叫ぶ。完膚無きまでに。身体中に痛みが走るが、そんなものは関係ない。俺の声に気付いたのか、金髪の少女が動きを止めた。それと同時に、こちらへと向かってくる。

近付いて、

「……、がはッ」

蹴りを腹部に入れられた。

「何それ、正義の味方でも気取ってるつもり？」金髪の少女は嘲るように言う。「笑わせないでよ、そう言うのって凄く虫唾が走るわ」それだけ言つて、金髪の少女はその場から飛び退いた。入れ違いになってやつてくる夜鈴。その表情には困惑とも悲愴とも取れるものがある。

「……どうして」夜鈴は心底解らないと言った風に、「どうして着いて来るの？」

「俺はもう無関係じゃないからな」

「どうして逃げ出さないの？」

「言つただろ。俺は危ない女の子を見ると見捨てられないんだよ」

俺は蹴られた腹部を抑えながら、言う。まだだ。まだ立ち上がれる。こんなところで諦めてたまるか。無関係だなんて、言わせるものか。そんな俺を見てか、夜鈴は不安そうな表情を隠せずに、呟く。「どうして、貴方は立っていられるの？」

「やるべき事があるからだろ」俺はさも当たり前のように、そう言い放った。「俺のこと、信じられないか？　夜鈴」

夜鈴は、何も言わなかった。そりゃそうだ、さっき始めて会ったばかりの男を信じろなんてほづがおかしい。おかしいに決まってるだけ。



「俺が守ってやる、お前を襲おうとするやつから。だから、信じてくれ」

夕焼けが綺麗な黄金色に輝く、夕暮れの西条公園　少女・ルナはそこにいた。公園のベンチ　一昨日、俺と夜鈴が座っていたその場所に、ただ一人佇んでいる。

「やつばここか」

俺はそれだけ呟いて、ルナの元へと歩いて行く。ルナは特に返事もせず、こちらに振り向きもしなかった。ただ黙ってそこにいる。まるで薄幸の少女を描いたような光景に、俺は少し罪悪感を覚えた。どさり、と少し乱暴気味にルナの隣に座り込むと、俺は空を眺めながら「ふう」と溜め息を一つ吐いた。

「……覚えてる？」唐突にルナが口を開いた。「ここで、わたしとあの魔法使いが戦って。止めに入ってきた貴方に二度も攻撃したのよ、わたし。手加減はしたつもりだけど、痛かったんじゃない……？」

やっぱり、手加減されていたのか。それにしても思い出すたびに痛みが蘇るようで、あまり思い出たくはないが　そう、今思えばあの時がはじめてルナとまともに顔を合わせた時だった。

「そうだな、ちよつと痛かった」

ちよつと、なんてのは強がりだった。間違いなく、あの時は立つのが限界ぐらいの痛みはあったのだから。それでも、俺はそれを口にするのではない。

「……そう。そして、その後　わたしはあの魔法使いに負けそうになった。戦いを止めさせようとしたのか、そこに飛び込んできた貴方を盾に、わたしはこの場から逃げ去ったわ。正直、あの時は本当にマズかった。油断していたと言うのもあるけれど……それ以上に、あの魔法使いにとって貴方の存在が重要だったみたいね」

「夜鈴にとって、俺が？ まさか。俺はただの通りすがりの男だっただけだよ」

「でも、それならどうして貴方はああまでしてあの子を助けようとしたの？」

それは きっと、見捨てるのが気まずかったから。そこで逃げ出したら、俺はきっと後悔すると思ったから。

「……まあ、でも。そこが貴方らしいって言えば貴方らしいんだけどね」

「ルナ、お前……」

「全部思い出したんでしょ？ なら大体解つてると思うけど、この騒動の原因はこのわたしよ。わたしが彼女を殺す為にこの街へやってきた。ううん、正確には『とある事件』を片付けるためにね。その首謀者としてあの子 守崎夜鈴が候補に挙がった。実際、魔法使いなんてものは稀少よ。そして今回の事件は魔法使いにしか有り得ない。だからこそ、あの子を疑った。そして証拠も見つけた。目撃情報があったのよ」

事件 さしずめ、ルナは外国からその事件を解決するためにやってきた魔法使い、って所なのだろう。そして、その事件の犯人が守崎夜鈴ってわけか。なるほど、あの時部屋で見ていたニユースはそれか。

「俺には、夜鈴がそんなことをするような奴には見えないけどな」

「それでも有り得ないのよ。こんな極東の島国の、それもちっぽけな街程度に魔法使いがいるってこと自体異端なのに、それが二人以上いるなんて有り得ないもの。彼女が犯人よ」

「……………」俺は何も言えなかった。それを否定する材料は、俺にはない。

「まあ、これでわたしの事情は話したわよ。どう、これで気分はすつきりしたかしら。ここまで追いかけてきたのだって、どうせわたしの動機が気になった……とかでしょ？」

「気にならなかった、って言えば嘘になる」俺は一息置いて、「だ

けどな、俺がここまでルナを探してきたのはそんなちっぽけな理由じゃない」

ここで、初めてルナは俺へと視線を移した。何も変わらない、ルナの顔。そうだ、ルナは何ひとつ変わっていない。変わったのは俺だけで。変えるか変えないのかを選ぶのも俺なんだから。

「俺が記憶を取り戻したからって、何が変わるっていうんだよ？」

「……どう言う、意味？」

「ルナは全部知ってたろ？ 俺みたいに記憶を失っていたわけじゃない。今までのルナは全部偽りだったのか？ そうじゃないだろ。確かに俺に嘘をついていたかもしれない。まあ、正直ほとんど嘘だったんだろうな。言葉の上では。でも、違うだろ。ルナは俺と一緒にいてくれた。俺のことを嫌いじゃないって言ってくれた。後悔してるって言っただろ。全部嘘なのか？ ……嘘じゃないよな」

「どうして解るの？ 全部嘘かもしれないじゃない。わたしはただの嘔吐きなんだから」

「じゃあ、どうしてルナは泣いてるんだよ？」

それだけだった。俺がそれだけ言うと、ルナはわけが解らないと言った風に、

「泣いてる？ わたしが……？ なんで、どうしてよ。わたしは魔法使い、ルナミス・サンクトリアよ？ そのわたしが、どうして泣かなくちゃいけないの。ねえ、どうして」

ぽろぽろ、と。ルナの瞳から、小さな涙の粒が浮かんでは流れていた。

「……俺、昨日も言っただけ。もう一度、言わなきゃいけないことがある」

「やめてよ。もう、何も……言わないでよ……」

ルナの瞳を見つめる。涙は止まらず流れ、目は少しだが充血していた。頬は赤く紅潮し、歳相応の子供のように彼女は泣いていた。

「記憶が戻ったから何だって言うんだよ？ 何も関係ないだろ。俺とルナが築き上げた二日間の思い出しには何の支障もない。俺が抱いたこの気持ちにだって何の変化もなかったんだよ。迷ったことは認める。一瞬だけ、どうしたらいいか解らなかったのも認めるさ。でもな、結局何も変わりはいらなかった。俺は、俺の気持ちは……何も変わりやしなかったんだから」

ルナは何も言わない。何も言わず、俺をただ見上げていた。隣に座っているルナを、俺は無理矢理抱き寄せる。抵抗はない。いや、抵抗されたって今回ばかりは容赦しないけど。

「だから、俺はさ」「手でルナの涙を取って、そのまま頬に触れる。ルナの頬は熱くて、そして柔らかかった。」「ルナの事が、好きだ」

もう、これ以上の言葉は必要ない。言いたいことは、全て言い尽くしたのだから。

「……ばか」

それだけ呟いて、ルナは今度こそ本当に心底泣き崩れた。

「で、結局どうするつもりなんだ？」

俺はルナを半強制的に自宅へと連れ戻し、リビングで食事を開始した。最初は戸惑っていたルナだったが、やはり一緒に食事を取る事に不満はなく、むしろ望んでいたのだろう。それほど苦もなく食事を行うことができた。俺は、これからの行動を考え、ルナにどう動くかを問うた。

「……魔法使いとしてわたしにもそれなりのプライドがあるんだけど。まあ、今回は貴方に免じて一步譲るわ。そうね。仮に守崎夜鈴が今回の事件の犯人ではないとするなら、犯人は別に居ることになる。それも、確実に魔法使いよ。でも、それを確かめる方法は存在しない。向こうからノコノコと出てきてくれるはずがないし、あの

守崎夜鈴以外にそんな存在が居るって言う情報もまったく無い。いわば手がかりがないのだから、こうなれば守崎夜鈴を疑うのは当然の行為よ。そこは解って貰えるかしら」

「解るさ、解るけど……俺はやっぱり、夜鈴がそんな事をする子だとは思えない。第一さ、事件って連続殺人事件なんだろ？ それも猟奇的な。そんな暴力的な行動を、あの子がすると思うか？」

「感情論ね」ルナは厳しい声で言った。「貴方のそれはただの憶測に過ぎない。守崎夜鈴という少女の表面に惑わされているだけかも知れないわ」

確かに、それはそうだ。俺が夜鈴と出会い、会話したのは本当にごくわずかの間だった。それだけで、その人間の全てを理解したような態度を取るのには傲慢だと言える。そう、そんな事は百も承知。理解出来ている上で、俺は言う。守崎夜鈴を犯人と決め付けるのはまだ早い、と。

「そうだな。それは正しいよルナ。だからこそ俺は言ってるんだ。確定ではないのなら、真実を確かめようって」

「どうやって？ それを、どうやって確かめるのかをわたしは聞いているのよ。だって、さっきも言ったとおり他に魔法使いが存在するなんてデータは無いし、わたしがこの街で感じ取った魔法使いの存在はあの守崎夜鈴だけなんだから。もし他に犯人がいるのだとしても、確かめる術がないじゃない」

「簡単さ」俺は得意げに、「夜鈴に協力して貰う」

「な……、何を言ってるの？ ばかだとは思ってたけどこれほどばかだとは思ってなかったわ。貴方、その守崎夜鈴と、わたしは今日決闘するのよ？ 申し出はすでに受けた。これは正式なものよ。魔法使い同士の正式な決闘。派閥は関わっていないとはいえ、これは魔法使い自身のプライドの問題だわ。わたしだって、今更引き下がるつもりもないもの」

決闘。夜鈴が何を目的にそんな事を申し出たのかは解らないが、それを一度受けてしまった以上、ルナと夜鈴はもう一度対峙する運

命にあるってことか。

「だけど、今はもうルナにとって夜鈴は殺す対象ではないだろ？  
少なくとも、本当の犯人かを確かめるまでは」

「そうだけど……、それも貴方の言葉を尊重しての行為よ。本来なら、ここで決着をつけるつもりだったんだから」

「決着、ね……。じゃあ、こう考えるんだ。ルナが夜鈴に勝つ。勝った場合の条件はこうだ。『この街で起きている事件の真相を突き止める為に、守崎夜鈴はルナミス・サンクトリアに惜しみない協力を行う』ってな」

「……なるほど。それなら守崎夜鈴を監視下に置きつつ、事件の真相を調べる事が出来る。もし守崎夜鈴が犯人なのだとしても、それが明かされたときは速やかに対処を行える　ふうん、ばか兄にしてはなかなか面白いじゃない」

いつの間にかばか兄呼ばわりされてるのだが。

「でも、それじゃあ負けた時の条件は？」ルナは少し苦い表情で、  
「わたしが勝った場合の条件を提示するのなら、負けた場合の条件も提示するべきよ。それはもちろん、向こうに決めてもらうのが一番だろうけど……万が一のことも考えて、こちらが用意して置くことに越したことはないわ」

「そうだな……」

ルナが負けたとき、か。そういえば、ルナは今まで二回、夜鈴と対峙して　二回とも退けられている。夜鈴が強力な魔法使いだと言う事は明らかだった。

「それに」ルナは難しそうな口調で、「決闘の場は夜、深夜よ。彼女が戦うに絶好のフィールドを用意された。それが本来フェアなのだろうけれど、そうでない時でも十分な強さの持ち主だったわ。悔しいけれど、彼女の本気にはわたしだって負けてしまうかもしれないのよ」

「夜……？　どうして夜が絶好なんだ？」

「これは事前に得た情報だけれど……、彼女はわたしと正反対の性

質を持った魔力の持ち主なのよ。つまりわたしが『光』なのに対して、彼女は『闇』なわけ」

光と闇　まるで彼女達そのものを現した構図だった。

光　つまりは白がルナ。

闇　つまりは黒が夜鈴。

なるほど確かにイメージには当て嵌まる。魔力というのは、彼女達のイメージから生まれるものなのだろうか、と、ルナを眺めながら思う。

「何よ、じろじろ見て」

「いや……魔力つてのが良くわからないから少し考えてた」

「解らないなら聞きなさいよね」ルナは呆れたように、「魔力にも種類があるってこと。それによって扱える魔法のタイプが変化するわ。魔法使いにも種類があつてね、それは大体魔力とか、学んだ環境によって変わってくる。わたしの場合は魔力が光に向いていて、学んだものが精神学だつたつてだけの話。『言葉の魔法』は魔力によつて決まった魔法ではなくて、わたしが学んで生み出した魔法つてわけ」

そうなると、あの時戦つていた時に手に握られていた光の剣は、ルナの魔力によつて決められた魔法、つてことになるんだろう。ようするにゲームとかでよくある属性みたいなものか、と適当に考える。

「話を戻すわよ。つまり夜つて言うのは闇が多く集う時間帯なの。

だからこそ守崎夜鈴。『幻想遣い』のフィールド、つてわけね」

「その、『幻想遣い』つてのはなんだ？ ルナの『言葉の魔法』み

たいなもんなのか」

「それは魔法使いの呼び名のようなものね。二つ名　アンライトプリンセス　たとえば解

り易いかしら。わたしの場合は『月光の聖女』なんだけど」ルナは少し恥ずかしそうに、「まあ、ようするにその魔法使いを一言で表す名前みたいな感じね。だから、実際にはわたしも見たことないけれど、守崎夜鈴はその名の通り『幻想』を『遣う』魔法使いの可能性

性が大きい」

幻想を遣う　よく意味がわからなかったが、ルナもあまり解っているようではなかった。本当にただ名前をそのままの意味で捉えただけなのだろう。大体何だよ幻想って。

「とにかく、まずは夜鈴に勝たないといけないってわけか……。俺としては、もう二人には争って欲しくないんだけどな。でも、それは二人のプライドが許さないんだろ？」

「ええ」ルナは一言で返事をする。

「なら、仕方ない。俺は手も足も出さないよ。だけど、これだけは約束してくれ。何があっても、夜鈴を殺すようなことはしない、って」

俺は真剣な顔付きでルナに言い寄った。だが、俺のそんな言葉はまるで予想通りだったとでも言わんばかりの表情で、ルナは言葉を返す。

「解ってるわよ、それくらい。わたしだってむやみやたらに人を殺したいなんて思ってないんだから。それこそ今回の事件の犯人よ。任せておきなさい、わたしは必ず勝つ。勝って、この事件をさっさと終わらせてやるんだから」

ルナは何の迷いもなくそう言いきった。ああ、これは嘘じゃない。ルナは本当にそう思っている。短い付き合いではあるが、俺にだってそれくらい解る。

「問題は、夜鈴だよな……。まさか、あいつはルナを殺そうとはしないだろうけど」

「何よ、まさかわたしが負けるだなんて可能性、引っぱり出してるんじゃないでしょうね」

「いやいや、さっき自分で負けるかとか言ってたのは誰だよ？」

「もしもの話よ。ふん、わたしが本気を出したらあんな魔法使い、すぐにでもひれ伏してやれるんだから」

俺としては複雑な心境なのだが、ここは事を上手く運ぶためにルナに頑張って貰うしかない。何の為に守崎がこんな決闘を申し出た



のか。その理由は解らないが、どの道今の俺には口を挟む余地なんてどこにもなかった。

かくして決闘の時間がやってきた。午前零時まであと三分とない。俺とルナは、西条公園の噴水前にて夜鈴の到来を待っていた。はじめ、俺はルナに来るなと言われたのだが　さすがに、ここまで関わってしまった俺も最後まで見届けなければ気がすまない。この決闘に意味があるのかどうかは俺には解らない。決めるのは彼女達だ。そして、その先に続く未来という名の道を決めるのも。まるで選択権のない傍観者を気取るしかないこの俺は、公園の噴水から遠くに位置するベンチを観客席にすることにした。どうも緊張感が無いが、仕方が無いだろう。俺は心の奥では心底安心しているのだから。これ以上、二人が無駄に傷つけあうことはない。殺し合うのではなく、ただ互いのプライドを守るために戦う　それは、さながら格闘技の大会の決勝戦のような気分ではないだろうか。故に安心できる。ただの観客として振舞える。これがきつと、最良の結果だと信じて。

しばらくして、時計の針が午前零時をぴつたりと差した頃  
「来たわね」

噴水の反対側、公園の逆の入り口から守崎夜鈴が姿を現した。あの黒装束を身に纏い、無表情のまま、ルナの元へと歩み寄ってくる。  
「……………」

ふと、夜鈴と目が合った。結局俺はルナの元から離れなかった、その事実に着目しているのだろうか。記憶を取り戻してもルナ側にいる俺を、彼女はどんな気持ちで見ているのだろうか。だが、そんな杞憂はすぐにきつと解消されるはずだ。

「魔法使い、『幻想遣い』の守崎夜鈴。貴女の決闘を受けにきたわ…………ふふ、今回は手加減なしでいくわよ。深夜のフィールドは貴女

にも絶好の場のはずだし、わたしも容赦しないんだから」

ルナが大胆不敵に言い放つ。だが、夜鈴はそんな事は構わないと言った様子で、

「……始めに言うておくけれど。私は負けない、負けられない。昂を、貴女の手から救うために」

俺を救う　まさか夜鈴は、たったそれだけの理由で決闘を申し出たっていうのか。

「ふうん」ルナは少し引きつった表情で、「どうしてあのばかに固執するのは解らないけれど……残念ね、あれはもうわたしのなんだから」

「は……はあつ？　ルナ、お前いきなり何を……！」

「うるさいわね、黙ってなさいよ部外者！」ルナは何故だか知らないが怒りだした。「いい？　守崎夜鈴。わたしの目的は貴女の抹消

のはずだったんだけど、そのほかのおかげで気が変わったのよ。こちらがもし勝った場合、貴女にはとある事件の捜査に協力して貰うことになるわ。これは、その　月城昂が決めたことよ」

「……？」わずかながら、夜鈴の表情に疑問が浮かんだ。「どう言う、こと？　ルナミス＝サンクトリア……貴女の目的は、私を倒すことによる魔法使いとしての地位の昇格、のはず」

「ああ、それはただの勘違いってやつよ。……わたしの目的はね、この街で起きているとある事件の犯人を抹消することよ。ぶっちゃけると、地位の昇格とかそんなのどうでもいいわ。っていうか、その為に他の魔法使いを襲うなんて馬鹿げてるとも思ってるし」

ぽかん、と。あの無表情が特徴な夜鈴でさえ、その言葉には呆気を取られていた。そう　守崎夜鈴は誤解をしていた。いきなり魔法使いが同族に襲われる理由なんて、実際それぐらいしか思い浮かばないのだろう。仕方が無いとはいえ、それは本当に衝撃的な事実のようだった。

「それなら、何故……昂に近付いた？」夜鈴は、さらに疑問をぶつける。「貴女の行動には不可思議な部分が多すぎる。どうして無為

に虚偽行為を行ってまで昴に近付いたの？」

う、と。今度はルナがたじろいだ。決闘はどうしたのだろう、さつきからまるで戦いが始まるような気配が感じられない。これではただの口論だった。

「そ、それは……貴女に負けそうになったから、隠れ蓑が必要で

」

「嘘」ルナの言葉をさえぎるように、夜鈴が言った。「確かに、一時的に一晩くらいの宿を確保するためならば理解できる。でも、それは違う。貴女は現に、二日間も滞在し、尚且つ昴の記憶が蘇っても居座っている。その理由は、何？」

「夜鈴、それは」

ルナが俺の所にいるのは俺のせいでもある。俺が望んだからだ。それ以外に理由なんて、

「そう、そうね。あはは、おかしいわよね！ 確かに滑稽だわ！」

その時。唐突に、ルナが笑い出した。まるで追い詰められたように、投げやりに、「そう、最初はそれだけのつもりだったわよ。一日もすればいなくなつてやろうと思つてた。学校へ行つたのだっただけの好奇心だし、特に意味はなかった。でもその日の夜……わたしはいつの間にか『いつまでここにいられるのか』を考えてた！ ばかみたいよね。わたしみたいな魔法使いなんて異端な存在が、普通の暮らしを続けられるなんて事、あるわけないのに。だつて言うのに、いつまで偽りの兄に甘え続けて今の暮らしを続けられるのか、それだけを考えて夜も眠れなかったのよ。……うふふ、本当に。ただのばかよね」

「……」夜鈴は無言で返す。

「そう、結局のところわたしは『普通』に憧れていた。今回の事件を終わらせて、本国に帰るといふ選択肢を常に持ちながら、その反対側で、ここに残つて暮らし続けたいという、自分自身の本音があった。どうしてそんな気持ちを抱くようになったのか、その時は理解できなかった。だから、わたしは今日 貴女を倒して、さっ

さと事件を片付けて。本国に無理矢理にでも自分を連れ帰って、夢から覚めようと思ってた」

静かだった　ただ公園の中心で、一人の少女の独白が続く。

「でも　それももう終わり。我慢するのって良くないわね。つくづく実感したわ。だからわたしは決めたのよ。これからは、自分の好きなように生きる、ってね」

「……それと。昴と一緒にいる事にどんな関係があるの？」

「解らないの、ここまで言えば解ると思ったんだけどなあ。……笑

いたいなら笑いなさいよ、守崎夜鈴。そう　このわたし、魔法使

い『月光の聖女』ルナミスⅡサンクトリアは、そこにいるばかり、

月城昴を何の間違いか好きになっちゃったのよ！」

俺の心に衝撃が走る。まさかこんなタイミングでそんな言葉を聞かされるハメになるとは思っていなかっただけに、俺は何と言って良いのか解らずただ啞然としていた。

「自分でも自身の精神を疑うけど。この気持ちを一言で言い表せて言うなら、つまりはそう言うことなのよ。不本意ながらね」

「……そう。そう言うことなら、私にも理解できる」夜鈴は微かに笑うように、「なら、貴女は昴に危害を加えるつもりはなく……そして、私と決闘することで得るものは、ある事件に私が協力するという事項　と言う事？」

「そうよ。本当はその事件の犯人は貴女だと言う事になっているのだけれど、ね。ばか兄が否定するもんだから、真相を確かめる為にもよ。文句があるなら言いなさいよね」

そこで、初めて夜鈴は明らかに解る笑みをこぼした。

「なら。この決闘で、私が勝った場合の条件を提示する権利はこちらにある？」

「ええ、まあ……ない事はないわよ。一応こちらでも用意はしてあるけれど、そっちが何か要望があるならね。何よ、試してみなさい」  
そうして、夜鈴は俺に一瞥をくれてから　ただ静かに、宣言した。

「私が勝った時は。私はその事件の容疑を晴らす為に貴女達に協力する」

「え？」俺とルナは、声を合わせてそう返す。

「ちょ、ちょっと待って。それじゃ、わたしが勝っても負けても同じ」

だが、夜鈴の言葉はそれで終わりではなかった。ルナが口を挟もうとして、だがそれを遮るように、夜鈴は言う。

「ただし。私が勝った場合のみの条件として。私が勝った場合、昴を私の好きにさせて貰う」

……、なんだって？

「ああ、そう。なるほどね。そう言う事」ルナは何かを悟ったかのように、「いいわ、乗るわよその勝負！」

「……」くす、と笑う夜鈴。

「行くわよ、『幻想遣い』……守崎夜鈴！」

ダッ、とルナが駆け出した。それを合図に、夜鈴は着ていた黒コートを脱ぎ捨て、そこから一本の日本刀を取り出す。一昨日に一度だけ見た事がある。その時とまったく同じ刀だった。まるでコートの中から出てきたかのようにスリと刀が抜け出され、夜鈴はそれを両手で構える。瞬間、ルナが飛んだ。基本的に公園に明かりはない。あるとしても、周辺の暗い道に数少ない電灯がちらちらと見えるだけだ。ルナが言っていた通りならば、地の利は夜鈴にあると言っただけだろう。暗闇が夜鈴の魔法の発動に関わるのだとすれば、光の少ないこの場所はルナにとって不利な場所なのではないか。だが、そんな事は杞憂に過ぎなかった。ルナは右手を空にかざしていた。その先にあるのは月。そう。ルナは月の光を利用し、魔法を発動させるつもりなんだろう。『月光』<sup>ムーンライト</sup>とはよく言ったものである。今のルナの姿は、まさしくその二つ名に当て嵌まっていた。

「はあああああっ！」

瞬きと共に、ルナの右手にはあの光の剣が握られていた。それを夜鈴目掛け、飛び掛るようにして振り下ろすルナ。それを両手で持

つ刀で防御する夜鈴。容赦がない。もしガードしていなければ夜鈴がどうなったのかなんて、想像もしたくない。……もちろんガードするに決まっているのだが、ルナは本当に約束を解っているのだろうかと不安になる。がきん、と鋭い金属音がした。夜鈴の持つ日本刀は長い。少なくとも彼女の背丈ぐらいはあるだろう、それほど長い。だと言うのにそんな得物を夜鈴は何でもないかのように振り回す。さながら扱い慣れているとも言わんばかりに。回数にして二撃　ルナによる攻撃が終えると、それはただの挨拶代わりだと言うように、ルナは一度距離を取った。

「……お得意の魔法はまだご披露されないのかしら？」

余裕綽々と言わんばかりの声色で、挑発するようにルナは言う。今の夜鈴は確かに前回となんら変わらない武装で、日本刀を一本握っているだけ。何かおかしい現象が起こっているわけでもないし、魔法を使っているようには思えない。だが、そんな俺とルナの予想を裏切るように、夜鈴が刀先をルナに向け、

「大丈夫。もう始まっている」

魔法使い、ルナミス「サンクトリアは自らの目を疑った。先程まで確かに自分は公園の噴水近くにいたはず　だと言うのに、ふと気が付けばそこはまったく違う場所になっている。暗く、地面さえ見えない闇の世界。本当に自分がそこに立っているのかさえ疑問に思えてくる、そんな空間。後ろを振り返ってみるが、昴の姿はない。

「何これ、どう言う事……？」

声が響く。まるで地下空洞のような場所にいるみたいだった。

「ここは、私が作り出した空間。貴女はここに在る限り、この私に勝つことは出来ない」

真後ろから聞き覚えのある声　守崎夜鈴！　ばっ、と後ろを振り返る。しまった、いつの間に背後を取られていたのか。

「……え？」

だが、そこに守崎夜鈴の姿はなかった。おかしい。確かに後ろから聞こえたと思ったのに。

（落ち着きなさいルナ。考えるのよ……ここは、守崎夜鈴が作り出した『空間』。どういう仕組みかは知らないけれど、あの公園とはまったく別のところに来ちゃったみたいね。姿が見えないのは、守崎夜鈴の魔法だから？　彼女はいくらでも姿を隠してしまえるってわけ……？）

思考するけれど、やはり理解には至れない。現状、自分がまんまと守崎夜鈴の魔法に掛かってしまったのは見ての通り。だが、その魔法がいったいどんな仕組みなのが解らない。この空間もまったくもって意味不明だ。魔法使い同士の戦いは、互いにどれだけ相手の魔法を熟知しているかで勝負が決まると言っても良い。単なる力比べで勝てるならば、そもそも魔法なんて使わなくても勝てる。相手の魔法使いに勝つ、と言う意味は、すなわち相手の魔法を看破し、理解し、把握した上でそれを完膚なきまでに叩き潰す。そうすることで、魔法使いは初めて勝利に至れるのだ。つまり、今　相手の魔法使い、守崎夜鈴は少なくとも自分　ルナミス＝サンクトリアの魔法を理解している。まだ見せていないものも多数あるけれど、戦闘で主に使うのは光を凝縮させ、圧縮して物理的な干渉能力を持つ剣を作り出す『光の剣』ソードオブライトぐらいのものだった。ルナはどちらかと言えば文武両道、戦闘に関する魔法とそれ以外の魔法どちらも隔てなく使いこなす魔法使いであり、それは同時にどちらにも特化していないと言える。こうしていざ実戦となるのは初めてではないが、こうも容易く自らの魔法の性質を理解され、対策を取られるとは思ってもいなかった。

（月の光さえあればどうともなる……なんてのは迂闊だったかしら。こうも光がないんじゃ、さすがのわたしでも『光の剣』ソードオブライトは作り出せない。考えたわね守崎夜鈴……！）

警戒心をより一層強め、ルナは周囲を見回す。だが、それが果た

して本当に『周囲を見回している』のかどうかすら解らない。辺りはどれもこれも同じで、かろうじて自分の姿だけが見えるのはどこかにかすかな光でもあるのか、それともこの空間の性質なのか。（光があるなら、まだ勝機はあるんだけど）

しかし、今は考えても何も解らない。迫り来る敵の気配を逃がさないよう、ルナは全身に神経を込らせる。

（おかしい。守崎夜鈴……どうして一向に姿を現さないの？ さっきは確かに声が聞こえたのに、それからまったく動きが見えない。まさか、ここにずっと閉じ込めておくつもりじゃないでしょうね）それは勘弁だ、とルナは思う。それでは、自分が根を上げるまでの根競べと言う事になる。それも、圧倒的不利な状況で、だ。何も出来ない、何も解らない、何も見えない。この空間にいるプレッシャーは相当のものだった。そのうちストレスでどうにかなくなってしまっているのではないかと、と言う不安ばかりが押し寄せ、余計に気分を悪くする。このままでは悪循環だ。そのうち耐え切れなくなって自滅するのがオチだろう。何とか自力でここを脱出できないものか。（どんな魔法なのかさえ理解できればね……。あー、もう。もうちょっと事前に調べておくんだったかなあ。守崎夜鈴の扱う魔法についてとか）

そこまで考えて、ルナは「あ」と気の抜けた声を出した。そう。守崎夜鈴について、ルナは何も調べていなかったわけではない。軽くではあるものの、事前に知り得ていた情報があった。それは、

（守崎夜鈴は『幻想遣い』……！）

もしこの考えに間違いがないのだとすれば。ルナは、遠目からは見えない程度の微笑を口元で歪ませて、

「……ふふふ、なるほど。そう言う事ね」

月城昂は、目の前で繰り広げられているおかしな状況をただ黙って



見つめていた。

「……ふふふ、なるほど。そう言う事ね」

ふと、唐突にルナが何かを呟く。遠くから見ているからか、何と言ったのかは解らない。だが、先程までまるで目が見えていないかのように挙動不審な動きをしていたルナが、ようやく何かを悟ったかのような表情を浮かべたのである。恐らく（素人目ではあるが）夜鈴の魔法にルナは掛かったのだろう。それ以降、ルナはまるで視覚を奪われたかのように立ち回っていた。それをただ黙って見つめている夜鈴の行動にもいささか疑問が浮かびつつ、そんな、はたから見ればおかしすぎる光景を目の当たりにしていたのだが　　ようやく、ルナが動いた。

「うん、やっぱりね。……一度理解してしまえば、あとは気の持ちようでどうにかなるものね、貴女の魔法も」

「……どうして解った？」

夜鈴が義務的な口調で問う。

「魔法名が仇になったってだけのお話よ。わたしの魔法名は『月光イトプリンセスの聖女』であり、貴女は『幻想遣い』だった。うん、最初は意味が解らなかったけれどね。幻想を遣う、なんてのがどう言う意味を持つのか。でも、実際に体験してみれば話は別よね。ようするにさっきの空間　いいえ、空間のように『見えていた』だけで、実際はただの幻覚。わたしはまんまと貴女の魔法に掛かり、幻覚を見せられていただけってことでしょう？」

なるほど、つまりルナは夜鈴の魔法　『幻覚を見せ付ける』らしきものによつて、さっきまで幻覚を見ていたわけか。だからあんな挙動不審な行動をしていたのだらう。ようやく合点がいった。それにしても、ルナの『言葉の魔法』といい、魔法つてのは俺の想像しているものとは全然違うものなんだろう。ううむ、こいつらが特殊なだけなのだと思いたい。

「それにしても……少し不思議に思ったんだけど、どうして幻覚を見せている間にわたしに攻撃しなかったの？　それぐらいの猶予は

十分にあつたはずよ。それとも、わたしが貴女の魔法を見破らないとでも踏んでいたのかしら。それならご期待に添えられなくて残念だけど、わたしも甘く見られたものよね」

「……今のはただの余興に過ぎない。貴女に私の魔法を『知って貰う為』の。それに……言つたはず。わたしは負けないと」

「知って貰う為？ 待ちなさいよ。魔法使い同士の戦いで、自分の手の内をバラすのはただの自殺行為よ。そんな事に何の意味があるっていうの？ 馬鹿馬鹿しいにもほどがあるわ」

以前、強気なままの夜鈴にルナは苛立ちを感じてきたのだろう。だが、そんなルナの言葉なんて意味がないと言つたように、夜鈴は平然とした顔付きで、

「なら。貴女は完全に私の魔法を防ぎきる事が出来る？」

がくん、とルナが膝を付く。恐らくまた夜鈴の魔法に掛かったのだろう。だが、すぐに正気を取り戻したのか、顔を見上げてルナは夜鈴を睨み付けた。

「……舐められたものね」ルナはまるで殺意でも抱いているかのような目つきで、「言つたはずよ。もう貴女の魔法はわたしには通用しな」

どさり。今度は身体が倒れこんだ。また魔法を受けたのか？

「っ、ふざけないで！」ルナは腕に力を入れて四つん這いになりながら、「こんなの、もう数秒とかからずに解けるわ！ 何度やつたって無駄よ。一体何がしたいって言うの！」

「……」夜鈴は答えない。

ルナではないが、これには俺もさすがに疑問を覚える。何度やつてもすぐに解けるのなら、最早その魔法に何の意味があるというんだ。夜鈴の言いたい事が解らない。それは、ルナも同じのようだった。

「もう油断しなければ倒れたりだつてしないわよ。慣れてしまえば

一秒もかからず解いてみせるんだから。それに貴女、魔法の行使時は動けないんじゃないの？ さつきからそこを動いていないのが何よりの証拠だわ。さあ、もうそろそろ遊びは終わりよ！」

ルナは頭上の月に目掛けて右手を伸ばした。あの光の剣を出すのだろう。夜鈴の魔法の対策も理解出来たのだ、これならもうルナだつて遅れを取ることはないはずである。だが、

「……、まさか」ルナは何かに気付いたように、「まさか、これが狙いだつて言うの？」

ルナの手に、あの光の剣は現れなかった。

「そう。だから言つたはず。もう私は負けない、と」

どう言う意味だ？ ルナは理解したようだったが、ただの一般人の俺にしてみれば何の事か解らない。ルナの光の剣が出なかったことに、何かつながりがあるのだろうか。そんな俺の心境を読んでかそうでないのか、夜鈴は説明口調で語り始める。

「貴女の魔法の発動に必要な条件は三つ。一つ目は周囲に光が存在し、その光に向けて手をかざす必要があること。二つ目は光を認知できる状態であること。三つ目は発動に三秒と少し時間を要すること」

「……」ルナは何も言わない。

「そして、私の魔法の発動に必要な条件は三つ。一つ目は光よりも闇が密集している場所にいること。二つ目は対象である人間が目の前に存在すること。三つ目は 発動にちょうど一秒、時間を要すること」まるで、それが決定的な差であると言うように、夜鈴は告げた。「私は貴女に、一時的にとは言え幻覚を見せ付けることができる。それがたとえ一瞬であつたとしても……それを貴女の魔法発動中に遣えば、貴女の魔法は完成しない。私の見せる幻覚は『闇』であり、そこに光は存在し得ない。だからこそ、貴女の魔法の発動に必要な『光』を一瞬でも遮断する事で、貴女は光を認知できず魔法を完成させる事が出来ない」

つまり、ルナは夜鈴相手にあの光の剣を出す事が出来ない と

言う事。それは確かに決定的な差だった。得物があるのとないのとは、確実にある方が有利に決まっている。夜鈴の手には以前としてあの長い日本刀が握られていて、それは憎くも魔法の類とは関係のないただの武器。ルナの光の剣のように使えなくなるなんて事はない。

「もう一度言う。貴女は……ルナミス」サンクトリアは私には勝てない」

す、と両手で日本刀を構えた夜鈴が勝利宣言をする。確かにこのままではルナに勝ち目はない。素手で日本刀を持った相手と対峙するなんてのは無謀すぎる。リーチの差しかり、まず踏み込むことから出来ないだろう。だが、そこまで言われて尚　ルナは決して諦めたような素振りを見せることはなかった。

「そう、なるほど。なるほどね。そこまで把握されてたなんてこれはわたしが迂闊過ぎたわ。素直に認めてあげる、凄いわよ貴女。完全に貴女の魔法をシャットダウンする方法なんてないし、どうあがいても一時的には幻覚を見せ付けられてしまうみたいだし。でもね、迂闊なのはそっちもよ守崎夜鈴。まさか、このわたしがそう言ったものの対策を用意していないとも思ってた？」ルナは不敵に微笑んで、「光が常に無いといけないのなら　わたしが光になればいいだけの事よ！」

ぶわっ、とルナの髪が摩く。その瞬間、ルナの全身を光が覆うかのように包み込んでいた。

「……！」夜鈴が滅多に変化させない表情を、変えた。

「驚かなくてもいいじゃない。だって、わたしの魔法名は『月光のプリンセス  
聖女』よ？　わたしがどうしてそう呼ばれるようになったのか、解る？」ルナは光り輝く身体でゆっくりと歩きながら、「確かにわたしの魔法の属性は光。だからこそ、わたしを倒そうとする人はまず真っ先にこう考えるわけよ。『光さえ遮ってしまえば魔法を使えないだろう』ってね。確かにその通り。遮る方法なんていくらでもあるわけだし、最初はわたしも苦難したわ。でも、ある日この魔法に

思い至ったわたしは、月の照らす夜　とある事件をこの姿で解決したことで『月光の聖女』<sup>ムーンライトプリンセス</sup>と呼ばれるようになった。それがきっかけ。そう、わたしは少しでも光があればこの身に纏わせることで常に光を得る術『光の衣』<sup>ドレスオブライト</sup>を会得した。それに、いくら貴女の幻覚でもわたしの姿を変えることはできないっていうのは、すでに一回目の幻覚を見せ付けられた時に理解していたし、わたしが光にさえなれば、たとえ幻覚を見せ付けられようと関係ない。わたしはいつでも、どんな状況だって光の魔法を行使してみせるわ」

それは神々しくも綺麗に輝いて、まるで天使のような光景だった。魔法使いは月に照らされて、静かに一人の少女の目の前へと歩み寄る。

「さて。それじゃあほんとに最後の最後。……決着を付けるわよ、守崎夜鈴」

しばしの沈黙。互いに睨み合い、見詰め合う二人の魔法使い。そうして、どちらからともなく脚を踏み出した。ルナは自らの手を胸元に当てて、そこから光の剣を現出させる。夜鈴もそれに応えるように両手で握る刀を構え、

「……やっぱり、貴女は侮れない……敵、だった」

「それはこっちの台詞、よ！」

二人の魔法使いは、最後の剣戟を開始した。

結果だけ言ってしまうおう、勝負は引き分けだった。互いに目の前すれすれに刃を向け合い　そうして、同時に二人はその手を下ろした。満足がいったのか、ルナは以前の剣幕など忘れたように微笑んでいた。

「なかなかやるじゃない、守崎夜鈴。このわたしと相打ちまで持っていたのは貴女が初めてよ」

「……まさかここまでとは思っていなかった。油断していたのは、

私のほう」

二人して互いを尊重しあうその姿はもはや到底敵同士には見えなかった。これで一件落着、もうこの二人が殺し合うなんて事はないだろう。なんて楽観視さえしてしまう。だが、ここで一つ問題が生まれる事を忘れてはならない。

「なあ、二人とも」俺は少し言い出し難い雰囲気の中、噴水の前で立ち竦む二人の魔法使いの下へ歩み寄って、「この勝負、引き分けになるんだろうけど……勝った時と負けた時の条件は互いに提示してたが、引き分けた場合どうするかってのは決めてないよな」

「……………」二人が黙してこちらを見つめた。

「夜鈴は勝つても負けても協力してくれるんだろ？　じゃあそれだけで良くないか。なんだか夜鈴が変な条件提示してたけどさ、引き分けたんだし別に」

「それはつまらないわね」言い出したのはルナだった。「わたしとしては夜鈴が何をどうしたかったのか気になるところだし……うん、今回はじゃあわたしの負けってことで」

「はあ!？」

「まあ、正直に言っちゃうとあの魔法のせいで大分魔力なくなつたのよね。さつき、あと数分でも持ち越されてたら魔力切れでわたし負けてたし」

「いやいや、だからってそんな」

プライドを賭けた勝負なんだとかどうか言っただけ、こいつ。だが、今となってはそんなことはもはやどうでもいいように、ルナはすっかりその気になっていた。

「ほら、言ってみなさいよ守崎夜鈴。貴女が勝った場合の条件……このほか兄を好きにするって言っただわよね？　わたしが許すから何でもしちゃっていいわよ？」

「おい、俺はいつからお前の……………」

「あーもう、うるさいわねえ。賞品は賞品らしく、大人しく振舞ってなさい!」

「って俺モノ扱い!？」

ふと夜鈴を見ると、何故か目を伏せていた。まるでこれから何かやり難いことでもするかのような表情。まさか、とは思うが。俺を好きにするって、どう言う事ですか夜鈴さん。

「……なら、お言葉に甘えて」

夜鈴はうつ伏せていた顔を上げて、そつと俺の頬に両手で触れながら、

「さようなら」

何か、柔らかい感触が唇の辺りに触れた気がした。

「起きてよ、ねえ。ねえってば」

うつすらと意識が覚醒する。誰かが俺を呼ぶ声が聞こえて、俺はベッドの上でごろごろと寝転がっている自分の身体をだるいながらも無理矢理起こした。はて、今思えば俺を朝っぱらから起こせるような人間がウチに存在していただろうか。俺は現在独り身であり、両親は交通事故で今はあの世。こうして残った唯一の財産とも言えるマンションの一室を使って独り暮らしなんかをしている俺にとつて、朝から誰かに起こして貰う　なんてシチュエーションは期待値すら存在していないレベルのお話なのだが。

「やっとききた!　もう、寝起きが悪いのは相変わらずじゃない」  
なんて事を考えながら、俺は目をこすって目の前の現実を直視する。

「おいおいどうしてお前が俺の部屋にいるんだ?」

そこには、朝雛紅憐が突っ立っていた。

「理由なんて後でいいでしょ。それより、瑠奈はどこに言ったの?」  
「……るな?　お前、何いってんの?」

「はあ？　もしかしてまだ寝惚けてるわけ？　瑠奈って言ったたら瑠奈でしょ？　あんたの妹の」

何を言ってるんだこいつ　俺に妹だって？　そんなのいるわけないだろ。それにるな……って、どうやって書くんだ。漢字は？　そもそも本名か、それ。

「まあ落ち着けよ紅憐。俺はそんなやつ知らないぞ。寝惚けてるのはお前なんじゃねえのか」

「……あんたまで？」紅憐はわけが解らないと言った風に、「どうしてなのよ。どうしてみんな瑠奈のこと覚えてないわけ？　あたしが夢を見ていたなんてことは絶対ないし、確かに昨日までいたはずなのに。ねえ、昴。あんた本当はふざけてるんでしょ？　ほら、早く瑠奈がどこにいるのか教えなさいよ」

意味が解らん。っつーかまずどうしてここにいるのかを説明しろと言いたい。ドアでも蹴破ったか？　こいつならやりかねないが。

「なあ、紅憐。とりあえず頭を冷やせよ。俺はふざけてなんかないし、寝惚けてもいない。何度も言うけどそんなやつ俺は知らないんだよ。それに、みんな知らないって言うてんだろ？　それならやっぱお前が間違ってる」

「……ああそう、ならもう良いわよ。どうしてだかは知らないけど、みんなが覚えてないって言うなら覚えてるあたしが見つけ出してあんたの前に突き出してやるわ。そしたら嫌でも思い出すでしょ。うん、そうよ。そうじゃないと……」

ぶつぶつ言いながら、紅憐は俺にそれ以上何も言わず部屋から出て行った。何だったんだ一体、ていうか結局どうやって中に入ったのか聞けず仕舞いじゃないか。時計を見る。時刻は朝の六時過ぎとかなり早かった。これならあと一時間程度二度寝しても問題なく登校できそうだと、そう思った瞬間、壁にかけてあるカレンダーに目がいった。

「土曜日……って、今日休みじゃねえか」

くそ、まさか休みの日にこんな朝っぱらから起こされるとは予想



外にもほどがある。紅憐め、今度会ったらそれなりの代償を支払って貰うぞちくしょう。しかし、今日が休みだとは何故だか頭の中で思っていないかった。むう、最近平日でも夜更かしが過ぎるからか、感覚が狂っているんだろうか。

……、ん？ 夜更かし？

「そっぴや、昨日は俺何してたんだっけ……」

昨日の俺　　言えば、まずは当たり前のように学校に行った。む、登校中の記憶が無い……まあ寝惚けていたのだらうけど。で、授業はと言うといつも通り暇過ぎた。そして放課後

「……あ。そっだ。思い出した」

そっ、放課後と言えば。沢宮花凜。彼女に何の間違いか突然告白されたんだっけ。あの時は相当びっくりした。すぐいなくなってしまうたから何も言えずに終わってしまったんだっか。うむ、とりあえず返事は考えておかなくてはなるまい。いやまあ、格別断る理由なんて見当たらないけどさ。願ったり叶ったりである。彼女可愛いいし、性格いいし……ちよつと天然だけど。なんだか思い出したら胸が熱くなってきた。俺も捨てたもんじゃないな。

「沢宮さんが帰る時間って、いつもめちやくちや遅かったよな。そっぴえば、それまで何かしてたよな気がするけど……あれ？ 俺、何してたんだっけ」

なんだらう、この違和感。何かがつっぱり抜けてしまったよな感覚。まるでジグソーパズルのピースが何個か足りてないよな、そんな気分になる。……おかしいな、俺ってここまで記憶力薄かったっけ。とりあえずその先を回想してみよう。そのまま沢宮さんを見つけれなかった俺は、いつものように一人とぼとぼと帰宅しながら、

「ああ、そっぴえば道ばたで紅憐と会ったっけ……。最近、遭遇率高いよなあいつも」

向こうから何かを話し掛けてきたんだっか。俺を待っていたみたいになそこにあいつはいた。そして何かを話したんだ。

『……昂、アンタ思い出した？』

紅憐にいきなりそう言われて、

『どう言うことだよ？ 俺が何を思い出すって？』

俺が答えて、

『瑠奈のこと。今までひっかかってたんだけど、ようやく思い出したわ』

また『るな』だ。そう、この時もあいつはこの名前を呼んでいた。

『あの子、昔一緒に遊んでたあの女の子よね？ 確か守崎って子。

あんたによくお兄ちゃんお兄ちゃんとか言ってる懐いてた』

もりざき　それが『るな』の正体か。

『……は？ お前、何の話をしてるんだよ？』

そう、俺は昔の事はあんまり覚えてなくて、そう言い返したんだ。だが　見えてきた。つまるところ『るな』ってのは、

『だから。昔……うん、ちょうど八年前だよ。あたし達と一緒によく遊んでたのが瑠奈でしょ？』

そう言うことか。俺が覚えていないのも無理はない。八年前に出会った少女の事なんて、ずっと近くにいなければそのうち忘れてしまうだろう。……そうか、紅憐はこの子の事を言っていたのか。理の妹だとか何とか、まだ意味の解らない部分は色々あるけど。それに、今更俺にその子がどこにいるのかなんて聞かれても解るわけがないのに、あいついきなりどうしたって言うんだ？

「まあ、どうでもいいか……」

まだ目蓋が重い。二度寝するには丁度良い時間でもあるし、このままもう一度、夢の世界に旅立ってみるのも一興だな　なんて考えながら、俺はベッドに再度寝転がる。ああ、やっぱりここが一番だ。自分のベッドで寝転がっているときが一番落ち着く。

「……さあて、寝よ寝よ。変な邪魔が入ったけど、正直まだまだ寝たりないんだよな、休日にしちゃあ、さ」

独り冗談を呟きながら、目蓋を閉じる。心のどこかで何か引つ掛かる気持ちを抑えながら、俺はまた眠りについた。

## 第二章／失うモノ、取り戻すモノ 上

宵闇に紛れるかのように、一つの路地裏にそれはあった。見るからにもう生きてはいまい、死体だった。それも、見るも無惨に身体をバラバラにされている。

「う……、なにこれ。なんでこんなところに……？」

それを一人の少女が目撃した。少女の名前は朝雛紅憐<sup>あさひなくれん</sup>。紅色に染まったショートカット。色白ではないが、その少し焼けた肌が彼女の活発さをイメージさせる。服装は私服。白いミニスカートの肘より上まで伸びたオーバーニーソックス。上着もＴシャツ一枚だけで、いかにも動きやすそうな格好だった。

時刻はまだ深夜にも至らない、夜の十時半過ぎ。近くのコンビニ付近にある路地裏に、女性の死体が散らばっていた。恐らくの第一発見者である紅憐は、そんな光景に嘔吐しかけ、だがなんとか堪える。これは、なんだと言うのだろうか。紅憐は後ずさりしながらもこの現場から立ち去ることができなかった。怖いのは当たり前だ。

彼女は基本的に気の強いほうではあるものの、こういった事態に遭遇することなんて初めてだ。足がすくんで動かない。ガクガクと震える自分の身体を両手で抱えて、悲鳴をあげないようにするのに精一杯だった。そんな中、本意ではないが 紅憐はもう一度だけ死体を見る。その死体は、よく観れば見たことのある姿形をしていた。女性だとわかったのはその身体つきからだ、それがもとはどんな格好をしていたのか解らない。……解らないけれど、想像は付く。

その顔。今はあまりにも酷くて直視すらできないが、外見的に自分とさほど歳は変わらないと思う。これぐらいなら、もしかすると自分と同じ学校に通っている子かも。そこまで考えて、ようやく紅憐は理解した。首だけ転がっているその頭部を、勇気を振り絞って見る。髪型は恐らく茶髪のショート。いや、自分よりは少し長いめくらいだろうか。そして、何よりそこに落ちているものに紅憐

は注目した 携帯電話である。

「これ、壊れて……ない？」

携帯を拾い上げると、紅憐は血塗れていながらもまだ機能している携帯の画面を見る。携帯に登録されているアドレス帳を確認すれば、これが誰なのか推測できるはずだ。ボタンを押して、紅憐は画面を覗き込む。

「……う、そ。これって、昂すはるの？」

そこには、紅憐の幼馴染である一人の少年、月城昂つきしろすけ 彼のアドレスが載っていた。だが、何故だろうとは思わない。これでようやく確信できたからだ。

「それじゃあ、やっぱり……これって……」

もう一度、最後にと死体に視線を向ける 茶色の髪、同じ年くらいの少女、携帯には月城昂のアドレス ここまで揃っていてまだ理解できないのなら、それはただの馬鹿だとしか言いようがない

紅憐は、今度こそ動かなかった足を引きずって、その場所から逃げ出すように踵を返した。

日曜日になった。俺こと月城昂は、今日も今日とて平凡な日常を怠慢に過ごすつもりだった。昨日である土曜でさえこれといって何もせずに自宅でぐーたらとのんびり過ごしていたが、今日もなんだかあまり動きたいと思えない。そこまで引きこもり体質じゃないんだけどなあ、と思いながらも、やはり面倒臭いので家にいることにした。昨日は朝っぱらから幼馴染である紅憐がやってきたりと一応他人と触れ合うことはあったものの、今日こそは誰とも関わらずに一人静かに暮らしてやるぞ、となんだか無駄に意気込みながら、俺はリビングにあるコタツ（布団を抜いて今はただのテーブルと化しているが）に身体を預けながらテレビのリモコンを持ってチャンネルを変えていた。特に面白い番組やってねーなー、と一人愚痴りな

がら、俺は時計を見る。もうすぐ昼だった。そろそろ腹ごしらえが必要かも知れない。

「よく考えたら、誰とも接しないでどうやってメシ食うんだか」

俺は基本的にコンビニを愛用している。少々高くついてしまうのはもはや気にすることはなくなった。コンビニのあの色々揃う充実感がたまらないのだ。いつも弁当を買いにいくついでにジュースやらお菓子を買ってしまうのは、無駄だとは思いつつもやめられない俺の一種の娯楽に近かった。

「よし、趣旨変更。とりあえずコンビニには行く」

そう呟いて自分に納得させながら、俺は立ち上がる。服装は特に気にしないが、さすがに寝巻きのまま外に出るわけにもいかないの  
で、適当にその辺に散らばっている服を着ることにした。なんとい  
うか、この辺も随分雑である。鼻歌交じりに玄関から外へ出ると、  
空は快晴でなかなか気持ちのいい昼間だった。七階から外を見下  
ろすのも、高すぎず低すぎずな感じで丁度いい。

「ふはは、見ろよ。まるで人がゴミのようだ」

冗談を独り言で呟いてみるが、もちろん突っ込んでくれるような  
相手に期待するわけではない。というか独り言は一種の癖でもある。  
「……なに昼間っからばか言ってるの、あんた」

「うおわっ！　なんだお前、いたのか」

唐突に隣から突っ込みが入ったので、まさかの事態に昂はびつく  
りして飛び退いた。我ながらリアクション酷いな。案の定、呆れ  
たような表情でこちらを睨む少女は、無言だった。というか、

「なんでお前がここにいるんだよ、紅憐」

何故だか解らないが、幼馴染の朝雛紅憐がそこにいた。

「いてもいいでしょ、別に。……それよりあんた、ちょっと大事な  
話があるんだけど。今、ヒマ？」

「大事な話……？　俺、紅憐フラグを立てた覚えはねーんだけど」  
「もちろんあたしも立てられた覚えはないけど。ていうか、ちょっ  
と真面目な話だから。冗談とかはノーサンキューで宜しく」

真面目な話　だつて？　昨日の続きなら遠慮したいものだが。  
覚えてないものは覚えてないんだからな。しかし、ここまで真剣な  
顔で言われると断るに断れない。仕方ない、コンビニ行きは後回し  
にして、先にコイツの話を聞いてやるとしよう。

「解ったよ、とりあえず中入れ」

「うん。悪いね」

「いいよ、別に。俺とお前の仲だろ。つーか、どうせ俺が入れなく  
ても勝手に入ってくんだろ。昨日みたいに」

「あは、ばれてた？」

「そりゃな。俺を甘く見るな」

そんなやり取りをしながら、俺は紅憐をリビングに迎え入れた。  
茶でも出してやろうと思ったが、気が付けば冷蔵庫の中身が空っぽ  
だというのを忘れていた。最近買い溜めしてなかったっけ。

「……、それで？」俺は早くコンビニに行きたい精神で、急かすよ  
うに、「大事な話つてのはなんだ。出来るだけ簡潔に解りやすく話  
してくれ」

「うん。……あのさ、昨日なんだけど。あたし、夜中に散歩がてら  
外出歩いてたんだよね」

「まあ、それぐらいなら俺でもやるけど。なんだ、誰かに襲われた  
りでもしたのか？」

「違うつて。あたしじゃなくて、その」紅憐は何か言い難そうに、  
スカートのポケットから一つの携帯電話らしきものを取り出した。

「これ。見覚え、ない？」

「……ん？　ああ、これウチのクラスの知り合いが使ってるやつと  
一緒だな。それがどうした？」

「これがさ、落ちてたんだよね。……その、路地裏に」

「路地裏あ？　なんでそんなところに　　って、おい。待てよ、そ  
れ……血まみれじゃねえか！」

そこで、俺は初めて事の重大さに気が付いた。知り合いが使って  
いたのと同じ携帯が、血まみれになっている。紅憐はそれを路地裏

で拾った。どうして路地裏なんか？　いつの間にか、紅憐の手が震えていた。

「それで、さ……見ちゃったんだよね。あたし、その……そこで」「何を、見たってんだよ……？」

嫌な予感がする。これ以上聞きたくない　そんな悪寒さえしてくる。

「歩いてる途中さ、悲鳴みたいなのが聞こえたんだよ。女の子の悲鳴だった。だから何だろうと思って、気になったからその声がした場所まで走ってみたんだけど……」

「そこが、その携帯を拾った路地裏だったわけか」

「そ。……でさ。落ちてたのは携帯だけじゃなかった。そこには」  
紅憐は歯をくいしめるようにして、俯きながら、

「沢宮花凜さわみやかりんの死体があった」

ただ、そう口にした。

「……な、なんだよ。それ。まさか、あの沢宮さんが？　証拠は……」  
「もう解ってるでしょ、昂。それが証拠だよ。沢宮さんが持っていた携帯。中、見たんだよあたし。ちゃんとあんたのアドレスが入ってた。他も確認して、沢宮さんのだってことはもう解ってる」

「嘘……だろ？　沢宮さんが、死んだってのか。なんで」

「解らない……！」　紅憐はもはや泣きかけていた。「解らないけど、でもこれは事実なんだよ。死体はあたしと同年くらいの女の子だったし、髪だって茶色だった。長さだって沢宮さんと多分おんなじ。全部が全部、その死体が沢宮さん本人だってことを物語ってたんだよ！」

なんてことだ。よりもよって、身近な人が　沢宮さんが、殺されるだなんて。

「それ、どんな死に方だったんだ。まさか、例の……」

「うん。間違いない……あれは最近よく噂されてる連続殺人事件の

死体の特徴だった」

「……警察は？ もちろん、警察はもう動いてるよな。それならもしかすると沢宮さんじゃないって結果が出ているかも知れない」

「うん、そうだね。そう思っで、あたしも今朝もう一度見に行ったんだよ。見に行ったんだけど」紅憐は心底悔しそうに、「そこには何もなかった。昨日見たものの全部が全部消えてたんだよ。場所は確かだし、何よりそこで拾ったこの携帯が、事件があつたことが本当だつて証明してる。目撃者は誰一人としていない。……あたし以外は」

「おいおい、じゃあ……死体がどこへいったのかは置いて、確かめる以前に『なかつた事』にされてるってことか？」

「解らないよ。誰がどう言う意図で死体を消したのかはわからない。でも少なくとも警察は何も知らないはずだよ。事件として何も騒ぎになってないし……。だとするなら、やっぱり犯人なんじゃないかとあたしは思う」

「そうだとしても……色々とおかしくないか。今までは死体を全部放置していたのに、今回に限って死体を消すだなんて。しかも、お前が見たつていうんなら少なくとも犯人は一回その場からいなくなつて。一度離れてまた戻ってくるなんて、効率が悪い。消したのは犯人じゃないかも知れない」

大体、どうして消したのかは解らないが そんな事をする理由が思いつかない。

「……てことは、だ。もし犯人が死体を消したんだとするなら、犯人はこの犯行を知られたくなかつたつてことになるよな。そして、偶然にも目撃したのは紅憐一人だけ……つて、おい待てよ。それじゃあ……！」

「そうだよ」紅憐は震える声で呟く。「沢宮さんの次に狙われるのは、この携帯を持つてゐるあたししかない」



平穩に過ぐすはずだった休日最終日、なんとも厄介なことになってしまった。幼馴染の命が危ないかも知れない。それは、さすがに見過ごすわけにはいかない。俺だって紅憐は大事だ。てなわけで、紅憐をどうしたものかと考えていたのだが、

「一通り落ち着くまで、あたしここに置いて貰うから」

「……はい？　なんだって？」

「だ・か・ら！　さすがにあたし一人じゃ心細いつてんの。こう言うときに頼りにならなくてどうするわけ、昂」

「あ、いや、もちろん俺にできることなら何でもしてやるが。それにしても、まさかお前……ここに泊まるとか言い出すんじゃない」

「そうだけど？」

ぬああ！　と思わず身体を反らせて頭を掻きむしる。なんだそれ、まさか女の子を連れ込んで泊まらせるだなんてこと、人生で初めてかもしれないのに。その相手が幼馴染で腐れ縁な紅憐だなんて……俺の初体験……。

「……あんた、なに考えてんのか知らないけど。別にそう言うんじゃないんだから、解ってるよね？　ただ、あたしだってあんたと同じで一人暮らしだし、命の危険があるかもしれないってこの状況、誰かと一緒にいないと心細いの。一応あたしだって女なわけだし」

「一応って自分で言うなよ。まあ、確かに一応だけど。一応」

「連呼すんな」

そう　紅憐も俺と同じで一人暮らしなのだった。若い女の子が一人暮らしもどうかと思うが、紅憐の両親は仕事で忙しく、ほとんど海外で暮らしているような状態らしい　まあ金には困らないようなので、そこは俺と違う部分なんだが。

「でもさあ。お前、学校はどうすんだよ。明日からはまた平日だし、さすがに行かないわけにもいかないだろ」

「それはそうだね。じゃあ、あんたちょっと一緒にあたしの家まできてよ」

「……へ？」

「一応、用心としてあたしの家よりはあんたの家にしたほうが安全だとは思うから、今からあたしの家まで色々取りに行くって言うてんの。学校だつてさすがに行かないわけにはいかないし」

「……なあ、紅憐」

「あによ」

「お前、もしかして……怖いのか？」

「……」紅憐は、無言で俺の顔を睨みつける。頬が少し紅潮しているようだった。「あのさあ。あんたがあたしをどう言う風に見てるのか知らないけど、さすがに怖くないってほうが神経どうにかなってんじゃないかって疑うよ」

「いや、紅憐ってなんか怖いもの知らずみたいなイメージがあったからな。なんかちよつと意外っつーか。可愛いところあるじゃん」

「なっ……いきなりなに言い出してんの！」

「ん。いや、幼馴染の意外な一面に驚いてんだよ」

「……普段そんな風に見られてたなんて、あたしちよつとショックだよ」

「なんでショックなんだ？ 別に、見たままだろ」

「今のでショック倍増」

「意味わからん」

なんてやり取りを繰り返していると、紅憐が不意に立ち上がる。

「もういいや。とりあえず行こうよ。行くなら早めのほうがいいし」

「ああ、そうだな。そうだ、仲良くおてて繋いでやろうか？」

「それ本気？」

「いや、冗談だ」

「……昂、きらい」

「知ってる」

「……。ほら、行くよっ！」

怒ったのだろうか、紅憐が踵を返して一人先に玄関まで歩いて行く。おいおい、一人で行くのが怖いから俺と一緒に行くんじゃないか

ったのか。……やれやれ。しばらく忙しくなりそうだ。

そんなこんなで間を飛ばして紅憐邸。俺のマンションとは違い、紅憐の家はなんと一軒家です。これを一人で使われてるなんて、なんと贅沢なんでしょうこの女。まあでも、こんな広い家に一人で暮らすのは結構寂しそうではあるけど。本人いわく、もう慣れたらしいが。俺は玄関の前で待機。紅憐はそそくさと家の中へ入っていつて、自分の荷物をまとめている最中である。うーん、ヒマだ。そんな感じで呆けていると、ふとどこからか視線を感じた。辺りを見回してみる　が、どこにもそんな人影は見えない。

「……気のせい、か？」

「気のせいじゃないわ、後ろよ後ろ」

うわあ！　と俺は本日二回目のびっくりリアクションを取る。なんだ、今日はこうして誰かに驚かされる日なのだろうか。言われるがままに後ろを振り返ってみると、そこには金髪の少女が突っ立っていた。……誰だコイツ。

「何よその化け物でも見るかのような反応と表情は。失礼ね」

「いや……てか、あの。お前、誰？」

「む、お前って呼ばな　あ、いやそつか。そういえばそうね」少女は一人で納得したように、「まあ、いいわ。とりあえず今日は忠告にきたのよ『お兄さん』？　例の連続殺人事件の犯人は貴方の身近にいるわ。多分へらへらして貴方と会うでしょう。いいえ、もうすでに会ってるかもね。でも、気を許してはだめ。いい？　今回、もしかすると一番危ないのは貴方かも知れないんだから」

何を言ってるんだコイツは。連続殺人事件　って、まさか紅憐が巻き込まれてしまった事件のことか？

「どう言う意味だよ、それ。なんで……お前がそんな事を？」

「さあ、ただの気まぐれよ気まぐれ。守崎さんにはもう関わるなっ

て言われてるけど、さすがに見捨てられなかっただけよ。ま、何も覚えてない貴方には言っても無駄だろうけど、ね」

意味わからん いや、それより気になる事がある。

「お前いま守崎って言ったか？ そいつのこと何か知ってるのか」

「え？ 貴方、守崎さんのことは覚えてるわけはないか。うん、まあ今は知る必要のないことよ」

「おい、ちよつと待てよ！ 俺の知り合いがそいつの事を探してる。『るな』ってやつなんだ。俺も知ってるらしいけど思い出せないから、もしお前が知ってるんなら何か」

俺がそこまで言うと、少女は少し寂しそうな顔をした。それがそう言う風に見えたのは、ただの偶然かも知れないけど。

「……もう、会うことはないでしょうね。貴方と『るな』も、『守崎』も。貴方はこれ以上、こちら側に踏み込んでくるべきじゃないのよ。大人しく、いつも通りの生活をしていればそれでいいわ。危ない目に遭いたくなければ ね」

それだけ言って、金髪の少女は去っていった。どうしてかは解らないが、俺はその後を追う気になれず、ただ呆然と立っていることしか出来なかった。

「お待たせー、昂。ん、あれ？ どうしたの？」

時間差で、紅憐が自宅から荷物を引っさげて戻ってきた。さっきの少女は、いつの間にかもう視界には存在していなかった。まるで魔法でも使ったかのようにいなくなってしまった。

「……いや、何でもねえよ。それより帰りコンビニ寄っていいか？ 俺、そっぴやコンビニいくつもりだったのすっかり忘れてた」

「へ？ 別にいいけど。……んん？」

紅憐がおかしいと言わんばかりの表情で俺の顔を覗き込んでくるが、構わず俺は近くにあるコンビニ目指して歩き出す。

「あ、ちよつと待てよ！」

さっきの金髪の少女 あいつが言っていた言葉が何故だか胸の底に引っ掛かっていた。普段なら意味わかんねえ、で済むところな

のだらうけど　今の俺には、何故だか彼女との邂逅が何かの兆しのように思えて仕方がなかった。

俺と紅憐はコンビニで適当に買い物を済ませると、そのまま俺の自宅であるマンションまで足を運んだ。とある高級マンションの七階、そこに俺の自宅となる部屋がある。エレベーターで七階まで上がり、部屋に帰ってきた俺は、とりあえず紅憐に部屋を明け渡すことにした。そこは、以前まで両親が使っていた部屋。両親が交通事故で死んで以来、ずっと空き部屋として残しておいた部屋だ。何か使う気になれなくて、ずっとそのまま放置していた。このままずっと使わずにいらればそれで良かったが、今は事が事だけに仕方がない。一度決めたことはあまり変えたくはないけれど、今回ばかりは折れるしかないだろう。だが、そんな俺の事情を紅憐は知っていたのか、

「あたし、そこ使わないから」

ただそれだけ言つて、俺の部屋に居座りだしたのである。

「ちよ、ちよつと待て。空き部屋があるんだから、お前はそつち使えばいいだろ？　なんでいちいち俺の部屋なんか」

「一応、あたしも命狙われてんだよ？　そりや本当に狙われてるかはわかんないけどさ。できるだけ、ほら、一緒にいたほうが安全じゃない。それに、朝はいつも寝ぼすけなあんたが最近ようやく瑠奈のおかげで早起きして学校に来るようになったのに、また明日から自力で起きないといけないんだから。それなら……あたしが一緒にいればすぐに起きれるでしょ？」

何故か照れるように言う紅憐。まあ、さすがに幼馴染と言えど男と女が同じ部屋で過ごすのは紅憐でも気負いするのだろう。うーん、そう言うところは女の子っぽいんだな、こいつ。

「んじゃ、しゃーないから俺は隣のリビングでいい。お前はこの部

屋使えよ。さすがに一緒の部屋はだめだろ」

「……」紅憐が驚いたような顔でこちらを見る。

「な、なんだよ。何か俺がヘンなこと言ったか？」

「昂があたしにこんなに優しくするなんて、意外だなと思って」

「俺はいつだって優しいんだよ。お前は特別なだけで」

「……ふうん。それじゃ、あたしと比べてあんた沢宮さんにはどうだったの？」

沢宮さん。そうだ、俺は彼女に告白されていた。金曜日の放課後突然に。だと言うのに、返事も出来ずに死んでしまったなんて。くそ、まだ本当の事は解らないとは言え、胸が苦しくなる。

「あ……、ごめん。さすがに今は……失言だった」

「別にいいさ。それにまだ死んだって決まったわけじゃないんだ。悲しむのは早い」

紅憐ではなく、自分自身に言い聞かせるように俺はそう言った。

「……そうだね。まだ早いよね。あたしが狙われるかもしれないって言うのも。……なんか、ごめん」

「何がだよ。今度は何の『ごめん』だ？」

「あたしがこうやってあんたに頼ってること。今思うと早計過ぎたかなってちよつと反省してる。まだ自分が狙われるかなんて、考えすぎだったのかも知れないし……」

ベッドの上に腰掛けながら、紅憐は俯いて呟いた。なんだ、こいつまだそんなこと気にしてたのか。

「おいおい、今更何言ってるんだよ……。あのなあ。お前、何で俺がこうやって助けてやったのかわかってんのか？」

「……え？」

「お前が怖いって言うから助けてんだよ。狙われてるかどうかなんてのは些細な問題だろ。お前がそうかも知れないと思って、恐怖して、俺を頼ってきたなら俺は、お前を助けてやる。それが普通だろ。言うなら、俺とお前の仲だしさ」

俺がそれだけ言つと、紅憐は今度は呆然と俺を見詰めていた。何

か、今日の紅憐は表情の入れ替わりが激しい気がする。

「そつか。……うん、あたしが心配性過ぎたね。確かに、昴はそう言うやつなんだった」

「そう言うやつってなんだよ……。ま、解ったんならもう気にすんな。お前も俺も独り暮らしだし、別にすぐ出て行けなんていわねーから」

「うん、ありがと」

「おう。……いつもそうやって素直に礼が言えるようになれば、ちよつとは可愛くなると思うんだけどなあ」

ゴツン、と右ストレートが飛んできた。

「一言多いんだよ、昴は」

……、俺なにかまずいこと言ったっけ？

時刻は昼を過ぎ、現在三時を超えていた。いわゆるおやつタイムと言うやつで、紅憐はなんか知らんがコンビニで買ったらしい菓子をどばどばとテーブルの上に広げ出した。っておいちよつと待て、いくらなんでもこの数は異常だろ。

「ゆづに二千は越えていると見た」

もちろん金額が、だが　そんな俺の呟きに、紅憐は唇を尖らせながら、

「そんな高くないよ、失礼だねー。千五百円ぐらいだもん」

「……それでも買いきすぎなのは変わらんぞ」

「あたしはいつつもこれくらい買うんだけど。なに、昴ってお菓子嫌いじゃないでしょ？」

「いや、好きな部類に入るが。……俺が言いたいのはだな、ここまでするってどうするんだと言うことだ」

「食べるに決まってんじゃない。当たり前だよ」

「いや……」

もう何も言うまい。ようするに、この幼馴染の少女はお菓子が大好物であらせられるのだった。ポテトチップスの袋を拡げて、テールブルの真ん中に置く。次にクッキーの箱を開けて並べ、一緒に買っていたミルクティーのパックをあけてコップに注ぐ。二人分。

「ほら、あんたも食べていいよ」

「ぬ、気前がいいな。それじゃ遠慮なく」

バリバリボリボリと菓子をむさぼる二人の男女。ううん、こんなのは幼少時代だけだと思っていたけど、こうして久しぶりに紅憐とこんな時間を過ごすのも悪くはないかもしれん。

「あ、それはだめだからね。あたしの取っておきなんだから」

ふとショートケーキに目がいったのだが、瞬時に紅憐はそれ自分のもとに引き寄せた。そんな守るようにしなくても取らないって「それにしても、紅憐っていつもこんな面白い物してるのか？俺もコンビニは好きだけど、ここまではいかないぞ。さすがに」

「うーん、時によりけりかな。たまにこうしてお菓子食べたくなるときがあるんだよ。一種の衝動ってやつ。あんたもない？」

「いやまあ、解らなくはないんだけど……」

かく言う俺も、コンビニで無駄食いするのは大好きだった。だから何というか、こういう異常な光景を目にしても 突っ込みたくても突っ込めない微妙な立場なわけで。しかし、さっきまでの危惧はどこへやら、紅憐はすっかりいつもの調子に戻っていた。まあ、それでこそ朝雛紅憐ではあるんだけどさ。

「そっぴや、お前の家の前で待ってるときに女の子に会ったんだが」  
ふと、俺は思い出したように呟く。

「は？ 女の子？ ……誰よ」

「ああ、長い金髪のやつでさ。そいつ、『守崎』って名前を知ってるみたいだった」

「……あんた。それ、真面目に言ってるわけ？」

「ああ、そりやな。嘘ついてどうする」

沈黙。紅憐が、まるで呆れたかのような表情で俺を見る。



「その子……たぶん、瑠奈だよ」

「え……？　どういうことだよ？」

「金髪のロングだったんでしょ？　それなら瑠奈だよ。あんたは覚えてないんだろうけど、あたしは覚えてるから間違いない。でも、まさか本人を目にしてあんたが思い出さないなんて……どうしたのよ、昴。頭でも打った？」

いや、別にそんな記憶はないが　しかし、まさかあれが『るな』だったなんて。もう少し引き止めておけば紅憐と会わせてやれたのか。ちよつと後悔する。

「でもさ、なんで紅憐はあの子……『るな』に会いたかったんだ？　「なんでって……。一昨日さ、急に瑠奈がたしに会いにきてこう言ったんだよ。『もう二度と会うことはないわ。貴女も全部忘れることになる』って。それだけ言っていなくなっただよね」

なんだか意味が解らないな。全部忘れる事になる、とか言つて、紅憐はこうして覚えているじゃないか。

「それで、気になって探してたんだよ。瑠奈のことしってる知り合いか、あんたのクラスメイトに話も聞いたんだけど　おかしいのはここから。皆、ほとんどが彼女のことを覚えてなかった」

「俺も含めて、か」

「うん。あたしだけしか覚えてないなんておかしいでしょ。だからもつと気になって、あんたの家までもおしかけたけど　あんたも覚えてなくて、もう行き詰まり。それからもちよつとは探してみたけど　」

そして今日　その『るな』が俺の前に現れた、か。どうして俺なのか。紅憐だけが覚えているなら、それこそ紅憐の前に現れるべきではなかったのか？

「でも、まさかあんたに会いにきてたなんてね……。もうちよつと早く荷物用意してれば、あたしも会えたかもしれないって思うと、ちよつと残念だな」

「『るな』ねえ……。でもさ、そいつの話ぶりからするに、『るな』

と『守崎』は別人っぽかったんだが。そいつは守崎のことさん付けで呼んでたし、他人じゃねえのか？」

「つまりあんたと会ったのは瑠奈じゃないってこと？ それはないよ昂。だって金髪のロングだなんて瑠奈ぐらいしかこの辺にはいないでしょ」

「まあ、確かに……あんな格好したやつは見た事もないからなあ」

「とにかく、まだ瑠奈がいるって事が解っただけでもいつか。いなくなっちゃたのかと思ってたけど、まだどこかにいるなら、きっといつかまた会えると思うし」

「そうだな。この町、案外狭いし」

そんな会話をしているうちに、気が付けば目の前の菓子が全滅していた。おいおい、俺全然食ってないんだけど。紅憐食うの早すぎだろ。

「さーで、それじゃあたしは最後のメインディッシュを戴くとするかな」

とか言いながらすでにショートケーキも開封しだすし。

「……なにじろじろ見て。食べたいわけ？」

「いや、別に」

「あげないよ？」

「だから別にいらねーよ」

「なに、強がっちゃって。そんなに欲しいんだ」

「いらねーって言ってるだろ……」

「しょうがないなあ。一口だけだよ」

とか言いながら、フォークで適当に取ったケーキの一部を俺に差し出してきた。

「ほら口開けなさい」

「……なあ、紅憐。俺とお前はいつから恋人同士なシチュエーションを行えるようになったんだ？」

「あーん、って言ってみ。ほらほら」

完全無視だった。

「……お前、もしかしてからかってる？」

「ほら、あーんって言ったら食べさせたげる」

こいつ、絶対にからかってやがる。今そう確信した。

「……あーん」

「うわ！ほんとに言った！ 昂おもしろっ！」

「あの、殺してイイデスか？」

「まあ、ちゃんと言えたから食べさせてあげよう。ほら」

ぱく、とフォークを口に突っ込まれた。……む、美味い。コンビ

ニのケーキとはいえ、侮れん。

「おいしいでしょ？ これ好きなんだよね。いつなくなっちゃうのか心配でさあ」

そう言いながら、紅憐は残りのケーキをそのままフォークで食べ始めた。おい、それ一応俺が使ったんだけど。俺の口の中に突っ込まれたんですけど。あの、紅憐さん？

「うーん、おいしいっ」

お構いなしだった。なんか無駄に意識してる俺がばかみたいに思えてきた。つまるところ、こいつにとってやっぱり俺はただの幼馴染だっわけか。ふうん、やっぱりなんだか面白くない。

「なあ、紅憐」俺はなんとなく、からかい返すつもりで、「お前ってさあ、好きなやつとかいるの？」

ぶは！ と、紅憐が俺の言葉を聞いた瞬間、口の中のケーキを吐き出した。おいおい、汚いな。うう、と紅憐はティッシュで勿体無さそうにテーブルの上のケーキを吹きながら、

「な、なんでいきなりそんな話になるわけ？」

「いや別に。ちょっと気になったただだよ。で、いるのいないの」

紅憐は少しの間無言で、「……いるっちゃいるけど」

「え、いるのか。マジで？ お前……それマジ？」

「……なに、いて悪いわけ？ あたしだって恋愛ぐらいするもん」まさか本当にいるとは思ってなかった。いや、ちょっとは思ってたけど、いやでもあの紅憐が　なあ。正直有り得ないとまで思っ

てた。

「いや悪くはねーよ。ちょっと意外だったただけだ。で、そいつってどんなやつ？」

「どんなやつ……って、そうだなあ」紅憐は少し考えてから、「全然優しくなくて、勉強も運動もあんまり出来なくて、それでいて他人の想いに鈍いんだよね。それも異常なぐらいに」

「はあ？ 何それ、最悪なやつだな。そいつのどこがいいんだよ」  
ちよつと紅憐の好みが心配になってきた。幼馴染として、それはちよつと応援できない相手だと思う。いやまあ、紅憐の好みは元から知っていたから、それこそ最初から応援すら出来ないっていう特殊な好みだったんだけど。

「そうだねえ。なんで好きなんだろうねー。ぶっちゃけわかんないかも」

「……おいおい、なんだそれ」

「でもね」紅憐は少し誇らしげに、「その人は、本当に大事なところでは絶対にあたしを見捨てたりしないんだよ。あたしが助けてっていったら、絶対助けてくれる。いつもは優しくないのに、大事な場面では凄く優しくしてくれるんだよね」

なるほど、悪い部分だけではないらしい。そいつはきつと不器用なんだろうな　とか思いながら、

「ふうん。俺にはよく解らねーけど、そいつはきつと本当はお前のこと大切に思ってくれてんじゃねえか。それならいいだろ。きつとそいつはお前を大事にしてくれそうだし」

幼馴染として、そして何より普通に考えて　まあ、紅憐を任せられるかは置いておいて、紅憐はきつと心底そいつのことを慕ってるんだろう。なんだか、少し寂しい。ついでに悔しかった。

「うーん、まあそうなのかもね。でもま、鈍いところだけはなんとかして欲しいって思うよ、あたし」

「そいつが鈍いなら直接言ってやりゃいいんじゃないか。紅憐が、そいつのことを本当に好きなら……きつと、応えてくれるだろ。目

の前の壁なんて気にすんなよ。お前ならどうとでもできると思うぜ」

言いながら、俺は少し後悔した。何故だか、紅憐をそいつに取られてしまうような気がして。別にこいつをどうか思ってるわけじゃないけど　　なんだか、今までずっと幼馴染として接してきたこいつが、色んな意味で俺の前からいなくなってしまういそう。だが、そんな俺の気持ちを知って知らずか、紅憐は少し悲しそうに、

「実はさ、ちよつと前に告白したんだよ。まだ返事は聞いてないけど……多分、きつとその人はあたしを受け入れてくれない。どれだけ優しくても、大事に思っていてくれても、それが、その人の本質なだけだから。たぶん、誰にだって同じように優しくする。あたしを恋愛対象としては、きつと見てない」

それは、何故か確信に近い言葉だった。どこのどいつかは知らないが、紅憐をここまで思い込ませるやつがいるなんて。もし俺がそいつと会うことがあるなら、一発殴ってやりたい気分だ。俺に殴れる資格はないけど。まあでも、恋愛対象として観れない　　つてのは、あながち解らないこともないけど。

「はいはい、湿っぽいあたしの恋愛話は終わり！　こういう話は得意じゃないんだよ、それぐらいあんだって知ってるでしょ」

「まあな。からかい返してやろうと思ったただけなんだけどさ。まさか真面目に受け答えされるとは思ってたかった」

「……しかし、あんたもあれよね」すると、突然紅憐が呟いた。

「ほんと、相当鈍いんだから」

「……はあ？」

「何でもないよ。さつとと、このゴミ片付けなくちゃ」

それだけ言つて、紅憐はテーブルの上に散らばっている菓子の残骸を片付けはじめた。……俺が鈍いつて？　いやまあ、確かにそんな気もする。沢宮さんの気持ちに気付けなかった辺り、俺も紅憐の想い人同様に鈍いやつだったことなんだろうな。他人のことは言えないってことか。

そして、夕日も沈み始めた頃　俺と紅憐は夕食を済ませ、交代で風呂に入ることにした。どうやら、紅憐は着替えも一式持っているらしい。あの大荷物はそれか。いやしかし、それ以外にも色々入ってそうだけど。

「んじゃあたし先に入るから。まああたし結構はや風呂だし、すぐ出てくるからちょっと待っててねー」

それだけ言い残し、紅憐はバスルームへと消えていった。覗くなとかそういう釘を刺すようなことを言わない辺り、俺もそれなりに信頼されているんだろう。期待には応えなければならぬ。

「さて、何すっかな……」

今のうちに、リビングで寝れるように準備しておくのも悪くはない。そう思い立った俺は、自分の部屋にある予備の布団と毛布を両手に、リビングへと戻った。戻って、

「……えっと」

そこには、黒いフードを被った不審者がいた。

「ど、どろぼ　むぐっ！」

「落ち着いて」言いながら、黒フードの不審者は俺の口を手でふさいだ。「私は怪しいものじゃない」

「……ぶはっ。いや、そう言うやつが一番怪しいんですけど……」

するり、と黒いフードが脱がれる。その下には、見覚えのない少女の顔があつた。

「ルナが昴に会ったと言ってたから、何かされてないか見させて」

「……はあ。ん、『るな』……？　あの、金髪か？」

「……」こくり、と頷く黒髪の少女。

ふむ、やはりあの金髪は『るな』だったわけか。ということは、こいつは一体誰だ？

「見たところ、何もされてはいない……良かった」

何もされてない、って　そりゃ、ただ話ただけだし、特に何

かされた覚えはないけど。あれ？　そういえばコイツ、俺の名前を呼ばなかったか？

「本当は、もう関わりたくはなかったけれど、事態が悪化しているから。仕方ない。貴方の記憶を戻す」

「なんだって？　俺の記憶……？　『るな』ってやつと何か関係があるのかよ」

「本来、私の『断片忘却』は一時的なものでしかない。だからいずれは思い出す。それを早めるだけ」

こちらの話はまったく無視のようだった。

「これ」と、黒髪の少女は鈴を取り出す。「この音が合図になっている。私は、この音色によって対象に様々な魔法を掛ける事ができる魔法使いだから」

ちりん、と。

目の前で鈴を鳴らされ、ふと思い出す。

「……夜鈴、か？」

「……」こくり、夜鈴は頷く。

「おいおい……なんだよ、どうして俺の記憶を消したんだ。いや、そんなことは後回しでいい。なんでいま俺の記憶を戻したんだ？　ルナとなにか関係あるのか」

俺は一瞬にして全てを思い出していた。義理の妹だったルナミスⅡサンクトリアのことも。偶然助けた魔法使い、守崎夜鈴のことも全て。

「と言うよりは、私達のことに関係している。貴方と今一緒にいる、朝雛紅憐についても」

「紅憐だつて？　あいつが何かあるのか？」

「気付いているはず。彼女は、昨日」  
俺ははっとする。

「昨日って、あの連続殺人事件か？　そうだ、確かルナはそれを追

って……」

「そう。そして、その犯人に目星がついた」

「何だって？ 本当なのか、それ」

犯人 目星がついた、ってことは、誰が犯人なのか解ったってことだ。それは一体、誰だと言うんだ。

「詳しい事は、別の場所で話す。今は、ここには危ない。ここから出るべき」

「いや……そうは言うけど、俺は紅憐と一緒にいてやらないといけないし」

俺はそこまで言っで、気付く。何故、ここには危ないのか。ここから出る必要があるのかを。

「……犯人がここにいるから。貴方は危ない。早くここを出るべき」  
夜鈴がそんな俺の心境を察してか、具体的な言い方で呟く。まさか。本当は、真実は そうだと言うのか？

「いま起こっている連続猟奇殺人事件、その犯人の名前は」夜鈴は冷静に真剣な面向きで、「朝雛紅憐」

少女 朝雛紅憐がバスルームから出た時、

「……まさか、感付かれた？」

そこに、月城昴の姿はなかった。バスタオル一枚を胸元に巻いているだけの格好で、彼女はち、と小さく舌打ちする。まさか、このタイミングで連れ去るなんて。誰が いや、そんなのはもう決まっている。瑠奈しかない。彼女は今日、一度だけ昼に昴と会っているようだったが、その時に何もなかったと言う事は恐らくまだ気付いていなかったのだろう。そして、ようやく気付いた彼女は

この絶好にして絶妙、絶対なタイミングを計らって昴の奪取に成功したってわけだ。

「こうなることは予想していたけれど……まさか私に気付かれずに



連れ出すなんて。なかなかやるじゃない。こんなことなら、もつと真剣に探しておくべきだったかな。結局、本当に『守崎』の人間なのか何も解らず仕舞いだったし」

紅憐はバスタオルを剥ぎ、荷物の中に入れてある私服に着替える。着替えている途中、彼女は少し思考した。

（……やっぱり覚えてるってことはあの人に話すべきじゃなかったのかもしれない。でもそうでないと聞き出せなかったのも事実結局、本当に何もかも忘れさせられていたみたいだけど。瑠奈もなかなか周到なことを……いや、ただたんに用済みになったただけだったのかもしれない、か）

それが何故今になって？ やはり、ことの真相に気付いたいや、存在しない事実に気付いた上でのとりあえずの安全策、といったところだろう。最悪、盾として使うことを恐れたのかも知れない。確かにそういう用途もあるだろうけど お生憎さま、私はそんなことのために彼の部屋に潜り込んだわけじゃない。なんとか連れ去ってことの有様を説明するつもりだろうけれど。彼がはいそうですかと信じ込んでしまう人間ではないってことぐらい、私だって解る。彼はそういう人間なのだ。身内にとても甘い。だからこそ好都合。私は余裕を持って、高見の見物とさせてもらうのもこれまた一興だ。所詮、下等な魔法使い程度に私の策を見破ることなんて不可能なんだから。

「はいそうですか、……って信じるんでも思うのか？」

俺 月城昂は、自宅のマンションから少し離れた場所にある西条公園のベンチに座りながら、隣で話す義理の妹 ルナにそう返答した。彼女が宣告した内容はこうである。犯人は朝雛紅憐。土曜の夜 近くで悲鳴を聞きつけたルナが、とある路地裏の一角にて死体処理をしている朝雛紅憐の姿を発見。処理の方法は 焼却。

ライター等の火器は使用していない　それだけ説明して、ルナは言い放った。

「朝雛紅憐は魔法使いよ」

「……、どうということだ？」

「死体をまるごと、消し炭残さず燃やし尽くすなんて普通は不可能。それを成し遂げるにはどうあがいたって『魔法』の力が必要だわ。わたしが見た限り、あれは魔法を使ってでしか有り得ない。この魔法使いが言ってるのよ。まず間違いないと思ってくれていいわ」

俺が信じられないと言った顔でルナの言葉を聞いていると、補足するように目の前に立つ守崎夜鈴が続けた。

「五大元素の一つ、『火』を操る魔法使い。それが恐らく朝雛紅憐だと思われる」

「おいおい、待てよ。いくらなんでも話が突拍子過ぎる。紅憐が魔法使いだつて？　俺だつて一応あいつの幼馴染だから解る。魔法だなんて大それたこと、紅憐ができるわけがない」

突然俺の部屋までやってきた夜鈴に連れられこんなところまできたのはいいものの、話された内容はにわか信じ難い内容だった。

「突拍子なのは仕方が無いでしょう。貴方の場合、魔法使いが絡んでるだけでどんな話でも突拍子無く感じてしまうのだろうし」

「いや……そりやそうだけど。でも紅憐が犯人だなんて、それはないって。大体、あいつはその犯人とやらの狙われているからって俺のところまで逃げ込んできたぐらいなんだぜ？」

「逃げ込んだ　ね。それが、もし犯人から逃げるためではなく、ただ単に身を隠すためだけなのだとしたら？」

「どう言うことだ。身を隠す　つまり、紅憐が犯人だったとしたらの話か。」

「昼間にわたしと会ったときあるでしょ？　あの時点では確定ではなかったのよね。確かに魔法使いだという証拠がそれだけでは、断定するのも難しいから。でも――」

「ちらり、とルナは夜鈴に目配せをする。それに応えるかのように、

黙って頷いた夜鈴が話を続けた。

「……『朝雛』は、『守崎』と過去に接点がある。それは、魔法使いの家系としての接点。私自身、昔に朝雛紅憐と会った事もあるから覚えていた」

「夜鈴が、紅憐と……？ 本当なのか、それ」

こくり、と頷く夜鈴。

「厳密に言えばそれだけではない。『月城』『沢宮』『波上』これらを含む、計五つの家系がそれぞれ過去に接点を持っている。魔法使いの家系、またはそれに関わる存在として」

月城？ 俺の苗字が、何でこんなところで出てくるんだ？

「驚いたわよ、まったく」ルナが心底呆れたように呟く。「ようするに、この街には魔法使いに関わる家系が ばか兄の家を含む五つも存在していたってことよ？ こんなちっぽけな場所に、ね。おかしいにもほどがあるわ」

「おいおい、それじゃ俺も魔法使いだって言うのかよ？」

「うん、否定はできないけど。少なくとも素質があるだけで魔法使いではないわね。魔法使いってのは、文字通り魔法を行使できてこそ存在だから。貴方、そんなの使えないでしょう？」

「そりゃ、そうだが……」

「つまりはそう言う事よ。何の間違いか、この街には魔法使いがいっぱいいるの。そして 今回の事件の犯人は、わたしがその場を目撃したんだからまず間違いなく 朝雛紅憐なのよ」

そんな事があっていいのか。魔法使いが何だと言う それじゃあ、紅憐は俺に今まで嘘をついていたのか？ 五つの家系？ 何だよそれ、意味が解らない。それに、残る二つの名前 それにも聞き覚えがある。

「夜鈴。さつき『沢宮』と『波上』って言ったよな」

「言った」

「俺、その名前知ってるんだけど。しかもクラスメイトと先生だ」

「……どう言う事？」

「一人は、紅憐いわく死んだらしい。今回の事件の被害者　それが『沢宮』。沢宮花凜って言う俺のクラスメイトだ。ルナも知ってるだろ？」

「ええ。まさかとは思ったけど。彼女も魔法使いに関わる家系の人間で……そう、紅憐に殺されたわけ？」

「言つとくけど、俺はまだ紅憐を犯人だとは思ってないぜ。で、次だが……『波上』だな。これは俺のクラスの先生だ。波上葵<sup>はじょうあおい</sup>　これも、知ってるよな」

「……知ってるわ」

「これは偶然か？　なあ、ルナ。お前、本当はこの街に何をしにきたんだよ。学校にいったのだって　全部、本当に偶然だったのか。だってお前、この数日で夜鈴の言う家系ってやつに全部関わってるじゃねえか」

俺がそれだけ言つと、ルナは本当に驚いたような表情を浮かべた。「……そう。なるほど、そう言うことなの？　わたしがこの街に送られてきた理由　ただの魔法使いによる事件の解決だけなんて思っていたけど、本当はそうではなかった？」

「解らない。解らないけど、偶然にしちやあ出来すぎてる。ルナ、お前本当に何も知らないのか？」

「知らないわ。少なくとも、わたしの仕事はこの街で起きている事件の解決　それだけよ。これは嘘じゃないわ。ここで嘘をつく必要もないし」

「問題はさ。俺が魔法使いに関わる家系だが、その素質を持っているのかだかしてるとして。でも実際、魔法なんてもんを使えるわけはないし　他のやつらだってそうじゃないのか？　俺みたいに、魔法使いと関わりを持っているだなんて知らないんじゃないのか。紅憐だって死体を燃やしたっていうけど、本当に魔法でしか不可能なのかよ？」

少なくとも、俺は紅憐がそんな事を隠していたとは思えなかった。だから、あいつは知らないんだ。自分が魔法使いだってことを。今

まで俺に何も話さなかったのだった、知らなかったから、それだけかもしれない。

「不可能よ。跡形もなくなってたんだから。でも、自分が魔法使いだって自覚はないのかもしれないわ。ただ、ヘンな力を使えるってことを理解しているだけかも知れない」

「跡形もなくなっていた　か」

そう言えば、紅憐はこう言っていた。現場から逃げ出して、次の日の朝にもう一度現場に見に行った、と。そのときにはすでに、死体はなくなっていたと。紅憐が犯人なのだとしたら、いちいちこんな事をするだろうか。

「ちなみに」ふいに、夜鈴が呟く。「貴方には追跡の魔法をかけておいたから、私には貴方と朝雛紅憐の会話のやり取りが聞こえていた」

「なんだって？　てか、それ盗聴　」

「必要だった。……そして、朝雛紅憐は言っていたはず。目撃者は自分一人しかいない。狙われるのは自分だ、と」

ああ、確かに言っていた。次の日に死体がなくなっていたんだ。

目撃したのは自分一人なんだから、狙われると思ってもおかしくはいや、待て。

「朝雛紅憐は自分で死体処理した。そうでなければおかしい。そうでないならどうして目撃者が自分だけだと言い切れる？」

「あ　」

「自分で死体処理していながら、どうして逃げる必要があるのか、ってことよ。紅憐は犯人から逃げているのではなく　ただ単に身を隠しているだけ。この前のわたしみたいにね。貴方は利用されているだけに過ぎないってこと」

紅憐は「目撃者は自分一人しかいない」と断定するように言っていた。もう一度見に行ったのは次の日の朝。それなら、その間の空白に誰かが死体を発見していてもおかしくはない。だが　紅憐は知っていたのだ。自分が立ち去るときにはすでに死体はなかったか

ら。だからこそ、目撃できたのは自分一人だと言い切った。嘘だったというのか。紅憐は、俺に嘘をついてまでうちにやってきてあんなに怯えたような表情をしていたのも、全て演技だって？

「……紅憐はそんなに嘘が上手くも演技上手でもねえよ。俺は紅憐を信じる。あいつが何をしてようと、あいつが言ったことを俺は信じてやるしかねえんだよ。頼られているんなら、俺はそれに応えるだけだ」いくら魔法使いでも何だって、紅憐が紅憐である限り、俺は紅憐を信じる。「話はもういいか。あいつを待たせてるんだ。悪いけど、もう行くぞ」

俺がそれだけ行つて立ち上がると、だが白と黒の少女はまるで予想通りというような顔をして、

「……まったく。だからばかだって言ってるのよばか兄」

「私は貴方のそういうところを知っている。多分、こうなると言う事も解っていた」

「なんだよ二人とも。止めなくていいのか」

「止める必要がないわよ。でも、もし貴方に危険がありそうだったら、そのときは助けにいつてあげるわ。それぐらい、させてくれてもいいでしょう？」

「……そんなことは無いと思うけど。まあ、好きにしろよ」

答えて、俺は踵を返す。二人の少女は何も言わずに俺の背中を見つめていた。

こうして、俺は自宅へと戻ってきていた。ドアを開けて玄関へに入る。リビングからはテレビの音が聞こえてきた。どうやら紅憐は風呂から上がってテレビタイムといったところだろう。二人 ルナと夜鈴にはああ言ったものの、俺は俺でやらなければならない事がある。今までの事を振り返りながら、俺はリビングへと顔を出した。

「あつ、昴！　ばか、どこいったのよ！」

「わりい、ちよつと知り合いに呼ばれてさ。公園でだべってた」

紅憐は立ち上がると、ふいにこちらまで駆け出してくる。ふわり、としたい匂いがしたかと思うと、紅憐は俺の胸元へと抱きついてきた。

「お、おい」

「ずつと一人で不安だったんだから……。勝手にどこかにいかないで。一緒にいてよ……」

ぎゅ、と服を握ってくる紅憐の両手。俺は何も言えず、何もできず　ただそこで呆然と立っていた。いつの間に消したのか、テレビの電源はオフになっていて、部屋には静寂が訪れる。

不意に紅憐が上目遣いに俺の顔を見上げてきた。その目には、うつすらと涙さえ浮かんで見えた。

「昴……」　俺の名前を呼んで、紅憐は俺の目を見つめる。「お願い。あたし、一人で寂しかったんだよ……。もう一人はいや。ずつと一緒にいて」

「お前……」

「頼れるのは昴だけなんだよ。もうあたしには昴しかない。言わなきゃだめなら、言うよ。あたしの気持ち、昴は気付いてないみたいだから」

す、と紅憐の顔が近付いてくる。目を閉じながら、俺の首に両腕を巻きつかせて

「　好き。お願い、抱いて……」

「……！」

決定的だった。本当に信じたくはなかったけれど。まさか、ここまで自分が鈍いなんて思ってもみなかった。本当に些細なことだったじゃないか。今思えばすぐにでも解る事だ。全てが全て、何もかも　簡単に気付けたはずだ。自分がばからしくなる。こんなことにも気付けなくて、何が幼馴染だって言うんだ。ばたり、と互いの身体がもつれ合うようにして床に倒れ込む。上に乗るようにして、

彼女の身体が俺の身体を支配しようと動く。

「ねえ。キス、しょ……？」

そして、その顔が　唇が、俺の目の前にまで迫ってきて、

「　もうやめろよ」

俺は、その身体を無理矢理引き剥がすように退けた。

「な、に？　どうしたの昴。いやだった……？　あたしのこと、嫌いなのか？」

涙目のまま、倒れるようにこちらを見る彼女に一瞥をくれてから、俺はゆつくりと立ち上がる。嫌いなわけがない。だがそれは、それが本当の朝雛紅憐であったときだけだ。

「……おかしいとは思ってた。信じたいって気持ちがそれを気付かせなかったんだろ？　俺もばかだったよ。どうしてこんな簡単なことに気づけなかったんだか」

「何言ってるの……？」

「知らないのも無理はねえよ。……俺さ。他人にはああいうけど、実は紅憐のこと一回だけ本気で好きになったことがあるんだ」

俺の目の前にいる少女は、何のことも解らないと言った風に顔を見上げる。

「ま、昔の話だけど。一年ぐらい前かな。告ったけど即フラれた。ま、当たり前っちゃ当たり前だよな。あいつと俺はただの幼馴染だったんだから。　だから、あいつが俺を好きになるなんてことは有り得ないんだよ」

「……、でも今はあたし昴のこと　」

「もういい。それにさ、そんなことは別にどうでもいいことなんだ。本当にどうでもいいことなんだよ。決定的ではあるけどそうじゃない。色々とおかしいことはいっぱいあるんだから」

「昴、あたし……」

「おかしいんだよ。思い出せば思い出すほど矛盾が湧き出てくる。」



お前さ　　凄く紅憐に似てるし、本当は　　俺の考えている事は、  
本当は違うんじゃないかって今でも思うけど。本物の紅憐じゃない  
だろ？」

「それは」

「知らないんだよ。紅憐はさ。俺が、朝早く学校に行っていた事な  
んで。ましてやルナに起こされてたなんていう事実をあいっつは知ら  
ない。知っているのは、ある二人だけなんだよ」

そう　　思えば全てがおかしかった。これだけではない。もっと、  
探せば探すほど矛盾点は数多く存在している。

「二人だけ。俺が話したのは二人だけだ。クラスメイトの防人。あ  
の女好きと　　今、俺の目の前にいる沢宮花凜だけだ」

そこにいる、朝雛紅憐の姿をただだけの少女。

沢宮花凜は、にたりと笑みを浮かべて立ち上がった。

「……いつから気付いてたの？」

「気付いたのはついさっきだよ。それに、確証はなかった。最悪ハ  
ツタリで済ますところだったけど……沢宮さん。やっぱり、そうなの  
か」

ぶわ、と少女の身体が光に包まれる。ルナのあの『ドレスオブライ光の衣』とは  
また違う　　赤い光。

「まさかこんなに早く気付かれるなんて、予想外だったな」

瞬間。少女の姿は、いつの間にか朝雛紅憐のものではなく　　正  
真正銘、沢宮花凜のものに変わっていた。

「……、へえ。それが、沢宮さんの『魔法』か？」

「あれ、もしかして全部思い出したの？　……ふうん、じゃあ話し  
てもいいかな。そう、確かにこれが私の魔法だよ月城くん。そうだ  
ね、『トレス擬似変装』って呼んでる」

「トレス……」

「それにしても、他にも色々と間違えちゃったところがあるみたい

だから、参考までに教えてくれないかな？　できれば全部。私がどれだけ間違いを犯したのか。覚えていゐるならでいいんだけど」

沢宮花凜は平然と、別に何の気兼ねもなくそう言った。ただ興味があるから、と言わんばかりに。

「……そうだな。多分、これが最初だろ。　金曜の帰り道、ルナの事を俺に問い質してきたとき。あのときからすでに紅憐の姿をしていたんじゃないのか？」

へえ、と感嘆するように微笑を浮かばせる沢宮花凜。俺は構わずに続ける。

「今考えればおかしいからな。俺が学校から帰るとき、紅憐は部活やってたんだから。なのに俺とあの場で会つのは物理的に不可能だろ。確かに少しおかしいとは思ったけど」

「そうだね、当たってるよ。他は？」

「あいつに好きな奴がいるって話だよ。あのさ、何で俺がフラれたかって話、しただろ。　その理由つてのがさ。あいつ男嫌いなんだよね」

「……男嫌い？」

「ああ。いやまあ、普通に話す分には問題ないからちよつと言い方が違うかな。正確には　男を恋愛対象として見れないんだ。あいつ自身、何だかやけに性格が男勝りだったりするのはそれなんだよ、実は」

「ふうん。月城くんがそれを知つたのは、告白してからなの？」

「ああ、そうだよ。その時、あいつは俺の目の前でとんでもないこと言いやがった。『あたし男に興味ないから。付き合いたいなら女になってよ』ってさ。笑えるだろ？　笑うしかねえ。ここで俺の幻想はことごとく打ち崩されたってわけ」

「……でも、じゃあどうして好きな相手がいるって話をしたときにそこまで追求しなかったの？」

「簡単。ただ女を好きになつたんだろって思っただけ。だからこそ、俺はまさか自分のことだなんて思う訳がない。でもま、動揺はした

けどな。本当にあいつに好きな奴ができるなんて思ってたし。あんまりあいつがそういう話得意じゃないってのも、解ってたしさ」そして、その好きになった相手　それが女子ならなおさら、あいつはなんとモテる。あの性格もさることながら、スポーツ万能・成績優秀な美少女　ときた。これがそのテの女の子にモテない理由がない。だが、紅憐自体はその事実を知らない。鈍いのはあいつだってそうだ。だから不安に思う気持ちも、地味に理解はできた。同姓愛なんて理解したくもないが。

「そっかあ。それは知らなかったよ。まさかあの朝雛さんがね……さすがにこればかりは解らなかったな」

「……なあ、沢宮さん。あいつは　紅憐は無事なのか」

「うん？　もちろんだよ。今は自分の部屋でぐっすりじゃないかな」そうか　ひとまずは安心する。だが、そうだとするなら。一体、何のためにこんな事件を起こしたのだろう。

「俺は問いに答えた。じゃあ次はこっちから質問する番だよな。何でこんなことをしたのか、ことの経緯を全部話してくれないか」

沢宮花凜は、それが当然の反応だと言うようににっこりと笑い、

「いいよ。それじゃあ、どこから話そうか　」

金曜の放課後。私　沢宮花凜は、血迷ったのか場の空気に押されて告白をしてしまった。相手の名前は月城昴。同じクラスの同級生にして、とても仲の良い男子生徒。本当は告白なんてするつもりはなかったけれど　今言わなければならないような、そんな不安感に苛まれた私は、ついつい思わず言うつもりがなかった本音を口にしてしまった。言ったが遅し、相手は何を言われたのか良く解らないといった表情で呆然としていて、私はやっぱり言わなきゃ良かった　と、後悔しながら涙を浮かべてその場から駆け出した。後ろから追いかけてくる声が聞こえてきたが、それをなんとか振り払

う。もし、彼に捕まってしまったらきつと返事を貰うに違いない。そして、その返事の内容はもう解りきっていた。

「はあ、……は」

息が切れてきたところで、気が付けば校舎の外だった。追いかけてくる気配はない。諦めたのだろう。なんとか振り払ったことに、す、と胸を手で撫で下ろす。とにかく今日は帰ろう。そう思った時だった。

「あれ？ ……あんなところに」

校門の壁に背を預けるようにして、一人の金髪を靡かせた少女が立っていた。彼女のことは知っている。月城瑠奈。いるはずがない、月城昂の妹。昨日初めて聞いたときから確信していた。口ではとぼけていたものの、実際、心の中では疑いの念でいっぱいだった。そんな唐突に、実は妹がいましたなんて有り得るのだろうか。ましてや、幼少時代に一緒にいた。なんて言われても信じられるはずがない。と言うか、月城くんは覚えていないようだったけれど、小さい頃、私こと沢宮花凜は月城家と少なからずの縁があり、よく子供同士で遊んだものだった。その時にいたのはあと二人。朝雛と守崎。思い出したのは、月城くん朝雛紅憐が幼馴染だと話してもらったときだ。どうして忘れていたのか、はたまたどうでも良かったのか。とにかく、月城昂に妹なんて呼べる存在はいなかったはずなのだ。一人だけ、お兄ちゃんだのと呼んでいた少女がいたけれど。守崎。苗字だけは調べられたが、名前までは解らない。もしかすると、瑠奈の正体はその守崎なのではないかとも思えた。月城を名乗っているのは何か事情があるのかもしれない。少なくとも、私の家系である沢宮。そして、朝雛と守崎は魔法使いの家系だ。朝雛紅憐に自覚はないようだが、守崎のほうはわからない。もし、瑠奈がそうなのだとなれば納得がいく。昨日見事に学校中の教師生徒を『洗脳』して見せたあの魔法。他の目は誤魔化せても私は誤魔化せない。魔力の動きぐらいは掴めるからだ。彼女は、間違いなく魔法使いだった。そして久しぶりなどと言っていたことから、

最有力候補としては『守崎』の銘が浮かび上がる。必然の結果と言えそう。私は校門にいる金髪の少女のもとまで歩いて行く。何故だかは知らないが、どうやら彼女は月城くんを待っているよう。なら、ちよつといじわるしてみたくなるのも無理はないと思う。

「あ、沢宮さん。今からお帰りですか？」

ふとこちらに気が付いたのか声を掛けてくる猫かぶり娘。いや、それを言うなら私も人のことは言えないけれど、それでもこの少女の猫かぶりは異常だと思う。私は内心少しイラつきながらも、平常を保った表情のつもりで答える。

「はい、ようやく委員会の仕事が終わったんですー。もうくたくたですよ」

「大変ですね。あ、ところでうちの兄を見ませんでしたか？」

「え？ 月城くんならとくに帰りましたよ？」

ここでハツタリをひとつ。月城くんと毎日一緒に帰るなんておこがましい。今日ぐらいは一人で帰ってもらおう。そうじゃないと私の気がすまない。

「あ、そうなんですか。いつまで経ってもこないから……やっぱりそうだったんだ。それじゃあ、わたしも帰りますね。ありがとうございました」

それだけ言つて、礼儀正しく（見かけだけは）その場を去っていく彼女。ふと、ここで『擬似変装』<sup>トレース</sup>を使って彼女に成り代わってやるのかとも考えたけれど、それは意地が悪過ぎる。さすがに悪趣味も良い所だし、そう言う手はここぞつて時まで取っておかなきゃ意味がない。それならば、もっと有効に使うべきだろう。私は月城くんの帰り道を歩きながら、真実を確かめる為にひとつ芝居を打つことにした。

というわけで、『擬似変装』<sup>トレース</sup>を使って朝雛紅憐の姿を借りた私は、

帰り際の月城くんに瑠奈の正体について問い質してみた。だけど、結果は微妙だった。どうやら守崎という名前に心当たりはあるみたいだったが、その名前を聞いたあと、彼は何かを思い出したかのようにならなから立ち去ってしまった。

「……ふうん。月城くんって結構、朝雛さんには軽いんだなあ」

まあ、なんというか得た感想がまずそれだった。本人は幼馴染だからと言うけれど、朝雛紅憐のほうはそうとは限らない。と言うか、昨日のことといい彼女は明らかに月城昂に好意を抱いているように見える。私のこともあるし、月城くんは相当鈍いのもかもしれない。それだけ考えて、今日のところは帰路に着くことにした。本来、私の家はこつちとは逆方向だ。また学校のほうへと戻ることになるけれど、仕方がない。

ふう、と溜め息をひとつ。魔法使いとしての力を使ったのは結構久しぶりだった。実のところ、この力の存在に気付き、魔法使いとしての自我を得たのはここ一ヶ月の間の出来事である。今、街で噂になっている連続猟奇殺人事件。それが、魔法使いの仕業だと言うことを知ったのは、私が魔法を覚えた日だ。つまり、私が魔法を行使できるようになった瞬間に、真実は全て明かされた。どうしてか、なんて話をする、また過去に遡ることになるのだけだ。

それは、とある休日の深夜だった。世間で言う、連続殺人事件の二人目の犠牲者が出た日、私はその現場に居合わせてしまった。犯人はいない、というよりは見逃してしまった。長身な体躯を持つ男性だということは把握できたもの、それ以上のことは解らなかった。そして、私はその時、犯人を逃がしたことに何故か憤怒していた。私らしくもない感情が渦巻く。人殺しを許容するなんて、目の前で許してしまうなんて。なんという体たらく。

「悔しいかい？」

そこで聴こえてきた声、それが全ての始まりだった。背後にいつの間にか立っている男。先ほどの殺人犯ではない、体型も少しばかり痩せ細った、どちらといえばインテリ系の、鼻眞目に見てもそこまで格好のいいとは思えない男性。何故だかその姿を見た瞬間、私の背筋が凍った。酷く、突き刺さるような感触を覚える。

「君はようやく舞台に上がることになるよ。魔法使いたちが舞い踊る、華麗で優雅で　そして残酷なショーさ。君もその主役の一人と成り得るんだ。これ以上に光栄なことはないよ？」

何を言っているのかまったく意味不明だった。せめて日本語で喋って欲しい。いやまあ。実際、日本語じゃないのかと言われるとほとんどは日本語ですと答えるけども。

「さっきの彼が今回の敵だ。彼を捕まえることが出来れば君の勝ちだろうだい、参加したくはないかな？」

「……さっきから意味が解らないんですけど、その。魔法使いとかって、一体どういうことですか？」

男は笑った。嘲るように。本当に君は何も知らないんだね！　と、こちらを挑発するかのように、高らかに。

「いいよ、凄くいいね。なら教えてあげよう。君はね、魔法使いなのさ」

「は……い？　どう言うことですか？　魔法使いって」

「この街にはね、魔法使いが暮らしているんだ。おとぎの国さ。素晴らしいだろう？　夢溢れる世界にわくわくしないかい？　そして、君がその魔法使いだと言うのだから、そりやもうきつと大興奮に違いないね！」

ああ、もう早くこの場から逃げ出したいなあ。そんな事しか頭に浮かばないまま、私はただ淡々と、目の前で踊るように笑い喋る男の言葉を聞いていた。

「それじゃあ姫様　君の『回路』を開いてあげるよ」

ふっ、と、気が付けば男の姿が消えていて。次に気が付いたとき、

すでに私の意識は消えていた。そして目が覚めたときに、私は

理解していた。何故だか、どうして解るのかそれが解らないけれども  
不意に、私は魔法使いなんだってことを自覚した。でも、何が  
出来るのかは解らない。というよりは、まだ何も『組み上げていな  
い』状態で、魔法なんて何も扱えなかった。魔法使いではあるけれ  
ど、魔法を使えない。これじゃただの滑稽な人形だった。人形  
というフレーズを思い浮かべた瞬間、私は思いつく。そうだ。それ  
なら、きつと出来る。どうしてかは解らないけれど、今の私は魔法  
使い。あの気持ちの悪い男が言っていたように、確かに魔法使いな  
のだった。だから、出来る。やろうと思えば、それを行使するため  
に必要な事が全て頭に浮かんでくる。あの男が言っていた『回路』  
というのは、こう言う事だったのかな。なんて少し考えて、解ら  
ないからどうでもいいと切り捨てて、自分の魔法を完成させる。そ  
の瞬間から、私は『人形遣い』の肩書きを背負うことになった。

私が魔法使いとなるきつかけは本当に唐突で、殺人犯が魔法使い  
だとわかったのも、やっぱり必然なのだった。でも、普通の人間と  
私はさほど変わらない。おかしい魔法を三つほど扱えるだけで、あ  
とは何も変わりはない。だから魔法使いである『敵』を探すこと  
もしなかった。あの気味の悪い男ともあれ以来会うことはないし、  
完全に蚊帳の外の出来事として放置していた。でも、それでよか  
ったのか、と最近思うようになってくる。私以外の魔法使いである  
あの瑠奈が現れてから。私は、何か焦りのようなものを感じるよう  
になっていた。

「……ただの杞憂だといけれど」

帰り道を歩きながら呟く。すでに学校の横を通り過ぎていて、あ  
と数分と歩けば自宅の屋敷に着く。沢宮の一家は、古ぼけた和風な  
イメージを彷彿とさせる屋敷に住まう両親と私、そして使用人が数



人だけで構成された家庭である。金持ち　とも言えるのだろうけど、あまりそう言う風を感じたことはない。しかし、私が魔法使いだと理解出来たときから認識の変化はあった。この沢宮家はどこかおかしな空気を持つ家系だとは思っていたけれど、まさか魔法使いの家系だとは。数年前に出て行った姉なら、その事を知っていたのだろうか。まあ、どうでもいいことはどうでもいい。とにかく今はそんな事も全て忘れて、自宅の自室でゆっくり休みたい。勉強もしなきゃいけないし、なんだか今日は家から出たくない気分だった。焦る気分はあった。あの魔法使い、瑠奈が何のために月城くんに接触したのか。守崎が動き出したのかも知れない。そう思うと、何故だか心臓がばくばく動く。あの気味悪い男の言うことを真に受けるわけではないが、舞台の幕が上がる<sup>ステージ</sup>としていられるのかも知れない。まだ確信があるわけではない。瑠奈が本当に『守崎』の人間であるかは解らない。その可能性が一番高いというだけで、もしかしたらまったく関係無いのかも知れない。でも、それでも彼女は魔法使いだった。そんな彼女が、私の前に現れた。これは偶然なのだろうか？　本当に『その日』が近付いているのだとしたら、私は一体、どうするべきなのだろう。あの時　犯行を目撃し、犯人を見逃してしまったときに感じた悔しさは、確かに今でも思い出せる。　やっぱり、そろそろ潮時かも知れない。今日のところは家でゆっくりするとして。そう、明日からはちょうど休みなんだし。ほんの散歩がてら、外の空気を吸いに出かけるのもオツじゃないかな　と、口元をひどく歪ませながら私は思い立った。

そして、土曜日。突然の来訪があつて、私は屋敷の玄関へと出た。私にお客さんなんて珍しいなー　と思いつながら、それが月城くんだったら良いのに　なんて期待も膨らませつつ、  
「こんにちは、沢宮さん」

しかし。期待を裏切るかのように、そこには月城瑠奈の姿あがった。

「……あれ、どうしたんですか？　こんな朝早くに」

私がそれだけ応えると、目の前にいる瑠奈はしかし黙ってこちらを見つめている。感じ取れるのは、魔力が蠢く鼓動のようなもの。

まさか、私にあの魔法を使うつもり……？

「ええ、ちよつとお別れに。『さようなら沢宮さん。もう二度と会うことはないわ。貴女も全部忘れることになる』」

……、はつとする。恐らく魔法を使われた。魔力がこちらに流れ込んでくるのがわかる。

「……え？　あれ？　あの、貴女は」

「あら、間違えたみたいね。ごめんなさい、人違いでした」

私がただとぼけただけなのだとは露知らず、まんまと術中に掛かったと踏んだのだろう。ルナはしれつとそんな事を口にして、その場から立ち去ってしまった。あの瞬間、微弱な魔力が私に接触してきたけれど、それだけだった。力が弱すぎたのか、私に彼女の魔法が掛かることはなかった。恐らく私の体内にある魔力と反発したのかも知れない。とにかく、記憶を消されることはなかったわけだ。でも、どうして今になって記憶を消す必要があったのか。解らないけれど、何かが始まっている。そんな気分になる。

「私のところにまできたってことは、すでに他の人の所にも行ってる……」

そうなると、すでに朝雛紅憐の記憶は消されているかもしれない。いや　今はまだでも、その内消されるのは目に見えている。それはそれで、好都合。彼女が瑠奈のことを忘れるのなら、それでいい。とにかく、今はまだ動くべきではないと踏んで、私は部屋へと戻る事にした。

昼になり、またもや来訪者がやってきた。おかしい。今日は絶対に何かが違う。こうまでも私あてにお客さんがくるなんて、今までにはなかった。偶然だとは思っけれど、そうではないと私の中の何かが訴えている。今日にして二度目の玄関。靴を適当に履いて、ガラガラと扉を開く。

「あ、沢宮さん。ごめん、急に押しかけて」  
「……あ」

そこには、朝雛紅憐がいた。まさか。どうしてここに？

「あの……さ。本当にごめんんだけど。中　入れさせてもらってもいい？　ちょっと話があつて」

話とは何だろう。彼女とは仲が良いと言うわけではないけれど、まったく接点がないわけでもない。私がクラスの委員長を務めているように、彼女も彼女のクラスの委員長を務め、委員会でたびたび顔を付き合わせる程度にはお互いのことを知っていた。たまに会話もするし、今日だって学校がらみの相談かも知れない。むげに断る事も出来ないし、ここは黙って受け入れるとしよう。

「いいですよ、どうぞ入ってください。うち、古臭くて馴染まないかも知れないけど……」

「あ、ううん。ありがと。お邪魔します」

私はいつもの調子で応え、朝雛さんを部屋へと案内した。木の板で出来た床は歩くたびにギシギシと唸るので、朝雛さんは少しばかり緊張しているようだった。まあ、無理もない。外見はまともそうに見えるこの屋敷でも、実のところ中は相当古い。うちは立派そうに見える屋敷を持っているだけで特別そこまで金持ちではないし、リフォームする余裕だってない。私が金持ちな自覚がないのは当たり前と言えた。いやまあ、それなりの家系ではあるのは確かなのだけど。私は部屋に着くと、先に朝雛さんの中へ招きいれ、そのままお茶の用意を取りに台所へと向かう事にした。すぐに戻ってくるから、とだけ言って、私はその場から踵を返して立ち去った。それにしても

「今日はなんだか、忙しい一日になりそう……」  
そう思い立って、自然と溜め息が出た。

部屋に戻ると、朝雛さんは本当に大人しく待っていた。物珍しそうに周りを眺めるでもなく、ただ静かに私の帰りを待っていたようで、その姿勢にはなかなか好感触を持てる。

「はい、どうぞ。安いものだけど」

「ありがと、気を使わせちゃってごめんね」

さて、とりあえずは用件よりも世話話から入るべきか。いきなり用件を問い質すのも、客人を扱う場合としてはあまり宜しくない。

向こうが話を切り出すまではそれなりに相手を務めなくては、部屋まで招待した意味がないというものだ。しかし、そんな私の気を知ってか知らずか 朝雛さんは、間を置く事無く用件を切り出した。

「あのね。今日ここまで来たのは、ちょっと聞きたい事があったからなんだ」

「……聞きたいこと？ 学校のこととかですか？」

「ううん。違うんだ。その……なんていうのかな。ヘンなこと言うやつだとか、思わないでね。あのさ、沢宮さんは 瑠奈って子のこと、覚えてる？」

……、瑠奈だって？ まさか 覚えているのか。

「……いいえ、覚えては、いませんけど。どうして？」

「覚えていない、か。そうだね、それだけで十分だよ。皆とは違う反応だ。沢宮さん 本当のこと、話してくれないかな？」

なるほど、迂闊だった。言い方がまずかった。私は隠し事が苦手だからなあ、と心の中でばやく。仕方がない。隠していてもしょうがないし、ここは話を合わせよう。

「……そうですね。覚えては、います。でも、忘れろって言われたので、話してもいいものなのかと……」

それだけ私が言うと、朝雛さんはまるで女神にでも会ったかのような、救われたみたいな顔をする。

「覚えてるんだね！ やっぱり、あたしだけじゃなかった……！  
ねえ、瑠奈は今どこにいるのか、知ってる？」

「ごめんなさい、さすがにそこまでは……」

探しているのだろうか。

「そっか。……でも、あたし以外に覚えてる人がいるだけでよかったよ。あのばかも覚えてないって言うし」

「……あのばか？」

「あ、うん。昴のこと。あいつの家まで押しかけたけど、何も知らない、何も覚えてないって顔するんだよ。瑠奈は瑠奈で、今朝会ったと思ったら別れの台詞だけ言っていなくなるし……」

やはり、彼女の魔法は行使されていたんだろう。だけど朝雛さんは覚えている。どうしてだろう　とまで考えて、ようやく思い出した。朝雛はこの街の魔法使いの家系だ。ならば　彼女だって魔法使いであつてもおかしくない。この私のように、瑠奈の魔法に掛からなくても何もおかしいことはないんだった。そんなことを見落としていた自分に呆れつつ、しかしだからといって別に何が変わるでもなし、私は冷静さを失わないように、平常心を保つ。

「私のところにもきましたよ。それで、別れの言葉も確かに聞きました。でも忘れるといわれても忘れるわけがないし　他言するなつてことなのかもしれないと思っただけですけど」

「うん。あたしも最初はみんな口を閉ざしてるだけだと思つたよ。でも、昴のは明らかに何も覚えてないとは思えない態度だった。おかしいよ、何かが……上手くいえないけど、何かおかしい」

そこまで聞けば十分だった。ようするに、やはりこの少女は魔法使いであつて魔法使いではない。素質はあるけど自覚のない魔法使いで、瑠奈の魔法は効かなかったものの、実際何をされたのかまでは理解に至っていない。ならば言いくるめることはできそうだし、いや　それより、もっと効率のいいことが出来るかもしれない。

「私もおかしいと思います。何だろう、何かが始まるうとしている、そんな感覚が。……あの、朝雛さん。せっかくここまできて貰ったんだし、ちよつと長話に付き合ってくれませんか？」

時間にして一時間と少し。私は、私の知り得る全ての情報を彼女に話した。魔法使いが存在すること。私が魔法使いであること。瑠奈が魔法使いであると思われること。今この街で起こっている連続殺人事件と魔法使いの関わりを。そして、

「……じゃあ、あたしもその魔法使いだって言うんだね」

「ええ。私もついこの間までは信じられませんでしたけど……自分のこの力だけでは把握できなかった魔法使いの世界というものが、瑠奈さんや朝雛さんを通じて見えてきた。これから何かが起ころうとしているって事も」

「にわかには、信じられない……うん、信じたくはない、かな。

あたし、そう言う話って話すだけなら凄く好きだけど、現実として捉えるタイプじゃないから。……でも、うん。そうでないと説明のつかない事がある時点で、信じないと話も進まない、か」

彼女はなんとも理解力のある人物だった。私の突拍子もない説明だけで、ここまで理解し、現状を把握してものを見渡せている。才能だな、と思う。少し妬ましいぐらいに。

「そうですね。私もそろそろ覚悟を決めないといけないと思ってたところです。私が会ったあの気味の悪い男性の言っていた言葉も気になるし……もうすぐ、何かが始まる。それは恐らく確実だと思うんです」

「沢宮さんは、これからどうするつもり？ ……こんな話を、信じるかも解らないのにあたしに話したってことは、あたしに何か出来る事があるんじゃない？」

「……はい。察しが良いですね。今日ですけど、夜に街を徘徊しよ

うと思います。『敵』であるらしい殺人鬼　言つところのこの街で起きている事件の真犯人ですけど、その男性も魔法使いだと言う事は解っているのです。事件が起こるとしたら夜です。だから、動くなら早いほうが良い。今日の夜　そうですね、十時過ぎに学校の近くにある坂を降りたところのコンビニ、その裏側にある路地裏で待ち合わせましょう」

「オッケー、解った。一人よりは二人のほうが安全だからね。あたしも協力するよ」

もはや他人事とは思えなくなったのだろう　朝雛紅憐は、容易くこちらの用件を許諾した。その後、一、二度会話を交えた後、朝雛紅憐は屋敷を後にした。

夜の街は静かだ。この辺りは特に静かな部類に入るだろう。

特別、コンビニに不良が頓挫するわけでもなし、車もそう多くは通らない。人通りもありなく、コンビニの光だけが唯一、その街が生きていることを証明するかのようだった。そんな静かな街だからこそ　事件は起こる。私、沢宮花凜は『餌』を用意した。この舞台<sup>イッ</sup>の幕を速やかに下ろすには、ようするに殺人鬼の魔法使いを捕まえてやればいい。そうすれば、あの気味悪い男の言葉をこれ以上脳の隅っこに残さずに済む。ずっと気になっていたが、今日で全てを終わらせてやるんだ。私は今までに無い昂揚感を覚えながら、コンビニ裏の路地裏　朝雛紅憐との待ち合わせ場所へと『餌』を撒く。餌と言う名の人形を。人形と言う名の私を。自分を『人形遣い』たらしめた私の初めて行使した魔法　それが『人形精製』。基本は土に魔力を注いで形を形成し、私の魔力を遠隔操作して送り込み、それを動かす。見た目だって私にしか見えないし、殺されれば血も流すように作っている。あまりに精密過ぎて自分自身少し嫌気がさしたが、どうせやるのならこれぐらいでないと『魔法』とは言えな

いだろうと言うのが私の考えでもあった。路地裏に私を立たせ、魔力を強く放たせる。こうすれば、魔法使いなら嫌でも誘えるはずだ。近くに寄ればすぐに解るだろう。私が感じるように、他の魔法使いが感じるならば　だが。

時刻は九時過ぎ。朝雛さんとの約束の時間は十時だから、あと一時間の猶予がある。これで釣れないなら朝雛さんと合流して今度は動き回って探す。当初の予定はそれだけだった。そう、朝雛さんの存在もあくまで保険程度でしかない。……でも、なんていうか。物凄く滑稽なのだけど。自分でもまさかここまでとは、なんて自惚れてさえしまうけど。

（　釣れた……！　）

人形配置から数十分足らず。路地裏に、確かに記憶にあるあの男が現れた。

フィギュア

（『人形』に意識を集中　間違いない、あいつ……あの時の）

にたあ、と不気味に笑う長身の男。それは間違いなく、私が魔法使いになったあの日に逃がした、殺人鬼だった。

（にしてもこんな簡単に釣れるなんて。私、もしかして才能あるのかな？）

駄目だとは解っていてもつい自惚れてしまう。む、とりあえずは目の前の『敵』をなんとかしよう。

「　オマエ。魔法使いだろ。ならオレと勝負しろ」

「……勝負？」

私は人形越しに問う。この人形、何が凄いつて遠隔操作できるだけではなく喋ることすら出来るのだ。

「ああ。　もう大分殺してきた。これで何人目だっけ……いや、別にそんなことはどうでもいいんだけど」

「ひとつ聞いてもいいですか？　貴方　まさか、今まで殺してきたのは全部が全部、魔法使いなんですか？」

「そうだ。どいつもこいつも弱くて仕方がない。ちまたじゃ連続猟奇殺人事件だとか言われてるけど。この犯人はオレだぜ」



魔法使いを殺してきた　理由は何であれ、とにかくこの男こそがこの街で起こっている連続殺人の犯人であることは解った。あとは、どうやって仕留めるか

「あのさ、オレをこうやって誘い込んだってことは。　オマエ、それなりに強いんだろ？」

「……！」

ダッ、と男が駆け出す。いや　駆け出したと思った瞬間、その肉体はあろうことか空を飛んでいた。弧を描くようにぐりと半回転しながら、私目掛けて飛び掛かる。魔法使いをこれまでに何人も倒してきたと言う事は　この男、恐らくかなり強い。しかも魔法使いならば尚更だ。この人間技とは思えない動きも、魔法の力だと言っのдарооか。

「オイオイ、突っ立っつてると一撃だぜ……！」

ごしゃ、と頭がひしゃげる音がする。同時にノイズが走り、途切れそうになる人形との意識。

「……なんだこりゃ、本物じゃねえのか。こうも容易く死ぬわけねえよな、魔法使いが。　チ。抵抗もねえから何かと思ったが、ようは試されたってわけか」長身の男は舌打ちして、「　でもよ、甘いぜ魔法使いさん。オレも魔法使いだってことを忘れられちゃあ困る。本体の居場所ぐらい、すぐに探知できるんだから」

しまった、と思った時にはもう遅い。長身の体軀を軽やかに、男はその場から文字通り飛んで去っていった。そこには、私の作り出した精密な人形の死骸だけが残されて。すぐに意識のリンクを断つ。

だが、本物の私の居場所がばれてしまっでは意味がない。すぐにここから立ち去らなければ。私は二つ目の魔法、『擬似変装<sup>トレス</sup>』で朝雛紅憐の姿を被る。こんなのは外見だけの気休めに過ぎないけれど、やらないよりはマシだった。出来るだけ自分の魔力を閉ざすように神経を使いながら、私はその場から逃げるように立ち去った。

そうして、十時を過ぎた頃　ようやく追跡を交わし切れたらしい。私は安堵しつつも常に気配を隠しつつ、人形の始末をするために路地裏へと戻ることにした。だが、ひとつ忘れていた。

「……あ」

そこには、朝雛紅憐が立っていた。人形であるはずの、私の死骸を見つめながら。

（死体を見られた……か。計画はこっちに進むんだね。うーん、一応想定はしていたけど、どうしたものかな）

私はこうなることも考えてはいた。そうなったならそうなったで、一番自分にとって都合の良い展開を作り上げたいところだが　やがて、その場にいることが耐えられなくなったのだろう。朝雛紅憐は恐怖の表情を浮かべつつ、悲鳴をあげながらその場から逃げ去った。恐らく、これで私は死んだと思われるで間違いない。人形に私だと思わせるためのフェイク　携帯を持たせていたのがあだとなったか、朝雛さんは私の携帯を拾って行った。本当は私であることを『敵』に証明できればそれでよかったんだけど、持っていかれてしまったのなら仕方がない。あとでなんとかして取り戻そう。さて、とにかく今は私も朝雛紅憐の姿をしているのだ。彼女の姿が見えなくなった頃合いを見図って、私は人形の焼却を開始。この人形、魔力を直接送り込めば簡単に、そして完全に消滅させられるのもメリツトの一つだろう。跡形もなくなったことを確認すると、私はその場から静かに立ち去った。

次の日。昼頃に朝雛邸へと赴くものの、反応がない。帰っていないのだろうか。まさか、とは思うが。

「……前からはさすがにマズい、かな」

私は朝雛邸の裏へと回り、窓を破って中に侵入した。一人暮らし

だとは聞いていたけど、本当に静かだった。誰もいる気配がない。やっぱり家にはいないのかも知れない。二階まで上がり、朝雛さんの部屋を発見する。もうここまでくればノックなんて必要ない。私は扉を開いた。

「……いない、か」

どこにいったのかは解らない。最悪、あの殺人鬼と出くわして殺されてしまった？とにかくいい事は事実だった。不法侵入してしまったからにはばれるわけにはいかないけれど、ここに今住んでいるのは彼女だけだ。説明すれば解ってくれるとも思える相手だし、少し調べ物をさせて貰おう。調べる事は『朝雛』の家系について。魔法使いの家系ならば 何か手掛かりがあるかもしれない。

色々調べてみたけれど、特に目ばしいものは見当たらなかった。本当に魔法使いの家系なのだろうか？ しかし、そうでなければ朝雛さんが瑠奈の魔法に掛からなかった理由も解らない。素質はあるはずなのだ。それに、私の実家でそれなりの調べはついている。そもそも、この街には魔法使いが多すぎる。この街を仕切る魔法使いの代表とも言える家系『守崎』。私の家系である『沢宮』。それら二つと過去に接点のある『朝雛』。朝雛紅憐が素質を持っていることが証明にはなるが、魔法使いとしての証拠が何ひとつないのはどう言うことだろう。すでに身を引いている という線もあるか。『解らないことだらけ、か……。うーん、結局あの『敵』のことに ついてもあんまり解らないままだし』

あの長身の男は、最後に目に見えない攻撃を放った。上空から急降下してきた寸前、肉体と肉体がぶつかり合うその前に、何かしらの攻撃が私の人形にぶつけられた。恐らくかわす事は不可能。直視できない攻撃なんて、それこそ意味不明だ。魔法だということはわかるけれど、それにしても情報不足が否めない。あの『敵』には、

ただ闇雲にぶつかっていつても勝てる気がしなかった。ふう、と一息つくように、私はリビングのソファに腰掛ける。自分でも何をやっているんだろう、とは思っただけ、一度やってしまふとんだか割り切れてしまふというか、ある程度の安心感があると特にここを離れる理由も見つかからない。今日一日ぐらいいはここにいて、彼女が帰ってこないようなら本格的に探す事になるかもなあ　なんて考えている矢先、

がちやり、と。扉のカギが開けられて、朝雛紅憐が現れた。

「……あ」

やばい、見られた。この姿　朝雛紅憐の姿のままリビングに居座る自分を目撃されてしまった。

「あ、あたし……っ？」

慌て出す朝雛紅憐。私は仕方なく、『<sup>トレース</sup>擬似変装』を解除し　元の姿へと戻った。

「さ、沢宮さんっ！　無事だった、の……？」

「……無事、とは？」

朝雛紅憐はあの現場を目撃している。だが、私自身はその事実を知らないフリで通しているため、ここはとぼけた返答をしておいた。「うん。約束通り、あの路地裏まで行ったら……そこに死体があつて。沢宮さんだと思つて……」

「あれを見たんですね……。あの路地裏にあつたのは私が魔法で作りに上げた『人形』です。さっきの姿は、これも私の魔法で作りに上げた『変装』です」

「そ、そうなの？　じゃああれは沢宮さんじゃなかったんだ……。携帯が落ちてたんだけど、これ……沢宮さんのでしょ？」

「ええ、人形にもしものことがあつたら、それが私である証明になるように持たせておいたんです。あ、返して貰ってもいいですか？」  
「うん、もちろん」

私は自分の携帯を受け取ると、人形の血に塗れたその機械をポケットに突っ込んだ。

「……本当は、『敵』に私が死んだと思わせたかったですけどね。さすがに騙せなかった。魔法使い相手なのに、少し舐めてました」「やっぱり、あれは『敵』とやりあった後だったんだね？ 殺されただんだと思つて、あたし……」

「心配かけてしまつてごめんなさい。でも大丈夫。私はまだ生きてます」

そう、生きてさえいればここから巻き返すことだって出来る。だが、朝雛さんはそんな私の言葉に「そうだよ」と、何故か気が乗らないと言わんばかりに答えた。

「それで、今までどうしていたんですか？ 心配になつて、ここまでやってきたんですよ、私。勝手に入るのは、少し悪いかと思つたんですけど……」

「そうだったんだ、ごめん。それがね」  
「……」  
そうして、私は朝雛紅憐の今までの行動について詳しく話を聞いた。

月城くんの家に行っていたとは少し予想外だった。しかし、私とかかわりを持った後で私が死んでいたとなれば、自分が狙われると思うのも無理はない。一通り話を聞き終わると、朝雛さんは言い難そうに、

「……あのさ、やっぱり危険だよ。その『敵』ってやつは殺人犯なんだよ？ いくら沢宮さんが魔法使いだからって、危険なことに変わりはない……！」

「そうですね……。でも」

何故だか、引き下がる気にはなれなかった。瑠奈の件もある。私が魔法使いとしての自覚を持つてから数週間としないうちに、こうも事態が動き出した。あの気味悪い男の言葉が再現されようとしている。勝ちたいとは思わない。別に他の魔法使いに遅れを取りたくないとか、そんな理由ではない。ただ、なんていうか。

「……ねえ、やっぱり瑠奈に話さない？　なんとか探し出してさ。続けるにしても、あたし達だけじゃ」

パシ、と。そこまで言われて限界を感じてしまった私は、朝雛紅憐の後頭部を突いて意識を失わせた。

「……ごめんなさい。でも、それだけは　出来ない」

そうだ、やっと気付いた。私は、あの魔法使いが許せないんだ。

『敵』なんてどうでもよかった。そう、ただ一人の魔法使いのことが許せなくて。

「瑠奈……貴女の思うようには、させない。私は私のやり方で、この事件を終わらせる。他人の記憶を操作してまで自分の手柄を欲するような魔法使いに、私は負けられない」

彼女のことを知リたかったのだって、多分そうなんだ。私、沢宮花凜は。月城くんに寄生し、果てには他人を操作してまで首を突っ込んだ、あの女が許せない。

そうして、私の加速は止まらずに。

私は一人の少女を演じきろうとして　結局、失敗した。

## 第二章／失うモノ、取り戻すモノ 下

「……私欲を交えたから失敗した、なんて良くある話だね。そうは思わないかな？　ねえ、月城くん」

彼女　沢宮花凜の説明を聞いて、俺はことの真相を理解した。ただ単に彼女が全て紅憐の真似事をしていたわけではなく　交互に入り交わった二人の朝雛紅憐。それが、この　もはや事件と呼ぶことすらないだろう　事実の真相だった。ようするに、

「一昨日、帰り際に会ったのは沢宮さん。昨日うちにきた紅憐は本物で……今日きたのも本物だったが　紅憐邸で二人が入れ替わった。……つまりはそう言う事か」

「そう。本当は死体なんて最初からなかった。人形だっただけで、目撃した朝雛紅憐はただ勘違いしただけ。まあ、携帯を持たせていた私のミスでもあるけど、『敵』はああも簡単に見破ってくるし……」

「ルナが見たつていう死体処理をする紅憐ってのは、沢宮さんのことだったのか。くそ、ややこしい」

「瑠奈……に、会ってたんだね。やつぱり」

「ああ、今更隠しはしないけどな。にしても、それじゃ……あいつらも勘違いしてるんじゃないかねえか、ちくしょう」

「勘違い？」

「そう。あいつら　ルナと夜鈴が、紅憐を犯人だと思い込んでる。正確には今ここにいる沢宮さんだけど、あいつらは見破れてないみたいだった」

俺がそこまで言うと、目の前の沢宮さんは目を丸くして、

「　あいつら？　まさか、二人もいるの？」

「ああ、そうだけど。知らなかったのか？　ルナは外国からきた魔法使いで、名前は　えーと、確かルナミス＝サントリアだったっけか」

「……守崎じゃ、ない？」

「守崎は夜鈴のほうだな。守崎夜鈴。この街の魔法使いらしいけど、あんまり詳しい事はまだ聞いてない」

「じゃあ、妹　　っていうのは？　その、瑠奈　　ううん、ルナミスⅡサンクトリアはどうして月城くんの妹になんか……」

説明しにくい事情なんだよなあ、と俺は呟いて、

「まあ、ちよつと長くなるけど。話すか」

これまでの経緯を、出来るだけ簡単に伝わるように話した。

一方、その頃　朝雛紅憐は、ベッドの上で目を覚ました。ゆつくりと身体を起こして、ここがどこなのかを確認する。……自分の部屋だ、間違いない。なら、あれは夢でもなんでもなく、現実だったのか。

「沢宮さんが生きていた……」

死体を見た時は見間違いではないと思ったから、確信していた。

沢宮花凜は死んだのだと思い込んでいた。だが、実際にはああして生きていて、今はどこにいったのか解らない。下のリビングで恐らく気絶させられたのだろう。今の今まで、自分はここで眠っていたのだ。

「いま、何時……だろ……」

部屋は薄暗い。かすかに窓から照りつける月の光があるだけだ。

彼女と会ったのが昼頃だったから、大分長い間眠っていたのだろう。あたしは机の上に置いてある目覚まし時計を手を取って、今現在の時刻を確かめる。　九時半。

「うわ、昴……待たせてたんだった。なのにもうこんな時間じゃ、さすがに帰っちゃったかな……。あいつにちよつと悪い事したかも」  
でもまあ昴だしいつか、とやけに早く気を取り直して立ち上がる。  
部屋の電気を点けて、身支度を開始。少し遅れる事になってしまう



けれど、行かなければ。待ち人を待たせるのは好きではない。自分が待つ事を嫌うから、他人を待たせるのも嫌いなのである。

ポケットに突っ込んである自分の携帯電話を取り出し、メールチェック。特になし。まあ、あいつは頻繁にメールなんてしないからなあ、と適当に考えて、携帯電話をしまう。とにかく、ここにこうして滞在していたのにも関わらず襲撃がない　と言う事は、恐らく

『敵』はあたしの事を解っていない。それはそれで、もう怯える必要も今はないと言う事。昂に頼り続けるのもさすがに悪い気がするし、安全さえ確認できたならそれでいい。それにしても、やはりさすがと言うべきか　沢宮花凜は余程の魔法使いのようだった。あの時死体を見て死んでしまったんだと思った時は、まさか死ぬと思っていなかっただけにかなり動揺したけれど。魔法使い同士の戦い

それは皮肉にも、互いの奇襲の応酬で、沢宮花凜は見事、持ち前の『切り札<sup>カード</sup>』を上手く使って死を逃れたのだろう。これをさすがと言わずして何と言おう。でも、やっぱり　これ以上関わる事はないほうがいいんじゃないかな、と思う。沢宮花凜は確かに優秀だが、彼女の『敵』には勝てないと思う。殺人に特化した魔法使いと、他人を欺く事に特化した魔法使いなら　殺し合いになった時、最後に立っている魔法使いがどちらなのか、言うまでもなく誰だつて理解出来る。これ以上は危険だ。死にたくないのなら、今すぐ辞退するべきだろう。力の差は理解出来た。それで十分だと思う。彼女だつて解っているはずだ。このまま続けられいずれ負ける。殺されてしまう　と。それでも　彼女は戦うのだろうか。殺さ  
「……ああ、考えてたら寒気がしてきた。さっさと急ごう」

俺　月城昂は、沢宮花凜にこれまで起こった事を簡略に説明した。ルナとの出会い、妹になった訳、守崎夜鈴の事。

「そっか……、それじゃあ、瑠奈っていうのはただの名前の略称、

ルナをもじっただけなんだね。ふうん、漢字だったから日本人だと思っただけだしちやっただけ」

「……まあ、あの金髪見れば日本人じゃないって気付いてもおかしくはないと思うけど」

「うーん、まあ、私ってどっか抜けてるところあるからね」

いつもの、学校のとくと変わらぬ調子で話す沢宮さん。先程までの魔法使い然とした態度は何だったのだろうか。ああ、もしかして沢宮さんはルナと一緒にいるのか……とか一人心中で泣いた。

「それにしても、外国からの魔法使い……か。私はてっきりこの街にしかないと思ってたけど。考えてみれば、他所に魔法使いがいても何の不思議もないんだよね。うーん、一体、魔法使いって何なんだろーね？ 月城くん」

そんなの俺に聞かれても、と思いながら、

「沢宮さんだって、魔法使いじゃないか」

「うん、まあそうなんだけど。あんまり実感ないっていうか……この力だって、唐突に使えるようになっただけで、魔法とか言われてもピンとこないし。でも、確かに魔法なんだって、なんとなく理解はできるんだよ。あはは、おかしいね」笑いながら、沢宮さんは少し間を空けて、「……『守崎』がルナと別人なんだとすると、ルナはその守崎夜鈴さんと一緒に行動してる、魔法使いが二人いるってことだよな？」

「ああ、そう言う事になる」

「その守崎さんが今回の事件解決のために、ルナに協力しているんだっけ？」

「そうだな」

返答しながら、いつの間にか沢宮さんがルナを呼び捨てにしている事に気がついた。

「……そっか。それじゃあ、事件が解決されるまではルナは守崎さんの助力を得ている状態だから……こっちが不利、か」

「不利？　どう言うこと？」

「え？　あ、ううん。こつちの話。気にしないで」

「気にするよ。　まさか沢宮さん、まだ続けるつもりなのか？」

沢宮さんの話を聞く限り、『敵』は相当強力だ。だと言うのに、まさか彼女はまだ続けるつもりなのだろうか。

「え？　あ、殺人鬼のこと？　それなら心配ないよ、もう戦おうとは思ってないから」

「……そうなのか？」

「うん。だって、あれは無理だよ月城くん。考えてみたけど、どうやったら対処法が見つからない。相手の正体も解らないんじゃない、お手上げだからね。素直に私は身を引いて、高見の見物かな？」

「それでいいのか？」

「うーん、正直に言っちゃうと悔しいよ。本当はルナに負けたくはないし　でも、向こうが二人で動いてるとなると話は別。『敵』の強さも思い知ったし、ここは引き下がるかな」

彼女が本当にそう思っているのかは解らない。だが、今そうすると言うのなら、俺はそれを信じるしかなかった。

「……ねえ、月城くん？」　ふといつものように、目の前にいる彼女が呟いた。「あのね。今、こんな事を聞くのは野暮かも知れないけど」

「沢宮……さん？」

「私さ、あの時の言葉　本気、だったんだよ？」

どくん、と心臓が跳ね上がる。あの時の言葉、と言ったらあれしかない。思い浮かぶのは、放課後の教室で聞いた

「こんな騙すような事して、挙句に無理やり迫っておきながら、ほんとに今更かも知れないけど。……私、月城くんが好き。これは、ほんとなんだよ？」

「……それ、は」

「嘘じゃない。ずっと、ずっと見てた。気付いて欲しかった。あの時、月城くんの朝雛さんに対する気持ちとかを聞いて、なんだかい

けそうな気がして…… 本当に、言うつもりはなかったのに……私、告白して。でもね、あれは嘘偽りない私のほんとの気持ち。さつきああして朝雛さんの姿で迫ったのだって、本当は朝雛さんのことを想っているんじゃないかと思って……。こうして月城くんの部屋まで朝雛さんの姿でやってきたのだって、それを確かめるためだったんだよ。」段々と声に力がなくなっていく彼女の言葉の真意は、いくら鈍感な俺だって解る。沢宮さんは 本当に、俺の事を好いてくれているんだと。「ねえ、月城くん。やっぱりだめなのかな？ 私みたいな、猫かぶりで、人を騙すような子で……拳句に意味わかんない魔法使いみたいな私じゃ、月城くんは嫌い……？」

「いや、そんな事は……でも」

俺はルナに対して好意を抱き、果ては告白紛いの事までしている。ルナだって、俺の事を好きだと言ってくれた。あの夜に聞いた言葉が恋愛対象としての意味だったのか、ただ兄に対する妹の好意のようなものだったのかはまだ曖昧だけれど、今の俺には確かにルナがいた。だが 記憶を取り戻してなければ、俺は沢宮さんを選んでいただろう。皮肉にも、どうやら俺は惚れっぽい性格みだった。困り果てた性格である。自分を殴りつけたくなってしまう。

「……やっぱり、まだ朝雛さんの事が好きなの？」

「え、あ……いや、そうじゃない」

「ならどうして？ どうして、私じゃだめなの？ やっぱり、私の事嫌い……？」

「嫌いなわけではないじゃないか。そりゃ騙されはしたけど……沢宮さんはちゃんと本当の事を話してくれたし、紅憐は無事。事件の犯人とだって全然関係ないんだから。真実を知った上で、俺が沢宮さんを嫌いになる理由がないよ」

「じゃあ」それだけ呟いて、沢宮さんは立ち上がる。テーブルの向かい側からこちらまで歩いてくると、俺の隣に膝をつけて、すっと顔を寄せてくる。「今度は、ちゃんとした私の姿でお願い。キス、しよ？」

そう言つて、俺の目の前で瞳を閉じる沢宮花凜。

「まっ……待つてくれ沢宮さん！ た、確かに俺は沢宮さんの事は好きだけど……そう言つのは」

「……応えて、くれないの？ どうして？」

ここで、言うべきなのか。俺が今好きな相手が、誰なのかを。それは 振ると言う事だ。彼女を傷つけてしまうかもしれない。でも、それを伝えなければ、彼女はきっと諦めはしないだろう。俺だつて、同じ立場ならきつとそうだから。

「……もしかして、月城くん 他に好きな人がいるの？」

「それは」

「朝雛さんじゃないなら、誰？ 誰なの？ 月城くんの心の中にいる人は、誰？」

もう、ここまできたら誤魔化せない。沢宮さんは好きだ。でも、俺はそれ以上にあいつの事を想っている。選ばなくてはならないと言ふのなら、選ぶしかない。

「……ルナだよ。俺、あいつの事が好きなんだ」

「え……」

「たった二日だけでさ、気付いたら好きになつてた。惚れやすいのかも知れないけど でも、ルナへの気持ちはそんなちつぽけなものじゃないと思つてる。だから」

「……せない」ふと、沢宮さんが何かを呟いた。「許せない、あの女……まさか、一緒に住むだけでは飽き足らずに月城くんの心まで魔法で奪つてしまうなんて……」

「ちょ、沢宮……さん？」

「……月城くん」

「は、はい」

何故か敬語口調になつてしまう俺。

「月城くんはね、あの女の魔法にかかっているだけ。たった二日でそこまで好きになつちゃうなんておかしいとは思わなかったの？」

確かに異常だとは思ふけれど、それはただルナにそれだけの魅力

があつたからで　　って言うか、『あの女』って。呼び捨てからさらに酷くなつてないか沢宮さん。

「だからね」

「はい」

「私が忘れさせてあげる」

「……はい？」

がばつ、と押し倒されること一秒。上半身の服を無理やり脱がされるのに、九秒ぐらい。その約十秒間、俺は何をされたのか解らずに啞然として、

「ちょ、ちよつと待ってくれ沢宮さん！」

「待てない。私、本気だもん」

「う、うわ！　それはまずい、まずいって！　上だけならともかく下は本気でやばいから　ッ！」

なんなんだ、まさかここまで大胆だとは思つてなかった……！　紅憐の姿で迫ってきた時と同じように迫られる俺。まずい、この体勢は押しのけるのも難しい。ピンチ。俺の上に馬乗りになっている沢宮さんと言うと、にたりと笑みを浮かべて俺の顔へと一気に近寄つて、

「ん……っ！」

無理やりに唇を重ねられた。しかも、強引に舌まで突っ込んでくる。

（こ、これは本格的にやばい　　ッ！）

っていうか、こんなところをルナに見られたら終わりだ。

「　　ん。月城くん、好き……」

さらに目と鼻の先で、頬を真つ赤に染めながらそんな事を言われると　　もう、なるようになつちまえ！　みたいな気分になさなってしまう。やばい。流れに乗ってしまうのは嫌いではないけれど、今に限ってそれはマズ過ぎる。……誰か助けてくれ。

「心配しなくても、ここ月城くんの部屋だから。誰もこないし、誰にも見られない。だから……ね？　好きなだけ私とくっついててい

いんだよ？」

「さ、沢宮さん……やめて、くれ」

「やめない。あの女にかけられた魔法が解けるまで、私は月城くんの側から離れないんだから」

くそ、なんて頑固なんだ。これじゃルナと変わらない。この瞬間いや、少し前からだけど、俺の沢宮さんに対する印象が崩れ落ちてしまった。いやまあ、そう言う女の子も可愛いとは思うけどね？

（つて、違っただろ俺 ツ！）

すると、沢宮さんの上着が脱がれる。その下は下着だけで、白い肌がさらけ出されていた。これでお互いに上半身は裸に近い状態。このままだと、本当に取り返しがつかなくなってしまう。

「ねえ、月城くん……私つて、魅力ないかな？」

「う……」

ないわけがない　とは思っただけで口には出せない。その白い肌は本当に綺麗で、まるで汚れを知らない少女そのもの。普段の彼女からは想像もつかないくらい大胆な事をされているのにも関わらず、何故だかそんな彼女の身体は、沢宮さんらしさを見せているような気がした。普段着やせしているのだろう、胸も結構大きい。ルナとは大違いだ。あいつ実は割と寶乳だし。それに比べると、沢宮さんのそれは女性らしさが溢れていて実に

（……何考えてるんだよ、俺）

そこまで考えてふるふると首を振る。もうだめだ。俺だって男なんだから、こんな事態になって流れに流されないなんて事は多分有り得ない。このまま俺は、沢宮さんを抱くのか？ いや、抱かれるのか？

「これ、邪魔だよな。それじゃ外すね……」

ぱち、と音がする。見れば、沢宮さんは胸元のそれを外そうとしていた。

「ばっ、ばか！ それ以上はまず ツ！」

俺が最後の理性を振り絞って声を上げた瞬間、

がちやり、と。玄関の開く音が聞こえた。

「……え？」

沢宮さんが驚いたように振り返る。この部屋は俺の部屋だ。俺が一人暮らしで使っている部屋に違いはない。だから、ここに誰かが来る事はない。しかし、それはついこの前までの話だった。俺は考える。

そこにいるのは金髪ロングな義理の妹か。いとも簡単に不法侵入してくる幼馴染か。それとも、神出鬼没な黒フードの少女か。

その誰かなのは解る。それ以外に俺の部屋に入ってこれるような人物はいない。つまるところ。それが誰でさえ、この状況を見られたら俺は終わるわけで

「何してるのかしら、お二人さん？」

「沢宮さん……？ わ、こら、昂なにしてんの ツ！」

「……、不潔」

まあなんていうか、そこには全員いた。

「私は貴女には絶対に協力しない」

それが沢宮花凜の返答、その第一声だった。

「どうして？ 理由をお聞かせ願いたいわね、沢宮さん」

「……もう私の名前を気安く呼ばないで、この寄生虫。ついでに月城くんからあと十メートルくらい離れてくれない？」

うわあキレちゃった……と、俺と紅憐は顔を合わせて呟く。夜鈴はそんな二人を、だがいつもの無表情で黙って見つめている。いつの間に沢宮さんはルナの事をこんなに嫌ってたんだろう。沢宮さんの挑発じみた言葉に、さすがのルナもキレた。ピキリ、と空気が割



れる音が聴こえるようだ。

「寄生虫、とはわたしも言われたものね……。なに、それ上半身裸でばか兄に迫っていた貴女が言えるセリフ？」

「ばか兄って誰のこと？ 月城くんのこと？ だとしたら訂正して月城くんはばかでもないし、貴女の兄でもないんだから」

「……、なら訂正してあげる。『わたしの』昂で良かったかしら？」

今の言葉に今度は沢宮さんがカチンときたのか、いつもじゃ間違いないく聴けない、彼女の本音が次々と飛び出してくる。もちろん言われるままで終わるルナではない。互いに罵声に怒声を浴びせ合いながら、しばしの口喧嘩が続く。俺と紅憐は見とられないと、リビングから逃げ出すように俺の部屋までやってきた。

「……はあ。なんなんだよあの二人。これじゃ話し合いもなにもないじゃないか」

「っていうか。いつの間にあなたはあんなにモテるようになったわけ……？」

誤解だ　とは言えなかった。なんというか、確かに俺の取り合いみたいな感じになっている。はたから観れば嬉しいけど、実際被害を被っているので微妙な心境だった。事の成り行きはいたってシンプル　俺が沢宮さんに襲われていたところに、ルナ、夜鈴、紅憐の三人がやってきた。沢宮さんはルナの姿を見るなり俺の上から退いて、黙って服を着始めた。俺はルナと紅憐に状況説明を強いら

れ、  
『ここまで来た理由を説明するわ。ちょうどいいから、沢宮さんも同席して貰える？』

この一言から、沢宮さんの機嫌が最高に悪くなった。ルナが夜鈴と紅憐を連れてやってきた理由は、簡潔に言えば真犯人の搜索である。そもそも何故、紅憐と一緒にいるのかというのが不思議だったのだが

「おい、瑠奈！ 探したよ、こんな所にいたんだね！」

朝雛紅憐は、街の路上でルナの姿を見つけて走り寄った。ルナは振り返る が、そこに何故彼女がいるのか解らない。彼女は今、確か昴の家にいるはずだ。

「……紅憐？」

「瑠奈。ちよつと話があるんだけど、いい？」

一体いきなり何の話だろう、と思いながら、ルナは「ええ」とだけ言っ て頷いた。

「あのさ。……瑠奈、本当に魔法使いなの？」

「え ？」

「沢宮さんから聞いたんだよ。瑠奈は魔法使いなんだって。それって本当なの？」

「沢宮……？ まさか、わたしと同じクラスなの？ でも、どうして彼女がそれを」

そこで、ルナはハツとする。守崎夜鈴が言っていた『沢宮』とは、確か彼女の事だったはずだ。そして沢宮は魔法使いに関わる家系の一つ。つまり彼女にルナの『言葉の魔法』ワードオブマジックは効いていなかった、という事。そもそも『言葉の魔法』ワードオブマジックはその行使頻度から本当にごく僅かな魔力で行使されている魔法だった。なので、相手が魔法使いならば、その魔法使いの持つ魔力量によつてはこちらの魔力が反発されて、無効化レジストされてしまう。対魔法使いの武器として使用できないのは、そう言った理由があるためであった。そして、夜鈴の調べで朝雛紅憐も魔法使いだと解った。自分も実際に彼女が死体を跡形も無く焼却しているところを見ているから、魔法使いだとは解っていた。だから、こうして自分の事を覚えている事に不思議だとは思わないが、沢宮花凜でさえそうであったとは少し迂闊だった。

「瑠奈、教えてよ。今この街はどうなってるの？ 連続殺人事件に魔法使いが関わってるって聞いたけど、瑠奈はそれと関わりがあるわけ？」

「……、ちよつと待つて紅憐。貴女、昨日死体を」

「死体？ ああ、うん……確かに見たよ。沢宮さんが死んでた。それで、怖くなってその場から逃げ出したんだ」

嘘をついている、とルナは思う。だって、彼女は確かに見た。昨日、死体を焼却している朝雛紅憐の姿を。だが、

「でも、沢宮さんは生きてる」

「……え？ どう言う事、紅憐」

「今日、あたしの家で会ったんだ。昨日死んだように見えていたのはフェイクで、本当は死んでなんかいなかったんだよ。あたしが逃げ出したあと、沢宮さんは自分の魔法であたしそっくりの姿になって、その死体を処理したって。今日の朝、死体を見に行った時になったんだけど、それはつまりそう言う事だったんだ」

紅憐の言っている事が本当ならば、紅憐は犯人ではない。死体がフェイクだと言うのがいまいち良く解らないが、そうなると沢宮花凜にも詳しく話を聞く必要がある。

「……その、紅憐そっくりの姿になる、って言うのは？」

「あ、うん。それが沢宮さんの魔法なんだって。他人と同じような顔や姿に自分を変装できるって言うてた。あと、他人そっくりな人形を作ることできるって。あたしが見た死体はその人形だったんだ」

「ねえ紅憐。今、昴はどうしてるの？」

「え？ ああ、それがさ。あたし昼間に一度家に帰ったんだけど、その時沢宮さんが家にいて、それから多分気絶させられて、あたしさっきまで寝てたんだよね。だから、昴なら今は家で一人なんじゃないかな」

「それはおかしいのよ紅憐。わたし知ってるの。貴女が一度家へ戻ってから、その後もずっと、あのばか兄は朝雛紅憐と一緒にいるのよ」

「それじゃ、まさか」

「ええ……、多分それはあなたの姿をした沢宮花凜だわ。急ぎまし

よう紅憐、何だかいやな予感がする……！」

そうして、ルナは紅憐と共に月城昴の住むマンションへとやってきていた。入り口付近に見慣れた顔がいる。守崎夜鈴だった。

「守崎さん！　ちょうどいいわ、貴女も来て。……あ、もしかして今の昴の様子、解ったりする？」

「……解らない。『鈴の呪縛』はすでに解いているから」

「そう、なら尚更ね。一緒に行きましょう守崎さん。昴が危ないかも知れない」

「わかった」

こうして夜鈴が加わり、紅憐と夜鈴は互いに自己紹介をする暇もなく、マンション内部へと突入。そのままエレベーターで一気に七階まで上がり、昴の部屋までやってきた。部屋のカギは、紅憐がスピアを持っていたので楽勝だった。そんな紅憐は、特に誰も聞いてすらないのに、

「なんか昔のよしみで持つてるんだよね。別に深い意味はないよ」と言い訳っぽく弁明した。そんなわけでドアを開いて中へ入った三人は、ナイスタイミングと言うべきか　沢宮花凜に、別の意味で襲われている月城昴を発見した。

「　ここまで来た理由を説明するわ。ちょうどいいから、沢宮さんも同席して貰える？」

事の成り行きを聞き終わったルナは、ある程度納得した後、唐突にそんな事を切り出した。この場にいるのは全員合わせて五人。

月城昴　不憫にも両頬に張り手の痕が一つずつ。それぞれルナと紅憐のものである。この中で一番の被害者。

ルナミスⅡサンクトリア 昴の義理の妹で、この場を仕切るようにそう言い出した『月光の聖女』<sup>ムーンライトプリンセス</sup>と呼ばれる魔法使い。

守崎夜鈴 この街で起きている事件の解決の為、ルナに付き合っている『幻想遣い』と呼ばれる魔法使い。

朝雛紅憐 昴の幼馴染にして、魔法使いの素質を持つと思われる少女。

沢宮花凜 昴のクラスメイトであり、ルナを明らかに敵視している『人形遣い』と自負する魔法使い。

そんな五人を集めて話をすると言う事は、確実に魔法使いに関する話だ。それは、ここにいる誰もが恐らく理解していた。

「まず、話を聞く限り沢宮さんも紅憐も、この街で起きている事件の首謀者ではない。真犯人は他にいる。さらに、沢宮さんはすでにそいつと一戦交えている そうよね？ 沢宮さん」

「……ええ」

「ふむ。となると、わたし達はとんだ勘違いをしていたってわけね。でもこれでようやく色々と見えてきた。犯人を誘き寄せる手段があるなら、あとは簡単よね。誘き寄せて倒せばいいだけの話なんだし」ルナがいとも簡単そうにそう言い放つのを見て、花凜は顔をしかめた。

「そんな簡単じゃないと思うけど。私は確かに一戦交えたけど、かなり強かった。とても敵う相手だとは思えない」

大分機嫌が悪いのだろう、花凜は口調を尖らせてそう言った。だが、そんな事は気にしていないと言う風に、ルナは続ける。

「沢宮さんが弱かったただけかも知れないわ。わたしと夜鈴、二人でかかれば確実よ」

どうしてそう言い切れるのか解らない、と言った顔で、花凜はルナの言葉に返答する気も失せたのか黙り込んだ。この辺りから、場の空気が不穏な方向へと流れ始める。

「とにかくよ。まあ一步譲ってその殺人鬼が強力な魔法使いだとしましよう。それなら仲間は多いほうがいいわ。……ねえ、沢宮さん

わたし達に、協力する気はない？」

以上、回想終わり。俺と紅憐は何度目だか解らない溜め息をついた。

「……にしても、これからどうなるんだろ。沢宮さんは、瑠奈ううん、ルナミス〃サントリアだっけ？ 彼女……ルナには絶対に協力しないだろうし。でも、そうしなないとすると、ルナは守崎さんと二人だけでこの事件の犯人と戦うことになるんでしょ？」

紅憐はさぞ不安だと言わんばかりの表情と声色でそう呟いた。確かに、それはいくらあの二人だからといって心配だ。俺はじかに彼女達の強さを知っているからまだ不安は少ないだろうが、それを知らない紅憐は本当に不安なのだろう。

「俺にも何か出来る事があれば……な。実際はただの足手まといにしかならないって解ってるから、余計にイライラする」

「だめだよ、昴。あんたはただの一般人なんだから、こんな事に関わっちゃだめだって」

紅憐はそう言うが、しかし 見てるだけなんてのはいやだった。放って置く事は、俺自身が許せないだろう。何も出来ないと解っていても、何かをしたい。この俺に出来る事があるなら。

「なあ紅憐。それなら、お前は どうして沢宮さんの力になろうとしたんだ？ お前だって俺と立場は同じじゃないか。危険なのは解ってただろ？ それなのにどうして」

「それは……」

「放って置けなかった、……違うか？」

紅憐は黙り込む。恐らく凶星なんだろう。

「俺だってそうだ。ルナも夜鈴も、沢宮さんだって放って置けない。もちろんお前もな。だから、何も出来なくなったら何か出来る事を探す。それに、危険なのはこの街に住んでるってだけで一緒じゃねえ

か」

「……どうして、昴はそこまでするんだろうね。いつも思うけど、あんたちよつとお人よし過ぎ」

「お人よし、ねえ。ちよつと違う気がするけどな……」

結局の所、俺はただ目の前で誰かが傷付くの見過ごすのが許せないだけだ。自分の知り合いがそうやって傷付くなんていやだ。見たくもない。これはただの俺の独りよがりで、お人よしとはちよつと違う気がする。

「ま、でもあんたがそう言うならあたしもそうだよ。今回ののはちよつと目を瞑れないかな。沢宮さんは何だかんだ言ってまた『敵』と戦いそうで危なっかしいし、かといってあれじゃアルナに協力するとも思えないし 誰かが側にいてあげないと、ね」

「なんだ。お前、沢宮さんみたいなのがいいのか？」

「……は？ なにそれ、どゆこと？」

俺がそれだけ言うと、紅憐は本気で意味が解らないと言った顔で目を丸くさせながら言う。

「え、だってお前女の子好きじゃねーの？ 一年前の言葉、一応まだ覚えてんだぜ。『あたし男に興味ないから。付き合いたいなら女になつてよ』だっけ？」

「……、あんた。まさかあれ……本気にしたの？」

「え？ いや本気もなにも……え？」

紅憐は飽きたような表情で、

「あのねえ、言つとくけどあれただの冗談だから。つーかあんたも冗談でしょ？ いきなりばかみたいな事言うから、適当にあしらつただけなんだけど」

「……お、お前。それはマジデスカ？」

「マジですけど？」

「いや、あの。……俺こそ、あれマジだったんですけど」

瞬間、凍ったように空気が固まった。俺の部屋の静寂とは裏腹に、洒落にならないくらい口の喧嘩がリビングから聞こえてくるが、そ

れが聴こえなくなるくらいの空気。なんていうか、えーと。

「……、へえ。そうだったんだ」すると、突然　紅憐がにたりと不気味な笑みを浮かべて呟いた。「なんだ、そっかそっか。昂ってばあたしの事。ふうん、昂があたしの事をねえ。……うん、なんていうか、その。ごめん」

「うが　　ッ！　ごめんじゃねえよこのばか！　あのなあ、俺がああ後どれだけ思い悩んで涙流して後悔したか解るか！　人生で初めて告った相手が同性しか愛せないだなんて言われて、それっきりジンクスにさえなりかけたっつーの！」

「そんな事言われても……さすがにあれじゃ、勘違いもするって。なんだっけ……『なあ紅憐、とりあえず俺と付き合ってみねえ？』だったっけ？」

こいつは古い話を……いや、俺もか。

「しょうがないだろ、初めてだったんだし。しかも相手はお前だし。幼馴染だし。今更って感じじゃねえかよ」

「そりゃ、それは解るけどさ。……あー、そっか。そりゃ気付けなかったなー。ううん、こりゃあたしの人生最大のミスだね」

「なんでお前の人生最大のミスなんだよ。こっちが言いたいって、それ」

「ん？　まあ、だって……」紅憐は何故だか急に頬をほんの少し紅潮させて、「今更だけど　あたしも昂の事、好きだったから」

「……は？」

「二度も言わせないでよ。だーかーらー、あたしもあんたの事好きだったんだって」

え、何それ告白？　告白ですかよりもよって一年後の今日？

「お前……それはないわ。それはねーよ。じゃあなんだ、実は一年前の俺達は見事に両思いでしたーってことかよ？」

「だねえ。あはは」

笑い所なのか、これ。俺も笑うべきなのか。

「なんだよ……。うわ、シケる……。俺の青春時代……」



「ご、ごめんって。ほ、ほら。別に　その、さ。今からでも遅くはないわけだし」

「はあ、今ってお前……お互い好きだったのは一年前の話で　」  
そうだ。俺の初恋は一年前、ただの冗談でとくにぶち壊しにされてるんだ。それを今からでも遅くないって　あれ、それってどう言う意味だ？

「だから　」紅憐は今度こそ、耐えられないといった表情で顔を赤らめて、「あたしは、今でも昴のこと……好きだから」

守崎夜鈴は、目の前で口論する二人の少女を見つめながら、無表情を装っていた。実際、内心では正直な話早く終わってくれないものかと心底思っている。と、いうか逃げ出した昴と朝雛紅憐について行けばよかったのかもしれない。今ではもう、立ち去るタイミングさえない。しかしこの二人、放っておいたら何をやり出すか解らない。確かに一人くらい、こうして監視役が必要なのかも知れないけれど。いつもそう言う役目は私だな　なんて、柄にもなく心の中でばやく夜鈴だった。

「とにかく、もうこれ以上月城くんに付きまとうのはやめてよ。月城くんは私が貰うんだから！」「何そのエゴ？　いい加減にしてよね雌豚。貴女みたいな性欲の塊にわたしの昴を預けられるわけないでしょう？」「め、雌豚　ッ！？　この寄生虫が、よくもそんな言葉を吐けるもんね！　どうせ月城くんのことだって、貴女の非人道的な洗脳魔法で無理やりそう仕向けたんでしょ！」「……なにそれ、心外にもほどがあるわ。それにそれを言うなら貴女の魔法だって十分非人道的だと思うけれど？　他人の姿になったり、他人そっくりの人形を作ったり。ばかみたい。それなら家にこもって、昴の人形でも作って一人で自慰行為にでもふけっとけば？」「こ、この……！　さっきから聞いてれば下品な言葉ばかり！　雌豚で性欲

の塊なのは貴女のほうじゃないの!？」「言ってくれるわね。貴女みたいな弱小魔法使いが、このわたしに楯突こうなんてのがまずそもそも間違いだってことに気付きなさいよ」「弱小? 私が弱いって何で言い切れるの? そんなに言うなら今ここで決着をつけようよ」「へえ、面白いじゃない。いいわ、受けて立つてあげる。ま、どうせ一分も掛からずにわたしがボコボコにして終わりだろうけど?」

言い合いながら二人は立ち上がり、今にも本当に殺し合いを初めてしまいそうな雰囲気だった。夜鈴はそろそろか、と思いながら二人の間に割って入るように、

「……いい加減にして。ここは昴の部屋。それに、今ここで貴女達が潰し合ったら、今回の事件の解決はどうするつもり?」

う、と二人は同時に夜鈴を見て呟く。なんだこの二人、つまりそういう事か　と夜鈴は理解する。

「でも、守崎さん。こいつは仲間にしてもいつ後ろから攻撃されるか」

「私がいつ仲間になるって言ったの? 心配しなくても仲間になんてならないから。寄生虫の力なんて借りなくても、こんな事件」  
「黙って」

ぴしゃり、と。夜鈴が今までにないくらい怒気のある声で言い放った。それには、さすがの二人も驚いて、言葉を失ってしまう。

「今ここで貴女達が口論するのは構わない。でも事件の解決に支障が出るようなら私は見逃せない。それに、そんな事をして昴がどう思うか、考えたら解らない?」

「……、ふう。そうね、ちょっと頭に血が上ってたみたい。ここでこんな雌豚を叩きのめすために、限りある魔力を消費するなんて、無駄にもほどがあるものね」

「……ルナ」ぴしゃり、と軽く怒気の籠った声音で夜鈴が言い放つ。「私はもうこれ以上、貴女達がいがみ合っている姿を見るのは耐え切れない。私だって我慢出来ない事はある。……もしそうなってし

まったら、さすがの私も加減が出来ない」

うわ怖っ、とルナは心底思い、それ以降喋る事はなくなった。夜鈴は次に花凜のほうへ顔を向けると、静かに呟く。

「沢宮さん。貴女が本当に昴の事を想っているのなら。二人で喧嘩している場合ではないってことぐらい、解る？」

「……そうですね。私がちよつとばかりでした。ルナの事は嫌いだけど、今は私情を挟んでいる場合じゃないですから」

花凜の言葉に夜鈴はこくりと頷いて、

「そう。解ればいい。二人とも、無理に協力し合えとは言わないけれど。この事件が終わるまでは、とりあえず一時休戦」

「……解ったわよ。ふん」

「意義はないです。月城くんのためですから」

「オツケー。それじゃ、チームを分けることにするわ」

口喧嘩が終わったのか、唐突にルナが俺の部屋までやってくるなり俺と紅憐をリビングまで呼び出すと、そんな事を言い出した。結局、紅憐の言葉の真意を聞き出すことは出来なかった。まさかとは思うが、あいつはずっと俺の事を好きだったのか。いや、でもよりにもよって紅憐がなあ　なんて考えながら、俺はルナの話を聞いている。

「とりあえず、二つに分けるわ。わたしのチームと沢宮花凜のチームね。敵は強力な魔法使いよ。油断して掛かれば負けてしまうかもしれないし、策は多いほうがいいわ。だから、ここは団体での戦闘行動における基本　『陽動』と『奇襲』を用いようと思う」

つまり、まずチームを二つに分ける。

『陽動』　敵を誘き出すためのチーム。

『奇襲』　誘き出した敵を倒す事だけに専念するチーム。

ある程度のチームワークが必要になるだけに、俺は少し不安を隠

せない。ルナと沢宮さんの先程までの仲を見ていれば尚更だった。

「まずは『陽動』チームだけど、これは沢宮花凜に担当して貰う。一度誘き出すことに成功しているのなら、二度目だって出来るはずよ。何か意義はある？」

「……特には。それで、具体的な作戦内容は？」

なんと、沢宮さんは呆気なくルナの要望を受け入れた。この短い間に何があったのだろう。仲直りをしたわけではなさそうだから、とりあえず一時的なものなのだろうか、と考える。

「まず『陽動』チームが敵を人目のつかない場所。そうね、西条公園辺りがいいかしら。あそこは夜になると人がいないし。そこに誘き出して、わたし達『奇襲』チームが敵の不意について倒す。これだけよ。シンプルで解りやすいでしょう？」

「……ふうん。逆にシンプル過ぎて、相手にバレるんじゃないの？」

「それは解らないけれど、少なくとも今回の事件を見る限り、敵は複数の魔法使いを相手に戦った形跡は皆無。つまり、わたし達みたいなのを相手にするのは初めてなのよ。それなら、複数で攻める一番効率の良い方法を使ったほうがいいわ」

「ま、いいですけど。それで、チームのメンバーは？」

「そうね。『陽動』チームには沢宮花凜と、その率いる人形。貴女はわたし達の姿をした人形を遣って、敵を欺く。そして『奇襲』チームはわたしと守崎さん。基本的に気配を隠し、姿も消せる守崎さんが奇襲攻撃の担当で、わたしはバックアップに回ろうと思ってる。どうかしら」

ルナがさくさくと作戦を説明していく中、俺 恐らく紅憐もだ

は、何も力になれることはないのかと考える。ルナの説明を聞く限り、俺と紅憐ははたから戦力外扱いだ。これではただの蚊帳の外である。

「私は構わないけれど。……沢宮さんは、どう？」

「別にいいですよ。本当は一人でやるつもりだったけど、月城くんのためだと思えば、これくらいの屈辱は甘んじて受けます」

「……そう」

見る限り、どうやら夜鈴と沢宮さんは仲が良いように見える。沢宮さんが嫌いなのはあくまでルナだけのようだった。ていうか、俺のためって何だ？

「よし、作戦決行よ！」

ルナが立ち上がり、そう言って声を張り上げる。結局、俺と紅憐は何も出来ることが決まらないまま、作戦タイムは終了してしまった。

西条公園、その中心部に位置する噴水広場。沢宮花凜は複数の人形を精製し、そこに配置する。噴水の前に立つのは三体。ルナ、守崎、そして自分の三つである。三体の人形が、まるで本物の彼女達のように立ち竦んでいた。術者である自身は身を隠し、出来る限りありったけの魔力を人形に注ぎ込む。昨日はこれで、膨大な魔力を感知したあの殺人鬼が現れた。誘い込まれたと承知の上でやってきた様子だったし、あの殺人鬼は恐らく戦いを望んでいる。だから来るはずだ。危惧など必要ない。必要なのは、迫り来る殺人鬼との戦いへの心構えだけ。時刻はもうすぐ今日が終わりを告げる程度のものになっていた。薄暗い公園にはかすかな電灯の明かりと、空に浮かぶ月の光だけ。これから始まるのは、正真正銘 魔法使い同士の殺し合いだ。相手に加減と言う言葉は求められない。ならば、自分は自分でやれるだけの事をするだけだ。それにしても良く考えると、私はそれなりに魔力感知が出来るほうだと思う。魔法が行使された時 ようするに体内から魔力が外側に放たれた時なら、それがどんな極僅かの魔力であつても感じ取れる。だが、それも自分の周囲での話だ。いくら強大な魔法が行使されたと言っても、実際に感じ取れるのは恐らく自分の周り、半径十メートルくらいだと思う。しかし、あの殺人鬼はかなり敏感に魔力を感知している。

恐らく自身の意思で、だ。そして、ルナや守崎さんはあまり魔力を感知するのが上手だとは思えない。感知さえ出来るのなら、今回の事だって簡単に見破れたはずなのだから。魔法使いにもそういう風に感知しやすい人としにくい人がいるのだろう。それがイコールとして強さに比例するかどうかは別として、敵は魔力を感じ取りやすい相手だと言うのは確かだった。今回の陽動作戦　私の『陽動』は成功するだろう。しかし、本命である『奇襲』は成功するのだろうか？解らない。もし失敗したらどうなるのか。そうになったら作戦も何もない、総力戦になるかもしれない。

（あの殺人鬼の魔法の正体さえ掴めれば、なんとかなるかも知れないのに……）

それは、目に見えない攻撃。触れる事なく私の人形をバラバラに切り裂いた魔法。どうすればそんな事が出来るのだろう。念じるだけで人間をバラバラにしてしまえるのだろうか？　ここで少し後悔する。ルナはともかく、守崎さんならもしかすれば何か掴めたかもしれないのだ。作戦会議の時にでも聞いておけばよか

「なあ、オマエさ。もしかして二度も同じ手が通用すると思っ  
てんの？」

すぱん、と言う音がする　気が付けば、左腕がものの見事に切断されていた。

「挨拶代わりだ。気に入って貰えたか、魔法使い」

「い、あ……いやあああああああああああッ！」

あまりの気持ち悪さに、悲鳴を張り上げる。背後に立っている人物に振り返って、絶叫しながらその顔を凝視する。間違いない、こいつが『敵』の殺人鬼

「あのさア。一応言っておくけど、あの人形じゃもう俺は欺けないぜ？　なんてったって匂いが一緒だ、いくら姿形を精密に作り上げたところで、通う魔力がおなじじゃあバレバレ」

ぶおん、と風が震える音がする。音が聞こえたのと同時に、次は右腕が無くなった。

「ッ！」

声にならない悲鳴。痛みなんてものを超越した、腕がない不快感。両腕はいともあっさりと、地面に落ちて鮮血を撒き散らしている。

「次はどこがいい。ここはセオリー通り、脚か？」

また風の音。今度は両足がいつぺんに切り落とされる。四肢をなくした身体は不自由にも地面に落ちこちる。広がる血。辺りが真っ赤に染まっていく。だけど、私はここでようやく理解した。この殺人鬼の魔法を。仕組みさえ理解してしまえば、後はなんとかなる。「ああそうそう、一応言っておくけど仲間はこねえぜ？ 俺の魔法でオマエの悲鳴は向こう側まで届かないようにしてある。ま、本来は殺す時の悲鳴を聴こえないようにするために使ったが……複数の魔法使いを相手にするってのは初めてだが、こう言う風に使うこともできるわけだ」

作戦の形式があだとなったのか。人形だけを立たせ、この私はこうして隠れていたことが裏目に出てしまった。こうなってしまうえば、『奇襲』チームの参戦は期待できない。だが、それならそれで、やってやる。こうなったのは、私があのルナの力を借りずとも殺人鬼を倒せるチャンスなのだと思います。良い。

「……貴女の魔法 『風』 ですね？」

四肢を失った醜い姿で、地面に転がりながら目の前の殺人鬼に言い放った。

「へえ、良く解ったな。……そう。オレの魔法は風を操れる。オマエの身体を切り裂いたあれは、一般で言う『カマイタチ』ってやつで、悲鳴をふさいだのはただ空気を振動して伝わる音を、空気の壁を作り出して止めただけだ」

風、というよりは空気を自在に操る魔法。五大元素の一つである『風』系統を操る魔法使い。それがこの殺人鬼の正体であった。

「なるほど、説明感謝します。これで、心置きなく対策が練れる」

「は。今のオマエに何が出来るって？ 大体、四肢を失っておきながら……」

それだけ言つて、殺人鬼ははつとした表情になった。でも、それはさすがに気が付くのが遅すぎる……！ 私は人形との意識リンクを解除して、本体へと意識を戻す。

「チエックメイト」

そして。私は、殺人鬼の背中に長い剣を突きつけた。第三の魔法

『物質精製<sup>ワークス</sup>』によって作り上げた、私の得物である。

「……なるほど。これでさえ『人形』だったってわけか？」

「そう。貴方が魔力に対して敏感だと言うことは解ってましたからあの噴水上に置いていたのは一つ目のフェイク。ここで隠れていたように見せかけていたのが二つ目のフェイク、ってこと」

チッ、と殺人鬼は舌打ちする。

「魔力の質でさえコントロールできるなんてな。なかなかどうして、今までに会えなかったタイプの敵だ。嬉しいぜ。だが」

ふと、背筋が凍る。何故だか解らないが 嫌な予感がした。

「オマエ、何か勘違いしてないか。……これは殺し合いだ。ただの力比べじゃない、真正正銘の命のやり取りだ。その点で言えばオマエは今まで会った魔法使いの中じゃ、一番アマイ」

ぶわ、と。風が殺人鬼の周囲を包み込むように巻き上がり、私はその勢いで吹き飛ばされてしまった。

「背後を取れば身動きができないとも思つたのか、ド素人。オマエはさ、俺の背後を取った瞬間、ソイツでココを一突きしておくべきだったんだよ」

言いながら、自分の左胸を親指で差す殺人鬼。迂闊だった。そして、甘かったのだらう。この男の言う通りだ。私はなんというミスを犯してしまったんだ

「さて、と。ま、確かにオレは視覚で認識できねえとソイツの身体を切り刻むことは出来ない。だからまあ。 今度こそ、本当に終わりだぜ。魔法使い」

やられる、と思つた。今度こそ本当にこれは自分の身体だ。人形ではない、本体である。あの身体を切り裂く空気の刃を食らえば、



さっきの人形のとくと同じことになるに違いない。相手の魔法の正体は把握した。何か、対策を

ぶおん。

風の唸る音が聴こえ、思考が途切れ、瞳を閉じ　しかし、切り裂かれる痛みが身体に走る事はなく。

「……なんだ、オマエ？」

閉じた瞳を開くと、そこには見覚えのある少女の背中姿。

「助っ人だよ」

朝雛紅憐が、立っていた。

「助っ人、だと？　魔法使いだな。　オレの魔法に何をした？」

「さあ？　別に。何もしてないんじゃない？」

「ウソを吐くな　確かに魔力の動きを感じた。オマエ……　どうやってオレの魔法を消した」

「君は鋭いなあ。あたしは初心者だから、そんな事わかんないや。

……でもまあ、何かをしたってのは本当だけど　それを君に教える必要はまったくないと思うよ？」殺人鬼に対し不敵に笑う朝雛紅憐は、まるで本人だとは思えない口調でそう言つて、「沢宮さん。とりあえずこいつさ、あたしだけで楽勝みたいだから。ルナと守崎さんのとこまで、走れる？」

「え、ええ……でも」

「何ごちやごちや言つてんだよ　！」

殺人鬼は頭にきたのか、こちらへ目掛けて『カマイタチ風の刃』を放つ。だが、

「だから効かないって。……ごめんだけどさ、あたしとあんたの相性は最高に悪いみたい」

朝雛さんは何もしていない。いや、見た目では何もしていないだけで、確かに魔力を行使しているのが解る。　まさか魔法を使えるのか？

「ほら、ぼおつとしてないで。早く逃げてよ沢宮さん。ここはあたしに任せて」

「わ、解りました……すぐに守崎さん達を呼んできますから……！」  
それだけ応えて私はその場から逃げ出すように立ち去った。背後からの攻撃はない。恐らく全て朝雛さんが防いだのだろう。朝雛紅憐　まさか、彼女に魔法使いとしての自覚があったなんて。

「ふう、行ったみたいだね。ま、この様子じゃ守崎さん達が来る頃には終わってそうだけど」

あたし　朝雛紅憐はそう挑発的に呟いて、殺人鬼に振り返る。男はただ、ワケが解らないと言った表情であたしを見つめていた。

「なんなんだよオマエ……！　どうしてオレの魔法が効かない？」  
「言っただろ、相性が悪いって。あたしさ、こう見えて結構短気だから。そろそろ終わらせちゃってもいい？」

「ッ……！」　殺人鬼は魔法を行使する。馬鹿の一つ覚えみたいに何度も『カマイタチ風の刃』を連発し、あたしはそれをことごとく潰す。

「もう飽きたよ殺人鬼さん。これが殺し合いだって言うのなら。殺されても、文句は言わないよね？」

あたしはそれだけ言っつて、殺人鬼に踵を返す。

「おい、オマエ……どこに行くつもりだよ……！」

「え、だつて」　あたしは振り返ることなく去りながら、「もう終わってるからね」

そうして。背中越しに、声にならない悲鳴を聴いた。

朝雛紅憐が魔法を行使出来るようになったのは、つい数時間前のことだった。しかし、彼女が自身を魔法使いだと認識したのはそれ

より以前、沢宮花凜の部屋で話をした時。

「この街には、私が調べる限り三つの魔法使いの家系が存在します」

沢宮花凜は淡々と、この街に住む魔法使い達の話始めた。

「私が知っているのは、この街の魔法使い達を統制していると思しき家系である『守崎』、それと過去から親密な関係を持つていたらしき『沢宮』と『朝雛』。他にもいるのですが、私にはこれだけ調べるので限界でした」

この街に潜む魔法使い　現実的に考えれば有り得ない存在が、こんな身近にあるとは思わなかった。

「『守崎』は置いておくとして、その他の二つの家系。これはもう、言わなくても解ると思いますけど、私の実家である『沢宮』、そして貴女……『朝雛』の家系です」

「……それで？」

「はい。残る『守崎』ですが、正体が掴めません。存在自体は解っているけれど、その中身まで手が出せない。私は、瑠奈さんがその『守崎』ではないかと疑ってます」

「瑠奈が？」

「ええ。彼女も魔法使いなんです。どんな魔法を扱うのかはいまいち解りませんが、恐らく他人の意識を操作する類のもの……。それも、無い事がある事だと思い込ませるものだったり、記憶を失わせるものだったり」

記憶喪失にする魔法、と言う事は。昴はその魔法にかかってしまった？　と、紅憐は考える。

「でも、それじゃあどうしてあたし達にその魔法は効いてないの？」

「それは恐らく私達が魔法使いの血を受け継ぐものだから。身体の中に秘められた魔力の影響で、瑠奈さんの魔法が効かなかった

そう考えるのが妥当ですね」

「……続けて」

「はい。そもそも、私だって昔から魔法使いだったわけではないん

です。ほんの少し……一ヶ月くらい前に、とある男性に会いました。その時、私は一瞬で自分が魔法使いなんだと自覚したんです」

そう言って、沢宮花凜は自分が魔法使いになった経緯を語り始めた。この街で起こっている連続殺人事件の犯人を逃がしたこと。その場で気味の悪い男に出会い、気が付けば魔法使いになってしまっていたことを。

「私の魔法は、主に『土』を利用して形のあるものを精製するといふものです。これも、魔法使いになった瞬間から何故か理解していました。まるで、昔から知っていたかのように。あと、例外として人体　人間や動物の『肉体』、あとは一部の『物質』を自在に変化させる事もできるみたいです」

「なんだか、あたしのイメージとはまた違っただね、その魔法っていうのは」

「……でしょうね。と言つても、これは私の魔法と言うだけで、魔法使い個人によって扱う魔法の種類と言うのはまったく異なってくるみたいですけど……」

「ここまで来ると、さすがにちょっと話が突拍子すぎてて信じたくても信じられないな」

「それは解ります。ですけど、実際に私は魔法を扱える。そして、朝雛さん　貴女にも確実にその素質が、魔法使いの家系に生まれただ血が眠っているはずなんですよ」

私　沢宮花凜は、逃げるように走る自分に対してこれまでにないほどに憤怒していた。朝雛さんに任せた事はまだいい。彼女がどう言う経緯で魔法を行使出来るようになったのかは知らないが、あの殺人鬼の魔法を一切にして無効に出来るような相性を持つ魔法を使える　それだけの事実があれば、彼女があれの相手をするのは至極当然だ。その点に関して特に負い目を感じているわけではない

し、問題はそこではない。私があの殺人鬼の扱う魔法を見事看破できたと言うのに、何も出来なかった。相手の正体さえ解れば対策なんて簡単だと頭で思っている、実際は何も思いつかなかった。なんて体たらく。あの時、背後を取った時に致命傷を与えなかった事と言い、私はどうして詰めが甘いのか。実戦慣れしていないと言え、聞こえは悪くないが、それはただの言い訳に過ぎない。私は、一時でも殺し合いに参加していたのだ。魔法使い同士の、互いの魔法をぶつけ合う殺し合い。魔法使いとなってまだ一ヶ月程度だけど、それなりに自分の納得がいく魔法を作り出せ、結果も出してきた。

第一の魔法『人形精製』で作り出す人形は、どこまでも精密で完璧さを誇る自慢の人形だし、

第二の魔法『擬似変装』<sup>トレス</sup>によって自らの肉体や服装を変化させ、他人に偽装する事だって、姿形だけではなく、中身もそれなりに真似が出来るようになってきた。

第三の魔法『物質精製』<sup>ワークス</sup>の精度だって悪くない。自分が思い描いた物をきちんと作り上げる事が出来る。

だと言っている。どうして私は、こうしておめおめと逃げているんだろう？

「……ああ。そっか」

そこまで考えて、私はようやく一つの結論に至る事が出来た。どれだけ上手く魔法が使えるといっても、私は結局その三つの魔法しか扱えない。つまり、相手の魔法の正体が解ったところで、それに対応した魔法なんて咄嗟に使えるわけがなかった。

「は……はは」

なんて無様。結局、私はただの初心者だったと言う事か。朝雛紅憐がただの偶然、相性の良さであの殺人鬼と対峙できているのだとしても、それが何故か今は少し羨ましかった。

あたし　朝雛紅憐がその男と初めて出会ったのは、沢宮花凜の作り上げた死体を偶然発見し、逃げ出した後だった。もうすぐ自宅に到着する、その道端にその男はいた。見るからに身体の弱そうなどちらかと言えば頭を使う人間のような印象を受ける。クラスに一人はいそうな眼鏡生徒みたいなイメージ。しかし、年齢は外見だけで見ると自分より一回りほど上に見えた。

「……だ、誰？」

あまつでさえあんな死体を目撃した後だ、あたしは自然と警戒心を強める。まさかこの男が殺人犯とは思えないが、しかしただの間だとは到底思えない何かを感じ取ったのである。

「お初にお目にかかるよ、お嬢様。見たところ逃げているようだけれど、何かあったのかな？」

なんだこいつは、と思う。だが口が開かない。何か目に見えない重圧感<sup>プレッシャー</sup>を押し付けられている　そんな気がして。

「……ふむ。死体でも見たような顔だね？」

「　ッ！？」

「大丈夫、安心していいよ。死体はもうあそこには無い。目撃者は君だけだ。アレは処理すべき人間が処理したからね」

今、この男は何と言った？　まるであたしが見てきたものを知っているかのような　いや、違う。知っているのだ、この男は。あの死体の事も。あたしがそれを目撃し、逃げてきたことさえも。

「そんな疑うような眼をしないでくれ。……いやなに、僕も『監視者』なんて役割を担っていると、知りたくないことも知っておかなくてはならなくてね。舞台<sup>ステージ</sup>の準備は最終段階に入っている。あとは君だけさ。全てが目覚めた時、ようやく幕は上がる事になるのさ」

「魔法……使い？　まさか　」

「そう、お察しの通り。僕が沢宮花凜の魔法使いとしての『回路』を開いてあげたんだ。もう話は彼女から聞いているね？　それならもう知っているはずだ。君もこの街に根付く魔法使いの血筋を引く

者の一人なんだよ！」

この男が、沢宮さんが言っていた気味の悪い男か。確かに気味が悪いという点は同意見だ。何か得体の知れないものをこの男から感じる。これ以上この場所に留まっていたくないぐらいに。出来る事なら早く家に帰って部屋でベッドに籠りたい気分だった。

「とにかく今日は待ち合わせの約束をしにきたんだ。君がもし、明日の夜まで生き延びる事が出来たら、夜の十時にあの路地裏まで来るといい。その時、君に『力』を授けよう」

「生き……延びる？ それってどういう」

「それくらいは自分で考え、悩んでくれよ。そうでなくては意味がない。そう、この戦いに参加するというのなら、それ相応の覚悟を示して貰わないと。なんてったって君はあの沢宮君とは違う」

何かを言いかけたまま、男はその場から踵を返し、立ち去った。

これ以上何かを聞きだせるとも思えなかったあたしは、やりきれない気分の中、その場から走り出した。生き延びる事ができればそれはつまり、生き延びる事が出来ない可能性があると言う事。あたしは、まさか誰かに命を狙われている……？ と、そこまで考えて気付く。先程言っていたあの男の言葉、

『死体はもうあそこには無い。目撃者は君だけだ。アレは処理すべき人間が処理したからね』

目撃者はこの携帯を拾い上げてその場から逃げ出した自分だけ。そして、それを処理した者がいる。

『あ、は……はは。なんだ、そう言う事か』

つまりもう巻き込まれていたのだ。この魔法使いだなんていう馬鹿げた存在達の戦いに。沢宮さんを殺した犯人、それがこのあたしを狙っている。あの男はそう警告し、もし一日逃げ切る事が出来れば、逆に言えばこのまま一日生き残り、この戦いに自ら参加する勇気があれば、このあたしにその戦いに参加するに相応しい力を与えよう、と言う事。

なんてことだ。あたしはすでに、その選択肢を選ぶ権利すら失っ

てしまっているだなんて。生きて戦うか、死んでしまうか　そんな理不尽な選択肢は、もはや二択とは言えない。一方的な、こじつけるような悪意のある強制だ。　生き延びるしかない。ひとまずは自宅に帰って、これから一日生き延びる為の術を考えよう。あたしは出来る限り冷静さを保つように、夜の街を駆け抜けた。

そうして生き延び、力を得たあたしは。

そのついでと言うように、この戦いの意味　　真実を知った。

俺　月城昂は、戦いの終わりを知らされ、西条公園までやってきていた。何の力もない俺と紅憐は、自宅待機を命じられていたのである。確かに俺がしゃしゃり出る幕ではない事も明かだったわけで　実際問題、俺が出ていってもただの役立たず、彼女達の足を引っ張るだけに違いなかった。まあ個人的な意見を言わせて貰えば、不服ではないと言えば嘘になるんだが。だがそんな独りよがりな気持ちを抑えてでも、俺は彼女達の邪魔だけはするわけにはいかない。確かルナや夜鈴が言うには、俺にも魔法使いとしての素質があるらしいが……まったくそんな力を使えるような気配はないし、正直まだ半信半疑もいとこだった。俺みたいな一般人は一般人らしく振舞っている　とはルナのキツイ言葉なのだが、俺はそう言われ、納得するしかできなかった。力が欲しい。彼女達を手助けできるような、そんな力が　そうは思うものの、もうそれも意味はない。終わったのだ、全て。俺の知らぬうちに、俺の手が届かない場所で何もかもが終幕を迎えている。それでいい……これ以上、彼女達が戦い傷付く姿なんて俺は見たくないから。

「……よお、ルナ。夜鈴から知らせを受けてきたんだが、結局どうなったんだ？」

俺は、噴水の前で腕を組んで何か不服そんな表情を浮かべている



少女・ルナに向かつてそう問いただす。何やらルナは物足りなさそうにそわそわしている。一体何があったというんだろ、俺は事が終わったということしか知らないから、あらましを説明してもらいたいのだが。

「なあ、おい。……ルナさん？」

「あーもう、うるさいわね」何ともご機嫌ナメな妹が答えた。「この街で起きていた事件の殺人犯である魔法使いは死んだわ。それも、わたしの出る幕なしにね」

「何だつて？ どういうことだよ」

「ようは陽動チームだけでカタをつけちゃったつてわけ。とは言っても、そこにいる沢宮さんはまったく役に立たなかったらしいけど」とか言いつつ、ルナは公園の端っこにあるベンチに座つてぐったりとしている沢宮花凜に向かつて親指を立てた。……なんだか沢宮さんがひどく落ち込んでいるように見えるのは、俺だけだろうか？「つて、ちよつと待て。陽動チームには沢宮さんしかいなかったじゃないか。それでその沢宮さんが役に立たないまま、陽動だけでカタをつけた……つてのは一体どういうことだよ？」

「それはあたしが話すよ」ふと現れたのは、紛れもない紅憐だった。「あの魔法使い、風や空気の力を自由自在に操る魔法使いだったんだよね。だから、あたしの魔法がとっても相性よくてさ、ボツボツにできちゃった」

紅憐は何でもないかのような仕草で言い放つ。……おいおい、待てよ。魔法だつて？

「紅憐、お前……」

「あたしもね、魔法使いなんだよ。昂」

「ウソだろ……？ だつてお前、話し合いのときには何も喋らなかつたじゃないか！」

「うーん、とは言つても、魔法使いになったのだつてついさっきなんだよね。だからあたし自身、どうしていいのか解らなくてさ。こんななり立てはやほやの新人が、いきなり戦力になんてなれっこ

ないじゃん？ まあ、結果だけ見ればちゃんと役立てたから良かったんだけど」

魔法使い。ルナや夜鈴、沢宮さんと同じ存在　紅憐でさえも、そっちの領域に脚を踏み入れちまったってのか。

「それで……その、犯人は」

「うん？ ああ、今頃は多分灰になっちゃってるね。あたし、火の魔法が使えるんだ。何でも燃やしたり、炎を放出したりできるわけ。ネタバレしちゃうと、敵の魔法は風というか空気を媒介に使った魔法だったから、その空気　言い換えれば酸素だよ。それらを跡形もなく燃やしてしまえば、敵の使う魔法による攻撃だってあたしは食らわないってわけ。あとは好きなように、敵自身を燃やしてしまえば、終わり。あつけないよね、こんな終わり方ってさ」

「……紅憐、貴方間違いない天才よ」ふと、唐突にルナが呟く。「今日、その力を手に入れたって言うけど……それでそこまで使いこなせちゃうなんて、わたしの常識を逸脱してしまってるもの。正直、驚きを通り越して呆れちゃうくらい。確かに敵の力を見抜いたのは他の誰でもない、沢宮さんだとしても、それを知ってすぐに対応できるなんて、初心者じゃまず不可能だわ。才能あるわよ、紅憐。間違いない、わたしやその役立たずよりはね」

ギロリ、とベンチに座っている沢宮さんがルナの言葉に反応して睨みつける。ただ、距離が結構あるためか、それとも言葉を発する気力さえないのか　彼女はそれだけすると、また落ち込みモードへと戻っていった。……重症じゃないか、あれ。

「ってことは、これで一件落着……もう争い合う必要はない、ってことでいいんだよな。夜鈴の疑いも晴れたし、街で起きてる事件の犯人もいなくなった。これでルナは目的を達成できたし、俺たちは平穏無事な生活に戻る」　「そこまで俺が言った辺りで、ルナも紅憐も何故か顔を伏せてしまう。」「……おいおい、なんだよ二人とも。せっかく全部終わったのに、辛気臭いツラしてんじゃないよ。……なあ、聞いているのか？」

いやな予感、とはこういう事を言うのだろうか。何かまだある  
終わったはずなのに、まだ終わっていない。そんな予感、とい  
うよりは、場の空気から感じられる確証めいたものがひしひしと伝  
わってくる。まさか、まだ何かあるってのか？ 殺人鬼を倒して、  
全て終わったはずなのに。

「……終わったよ」口を開いたのは紅憐だった。「確かに、この街  
で起きていた事件は全部カタがついた。でもね、まだ続きがあるん  
だよ。やり遂げきれしていない、果たせていない事が。……だよ、  
ルナ？」

紅憐は、隣にいるルナに向けてそう告げる。だが、それを聞いて  
いるのかいないのか、顔を伏せたまま黙り込む一人の少女

「……なんだよ、まだ何かあるのか？ なあ、ルナ。お前はこの街  
で起きている事件を片付けるためにきたんだろ？ それならもう、  
全て終わったじゃないか……！ 顔を上げて答えるよ、ルナ。一体、  
まだ何があるっていうんだ？」

「言いたくないんだよ、昂」一人、全てを知っているかのような口  
調で呟く紅憐。「ルナだって、きつと本意じゃないはずだからね。

もしルナにその気があるんなら、今頃ここは第二の戦場になってる」  
「戦場……？ まさか、まだ戦いがあるってのか。敵は？ 今度は  
どこのどいつが俺達の敵なんだよ！？」

「……わたしよ」前髪で目を隠したまま、ルナが口を開いた。

「なん……だつて？」

「わたしは、ロンドンから特殊作戦遂行の為に派遣された、『月光  
イトプリンセス』の聖女」ルナミス「サンクトリア。サンクトリア家の次女にして、

光を司る魔力を持ち、精神学に通ずる魔法を行使する魔法使い。…  
…そして、そのわたしが請け負った任務の内容は」次第に震え  
ていく声を噛み締めながら、ルナは宣言する。「この街で起きてい  
る事件に関わる、全ての魔法使いの存在の抹消。実行使を持って、  
それらと交戦し排除すること……それが、このわたしの背負った使  
命」

一瞬、俺は彼女の言っている言葉の意味が理解できなかった。

「ようするに殺し合いなんだよ、昴」紅憐が捕捉するように、「ルナは、元々この街に潜む魔法使いの排除のためにやってきた。本来なら一人倒して終わらせるはずだったのに、予想外のことが起きた……何の間違いか、この街には魔法使いが数多く存在していたってわけ。そして、ルナが請け負った任務の内容は全ての魔法使いの抹消。ようするにあたしや守崎さん、沢宮さんもその対象に含まれてるってこと。……あたし、この力を手に入れたときに得体の知れない奴から事の全貌を聞かされてさ。ハメられたよ、力を手に入れてしまってから教えられるんだから。その後、昴の部屋で話してたときにこの力のことを言い出せなかったのだって、あたしが魔法使いだって事を知られなくなかったからだしさ。結局、沢宮さんのピンチを救ったことでバレちゃったんだけど」

殺し合い。味方だと思っていたルナが、本当は紅憐や夜鈴、沢宮さんまでをも殺すためにやってきた魔法使いだったなんて　冗談にしては、笑えない。それどころかこんなこと、すでに冗談で済ませるような話ではなくなっている。

「……ルナ。どうして黙ってた」

「言えるはずないじゃない……！　まさかこんな辺鄙の街に魔法使いがこれだけ存在しているだなんて、わたしだって完璧に予想外よ」口惜しそうな、それでいてどうしていいのか解らないといった表情で顔を背けるルナ。俺は何と言っていいのか解らず、ただ口を閉ざし続けるしかなかった。

「あたしも守崎さんも、出来ることならルナと戦いたくなんてないよ。沢宮さんはどうだか知らないけど……。でも、ルナはあくまでこの街の住人じゃない、外から任務を遂行するためにやってきた魔法使い……。使命は果たさないといけない」

「だからって、今まで仲良くしてきた奴同士で殺し合いなんて……そんなのアリかよ？　ルナだってそんなことはしたくないはずだろ！？」

「それはそうよ、そうに決まってるじゃない。……でも他に手段がないのよ。わたしの帰る場所はひとつしかない。そして、わたしが帰るためには……」

「任務を果たさなきゃならねえ、ってか？　なら捨てちまえよ、そんなもん」

「な」

「帰る場所がないだつて？　ふざけんな、その程度で理由でどうして仲間を殺さなきゃならない？　んなモンおかしいだろうが！　ルナはやりたくないって思ってるんだろ、俺達の敵なんざに成り下がりたわけじゃないんだろ！　なら今ここで決めろ、そんなクソツたれな任務なんざ放棄して、俺の家に帰ってこい！」

そうだ、ルナに帰る場所が一つしかないなんて事はない。ルナは俺と出会い、俺と共に過ごしたその時から、他のどこでもない一つの居場所を見つけているんだから。

「ルナは俺の妹だ。月城瑠奈、それがルナの名前だろ。サンクトリアだの、『月光の聖女』ハイライトプリンセスだの、そんな肩書き全部投げ捨てちまえよ！　それでも何の問題もない、残るのは俺の妹、月城瑠奈っていう存在だけなんだから！」

「なによ、ばか兄……。そんな簡単に、言わないで」

ルナだつて、俺達と戦いたいわけがない。今の今までこうして耐えてきたんだ、いずれこうなってしまうという事に気付いていながらも。そして今もなお悩み、苦悩し続けているルナの姿を見れば俺にだって解る。こいつは決してそんな未来を望んじやいないんだ、と。

「……ちょっと待って、月城くん」ふと、ベンチに座っていたはずの沢宮花凜が、ふらふらとこちらへ向かって歩み寄ってきていた。  
「……話は聞いてたよ。でもね、私に言わせて貰えば、それって月城くんの独りよがりじゃないかな。ルナにも本当に帰るべき場所って言うのはあると思う。それって本物の家族とか、そういうのがあるところだよ。月城くんは、ルナの本物の家族でもなんでもない。」

ただ数日間知り合っただけの赤の他人。こうしてルナが悩んでいるのって、そういう『本物』があるからこそでしょ？ 私は『人形遣い』だから、誰よりも本物と偽者、その比べようのない差つていうのが解るし……もしルナが簡単に本物を捨ててしまえるなら、こんなに悩んだりしないで、月城くんの言うようにしてと思う。……でも、実際はこんな状態。未だにどうしたらいいのかわからないまま、本物への執着心を残してる。私達を皆殺しにしても戻りたい場所ってというのが、彼女の中には存在しているんだよ。それこそ、その本物を捨ててこちら側を選ぶっていう選択肢と天秤にかけられるくらいには、ね」

「……………」ルナは、何も喋らない。

「私はどっちでもいいと思ってる。ルナが私達を殺して、本物を取り戻そうとするのなら　その時は私が月城くんを守るから」

「……あたしは」まだ少し戸惑いを残したまま、紅憐が口を挟むように、「……うん。やっぱり、それだけはルナの自由だと思う。あたしは出来ることなら殺し合うだなんて勘弁って感じだけど……でも、ルナがそれを選ぶんだったら、あたしは何も言えない、かな」  
「ふ……二人とも、正気で言ってるのかよ！？　それって、つまりルナを　」

殺すことも厭わない、という意味。

「冗談じゃねえっ！　そんな結末、俺は絶対認めない！　ルナにも皆にも、もうこれ以上戦うだなんて馬鹿げた事は絶対にさせないからな……！」

「……言うだけなら簡単」唐突に背後から聞き覚えのある少女の声　夜鈴だった。「それでも、もしルナが戦うという選択を取ったとき、昴は彼女も私達も止められない。それに、言葉だけではどうしようもない事もある。決断するのはルナ自身。私達じゃない」

夜鈴でさえ、紅憐や沢宮さんと同じような事を言う。おかしい、何かが間違ってる　そうは思えても、俺は言い返すことができないでいた。心のどこかで、彼女達の言っている言葉もまた正しいの

だと理解してしまっているからかも知れない。……だが、それでも俺は諦められなかった。たとえこの身に力がなくても、言葉だけでは解決できないのだとしても　何もしないまま、ただ行方を見つめるだけだなんてのはごめんだ。

「俺は……っ！」

「……もういいわよ、ばか兄」俺の言葉を遮るように、ルナが重い口を開いた。「確かにそう、みんなの言う通りだわ。わたしは迷ってる。任務を捨ててしまうことを恐れ、今まで築き上げてきた全てを投げ出す覚悟さえ出来ないまま……果たすべき使命を果たして、何もかも忘れて楽になる事をどこかで望んでいるのかもしれない。みんなを殺してしまうことになるって言うのに、そんなことは結果のひとつでしかない、だなんて隅っこのほうで考えてしまってる。

……正直、辛かったわ。ここまで成り上がるため　こうして一人前の魔法使いとなるまでの長い時間。そんな簡単に捨てちゃえるわけないじゃない。努力して、涙して、時には血を流してようやく手に入れた今を、こんな任務ひとつのせいで、全て台無しにするなんて」

「ルナ、お前　」

「お前はやめて、って言ったでしょ。……そう、わたしには名前がある。ルナミス＝サンクトリア、ムーンライトプリンセス『月光の聖女』　そんな、わたしがわたしである証明。長い年月をかけて手に入れた、ちっぽけだけど大きな一歩。もう二度と『お前』呼ばわりされなくて済む地位立派な一人の魔法使いとしての権威。生まれてから決められた道をひたすら歩んできたこの十四年という歳月は、決して軽いものじゃないのよ。それこそ……たった数日で手に入れた絆でさえ、本当に小さく見えてしまうくらいに」

ルナが伏せていた顔を上げた。その瞳には大量の涙、顔は真っ赤に染まっている。それだけでも十分に彼女の心境が理解できると言うのに

「……どうやら決めちゃったみたいだね。あたし的には本当に残念

「ただ……ルナがやるっていうのなら、あたしは自分と仲間の命を守らなきゃ」

「やっぱりそんなものよね、予想はしてたけど。……正直、今まで以上に失望しちゃった。でもまあ、私は月城くんさえ守れたらそれでいいかな」

「……あくまで敵対すると言っただけなら。容赦はできない」

「お、おい、三人とも」

俺の制止などもはや通用しない。ルナに向かって対峙する三人の少女達は、すでに臨戦態勢に入っていた。ルナもルナで、本当に決断してしまった様子が見える。未だ涙を流し泣いているというのに、それでも立ち向かう少女達に向けて言葉さえ送らない。まるでそれが正しいのと言わんばかりに。

「……ごめんね、兄さん。短い間だったけれど、わたし、貴方と出会えてよかった」

「おい……待てよ。今更そんな風に言うな。まだ、選べるはずだろうが！」

「ううん、もう選べない。決めてしまったから」ルナは悲しそうに、だが決意を込めた強い口調で、「……わたしは貴方達を皆殺しにして、もとあるべき場所に帰る。そこに、わたしの全てがあるから。」

わたしはもう、迷わない」

これが 結末。一人の少女が苦悩し、決断した結果だっというのか。

「クソッ！ やらせてたまるかよ、ちくしょう！」

俺は駆け出す。ルナをこの手から離さない為、こんな馬鹿げたことを今すぐ止めさせる為に

「駄目」いきなり目の前に現れたのは、夜鈴だった。「貴方こそ、これ以上関わるべきではない。魔法使いではない貴方は、まだ死なないで済む唯一の人間だから」

ちりん、という鈴の音色が聞こえる。

「やめろ、夜鈴……！ まだ俺が無関係だっというなら、今すぐに



でも魔法使いになつてやる！ だからそこを退いてくれ……！」

「誰も貴方が死ぬことを望んでなどいない。解つて、昴。貴方は今度こそ、全てを忘れて今までと同じ場所へと戻るべき。……だから」

ちりん、

ちりん。

合わせて四つの鈴の音色が、俺をその場に崩れ落とさせた。

月曜の朝というのは、なんとも憂鬱な気分になるものである。俺こと月城昴はベッドからギシギシ痛む身体を引きずり起こすと、ぼやける視界を瞬きで徐々に正常へと戻していく。どうやら寝違えたのか、身体のところどころが痛い。昨日何か運動でもしたわけ……いや、特に何もせずいつも通りの休日生活を満喫していたような気がするのだが

「ふわーあ。……しかし、珍しいこともあるもんだ」

俺は壁にかけてある円形時計に目を向ける。時刻はなんとまだ七時前。つまり、かなりの余裕を持った起床ということになる。これまで学校は遅刻ぎりぎりで登校する、というのが日課だった俺にとって、正直これは驚くべき事態だ。まさか朝食を食べる時間があるのか。授業中に腹をすかして音を鳴らし、そのたびにクラスメイトから失笑されるような日々とオサラバできてしまうのか？

「……とは思ふものの、朝食なんて作る習慣のない俺には結局パンを焼く程度のことしかできないんでしたとさ」

一人呟きながらリビングへと向かう。確か、もうすぐ賞味期限の切れてしまう食パンが何枚かあまっていたはずだ。それでも焼いてしまおう。そこまで考えて台所へ向かうと、そこには何かおかしなモノが置いてあった。

「なんだこれ。……いつの間に作っただけ」目の前にあるモノ

鍋の中には、カレーが入っていた。「昨日カレー作ったんだっ  
たか？ いや、でも俺ってカレー作ったりしないよな……、んん？  
じゃあ、なんで置いてあるんだろう」

一人暮らしの俺が、まさか残るほどカレーを作り置くとも思えな  
い。大体、自分で作るのが面倒なので、大抵はコンビニ弁当やらで  
済ましてしまうのが俺の基本的な食生活なのに、このカレーの存在  
は意味不明、というより謎過ぎてわけがわからなかった。

「いやまあ。ここにあるってことは、俺が作ったんだろうけどさ。

……つかしいな、寝ぼけて記憶喪失にでもなっちまったか？」

ずきん、と脳裏で何かか傷む。感触的なものではなく、何か大切  
なことを忘れてしまっているような、そんな感覚的な痛み

「……ま、いいや。とりあえずラッキーっつーことで。今日の朝食  
はカレーだな」

そういえば、ヘンな夢を見ていた気がする。何だか上手く思い  
出せないが、とても大切で、ずっと覚えていたような儂い夢を。  
自分でも少しバカらしいとは思うけど、何故だか今日はその夢の内  
容を思い出したくなるような気分だった。たまにそういうこと、な  
いだろうか。きつと良い夢を見ていたに違いない、覚えてもいな  
いのにその夢のことがやけに脳裏にこびりついているような感覚。  
皿を取り出しご飯を盛り、その上に暖めたカレーをかける。やけ  
に上手そうな匂いが鼻をつんと刺激する。カレーはかなりの好物だ  
し、こうして久しぶりの朝食を彩るには文句なしの一品であること  
に間違いはなかった。だが、何故か既視感のような、何かもやもや  
としたものを感じるのは何故だろう。昨日も食べていたからかし  
れないが、何故かこの気持ちが始めてのものとは思えなかった。  
……やっぱり記憶が曖昧だから、記憶喪失になったのか。なんて、  
有り得もしないことを考えながら食事を開始。ものの数分で一気に  
平らげられた残りのカレー（全部）。

「ふう、食った食った。久しぶりの朝食だけど、結構入るモンだな  
あ」

俺は食事を終えると、そのまま食器を台所へと運ぶ。一人の食事はいつもの事なのだが、今日は何故だか少し寂しい気分になった。柄にもなく手作り料理なんてするからだろうか　なんて考えていると、すでに時間はそろそろ出発の時刻へと差し掛かっていた。いやまあ、いつもはこれより大分遅いのだが、今日はせっかくの早起きデーである。どうせなら早く登校してみるのも悪くはないだろう。いつも遅刻ギリギリに教室に現れることで有名な月城昂が珍しく朝一番に登校　なんて、クラスメイト達からしてみれば驚きわめくくらいの一大事に違いない。……自分で言っていて少し情けなくなってくるが。

「んじゃあ、今日もはりきって学業に励むとしますか　」  
孤独はもう慣れている。一人暮らしも板についてきた頃だし、とつくに自立できているとは自分でも確信している　だというのに、今日は何故だか一人の部屋がやけに広く、自分がちっぽけな存在のように思えて仕方がなかった。

それはとある春の一日、その早朝。

全てを失い全てを取り戻した少年は、行き場なく生まれた意味さえ解らない感情だけを胸に秘め、今日もまたいつもと変わらぬ平凡な人生を歩んでゆく。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2585d/>

---

ウィザード～魔法使いは月に照らされて～

2010年10月10日14時36分発行